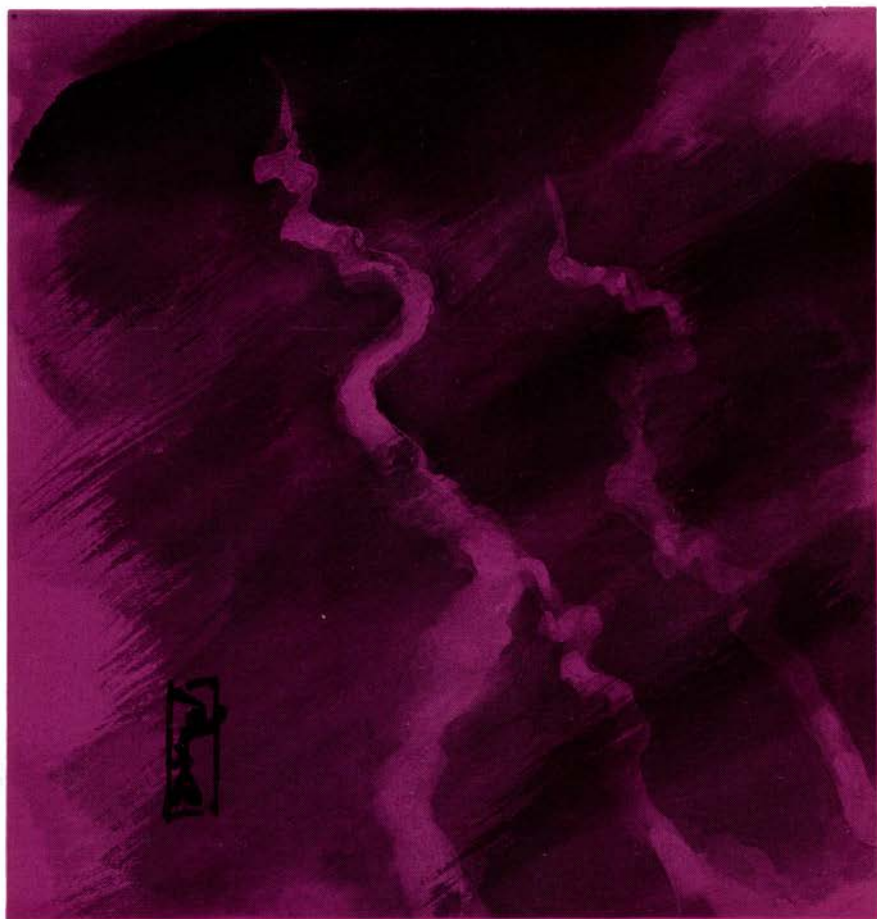


川柳塔

昭和六十二年六月二十五日印刷
昭和六十二年七月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷七三四号



日川協加盟

No. 734

七月号

750ml 33.3% 白内標準的な小売価格 税別 販売サントリー株式会社



美しいものは長い時間に磨かれ
ゆつくりゆつくり育まれていきます。
選びぬいたモルトの深さと
豊かなボディが
鍛えられた舌をうならせるリザーブ。
まろやかな一滴一滴から
静かな余韻が生まれていきます。

NHK 学園近畿川柳大会

日時 昭和63年9月18日(日) 午後1時
会場 朝日生命ホール

大阪市東区高麗橋5-50
地下鉄御堂筋線・淀屋橋下車すぐ

宿題(事前投句)と選者

①「土」 野村太茂津選

②「古い」 卜部 晴美選

③「酔う」 堀口 北斗選

席題 選者 川広瀬反省・永田帆船

各題2句

講演 亀山 恭太

◆事前投句締切 8月15日必着

◆投句先

〒186-110 国立市富士見台2-36

NHK学園川柳センター

近畿川柳大会係

◆投句料 一、五〇〇円(作品集代を含む)

◆参加要領

◆大会へ参加希望の方はご自分の住所氏名の宛先を書いた返信用ハガキを同封して下さい
◆事前投句は、普通の便箋、またはこれと同じ大きさの用紙二枚を、いずれも真中にタテの線を引き、一枚目の右半分に郵便番号、住所氏名(ふりがな)電話番号、NHK学園川柳講座受講者の方は受講番号、大会への出欠を書き、一枚目の左半分に宿題①の作品、二枚目の右半分に宿題②の作品、左半分に宿題③の作品を、それぞれ二句記入して下さい。

みどり

西尾 栞



すっかり清々しい青葉の頃となった。

緑に囲まれた自然の中で、木々の発散するさわやかな香りを胸一杯に吸いこむことは、素晴らしい健康であり、如何なる薬にも勝る「自然健康法」である。

誰でも経験のあることだが、たまに森や、山など自然の中に入ると、本当に落ち着いた気分になるし「空気が旨い」と

感ずるのである。特に日頃都塵にまみれ、神経をすりへらしながら生活している都会人にとっては、たまったストレスが緑の中に発散されて、生き返るような心地になる。

六月五日は、地球清浄を望む世界的な環境整備日で、我が国では、五日から一週間を環境週間として、樹木を植えることを奨励している。

ブラタナス一本の樹で、自動車が一キロメートル走る排気ガスを清浄化する。だからブロック塀の替りに生垣とすることを奨励するのかわかるのである。緑の効能はそれから発散する芳香性物質フィトンチッドには殺菌作用や、人体に好影響を及ぼす働きがあり、それが心身の健

康に特効薬の役割を果たしている。

自然破壊は緑の資源を破壊するのみでなく、健康資源をも破壊していることになり、文明、文化、そして医学が急速に進歩する一方で、新しく諸々の現代病が生じているのも、一部はそのせいではないかという気もする。

それに人間、何ことも自然に逆らうとろくなことはないというが、健康、健康、健康にまざる宝なしと言われている折柄改めて自然、とくに緑の大切さを考えてみる必要がある。

というて最近、女の子の名前や、タレントに、○○みどり、○○○緑という名をつけるのが多いが、名前だけではO₃(オゾン)は発生しない。

座右の句

旅枕雨にしあれば雨の詩

私の句

大臣の素顔が好きな花鋏

驚見 章

(葉)

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

みどり

西尾 葉 … (1)

ホテル住いの猫

東野 大八 … (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 葉選 … (4)

自選集

東野 大八 … (32)

■川柳太平記 (122) 川柳の群像 中村富一

東野 大八 … (36)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (三十六―三十七丁)

阿達義雄 … (38)

江戸川柳富籤志 (2)

黒川紫香選 … (40)

水煙抄

谷垣史好 … (42)

秀句鑑賞

柳楽鶴丸 … (35)

「同人吟」
水煙抄

橘高薫風選 … (73)

愛染帖

八木千代選 … (61)

へ女性コーナーへ 茴香の花

八木千代選 … (64)

句評リレー 藤井明朗・神平狂虎・竹内紫鑄・小出智子

(66)

ホテル住いの猫

東野 大八

私の家の南側の鼻先にスイスという連れ込み専門の、洋館三階建てのホテルがある。夜ともなれば全館限なく赤い豆電燈が毒々しいばかりに照り輝く。おかげで私達老夫婦の住む隠居所の一棟は、そのネオンの照り返しでピンク色に染まり、なまめかしいこと一通りでない。

「ヒヤア、これは新婚向きの家だ」

と心ない友人は奇声を発して、古稀もとうくに過ぎた私たち夫婦をイヤな眼で眺める。

ところで四年前の木曽川大氾濫のため、ホテルの下を流れる木曽川の堤防補強工事が大々的にはじまった。おかげでそのホテルは移転取りこわしとなり、昨年暮からネオンが消え無人の化物屋敷然とせずまりかえった。

ここで話は変るが、水禍襲来以来、私の家の周囲では野良猫がやたらに増え、大げさにいえば歩けば蹴つますく程、種々雑多な大猫子猫が傍若無人にカッポシ、遂には拙宅の土蔵を改修した物置の二階にまで数尾が住みついた。それを追い出すのに家人は躍起になり猫嫌いの私はヘトヘトになった。

言いまわしの個性 (2) 先輩作品の分析……………竹内紫鏑……………(70)

■中国吟行の旅に寄せて 花は舞う大唐の春……………東野大八……………(74)

俵万智さんの西安紀行……………袖浦紅子……………(77)

小林由多香句集『いさり火』／土橋螢・両川洋々……………(78)

藤後実男遺句集『蝶タイ』／保西岳詩……………(80)

越村枯梢句集『川柳二河白道』／編集部……………(81)

初歩教室……………阿萬萬的……………(82)

「靴」……………松本ただし選……………(84)

一路集「祭」……………江原とみお選……………(84)

「写真」……………時末一灯選……………(85)

柳界展望……………(86)

本社六句句会……………(89)

各地柳壇(佳句地10選／永倉僕川)……………(93)

■7月各地句会案内 107

■編集後記 109

座右の句

こおろぎのように泣けたら涅槃かな (薫風)

私の句

寂しくて赤い物だけ見て歩く

小村 てい子

私の家だけではない。近所隣の家々にも、

これらの野良猫は忍者の如く出没し、台所どころか座敷中を跳梁して、モノはかすめとるやら排せつ物はたれ流し、さかりの頃になると随所で奇声を発して夜も眠れない。

さて、隣保班でネコ対策が出はじめた昨年冬ころからビタリと猫の姿が消えた。妙なことだと思つたら、この猫どもは空屋のホテルに集つてゐることがわかつた。ホテルは無人だがこわし屋が入るまで家具調度はそのままだ。ウワサによると猫どもは各客室の羽根ぶとんにぬくぬくと寝そべり、夜ともなれば賭場を開き酒盛り三昧で、私のカンでは俳句や川柳の句座にも興じてゐるらしい。

私は猫は飼猫まで姿を消した三味線屋の手先が横行した懐しい時代を思い浮かべた。

「猫は胸の部分が一番いい音色で、脇腹へいく程皮は薄い。随つて猫一尾に三味線一丁だ」という話を思ひうかべて、凋落した三味線アームをオカシ、エレキギターを弾いてゐる片足大にかじられた黒猫の大ボスの姿を想像し、文字通り「畜生め」とばやいた。

ホテルはもうすぐ解体されて消滅する。奴等は長い旅に出るほど気のきいた一族ではない。私は次々とハットリクンに変身する忍者姿の彼等を思ひうかべ今日もユ一ウツになる。「席題は『アホな人間』というのです」といつたボス猫の夢まで見た。



西尾 栗 選

倉吉市 奥谷 弘朗

方言でどなる道連れ居て楽し
道連れも私も五分と五分の虫
力には力と思うから若い

すらすらとうそが喋れるから恐い
食うて寝て自由に生きて粗大ゴミ
シベリアを耐えた同志に通うもの

松江市 舟木 与根一

税務署で利口になった領収書
葉桜ですこし落ち着く一年生
農政のひずみに負けぬ揚雲雀
喜劇にも助演賞妻の白髪ぞめ
温い血が流れロボットがたが来る
阪神が勝ち朝刊へ起きている

岡山县 嘉数 兆代賀

家計簿の溜息を聞くめし茶碗

中流を意識明日のレール敷く

七味たつぷりかけて人間不信の日
処生術の一つ上手な物忘れ
敗けた日のこうもり傘が開かない
雨だれも最後を飾る刻光る

倉敷市 小野 克子

七夕や今日も戦う国がある
乗り変えて灯台に立つひとり旅
家中のピンクさらって嫁に行く
種切れの夫婦がまんが読んでいる
伴奏に乗らぬふたりの枯れすすき
内緒よというから内緒歩き出す

藤井寺市 吉岡 美房

菖蒲湯でうちに裸の王子様
母の日の父に一本よけい付け
弁当に妻の機嫌が詰めてある

搜索の部屋の小鳥に罪はない
国会でマナーは期待せぬことだ
戦後未だ元將軍の天寿聞く

米子市 青戸田鶴

つながりがあるので同じ橋渡る
深い意味わからぬままに返事する

読み終えて豊かな時を一人もつ
丸洗いしたい私のいやなこと

平凡な暮らし続くとまだ想い
なんとなくおかしくなつてゆく日本

松江市 恒松町紅

寝たきりの老父五月の躁うつ
子の夢を包んで光るシャボン玉

氾濫の工事は後手になる川面
中心が少し狂つてきた夫権

お隣の陰口聞いたカスミ草
カラオケに敗北感をもつ音痴

大阪市 西出楓楽

花言葉なまじ知らない方が花
ライバルに背中を見せている余裕

家系図のシミはお金で消しましょう
神仏も虫の居どころあるらしい

嫌煙権主張しているらしい咳
あいたた自分の影を踏んでいた

岡山県 土居耕花

ナムマイダだけで分かると伝達

大掻きで三途の川が渡れるか
寧丸を落款にして正座する
片仮名のカの字を鴉知っている

葉桜を見上げてるのは哲学者
タンポポよ許せよ孫の乳母車

飼育係にアシカが恋をしてしまい
まるでトドみたいな主婦がふえました

へソを見てこわい顔する人はない
銭湯でこれが私のすべてです

湯に浮けばいっそおかしいあばら骨
足蹴りにしたのは己が自尊心

桜井市 岩本雀踊子

母の日に妻の肩をもむ凡夫
無の中で自分の邪心見てしまう

ふん切りの付かぬ心へしずり雨
不仕合せな女の好きな泣き羅漢

悲しみに耐えてるうちのマリアさま
武装した女に寂しくなる枕

和歌山市 牛尾緑良

一日を生きると明日がやつてくる
小さめでいい寄り添える夫婦傘

ささやかな野心を妻も持つっている
溜息も同じところ出る夫婦

立ち止まる影は私の未練かも
万歳の両手拳にかわつてる

熊本県 有働芳仙

乱獲の海豚があきれる海豚供養
いい娘だよ親の苦勞を見てたから

八尾市 宮西弥生

熱い息かけると解けます恋の謎
肩車見せたいものは見ておらず
年金の小銭の音の淋しい日

渡り切るまでは消えてはならぬ虹
生きていてよかつた酒とめぐり逢い

二次会で本音が言える顔が寄り

八尾市 高杉鬼遊

わが家にもメニューがあり冷やつこ
伊勢えびの主役を皿が気にいらず

金のない男が軽い北新地
六十もあとわずかなり絵ローソク

西日さす一部屋を借り朱のカンナ
ヤクルトのおばはんほどに負けられぬ

弘前市 波多野五楽庵

一期一会のパレットナイフが動き出す
じゃんけんぼん妻は時効にしてくれぬ

花憂さの日溜りにいる煙草の輪
形容詞動詞最後に金の事

自販機も売ってくれない札の皺
待合室故障自慢が一人居る

平田市 久家代仕男

親切は小さいがいい花すみれ
どの花も口説き上手な蝶の管

千俣を覗き死にざまふと思つ
雨だれの音呪文となる夢路

各駅で小さな善意いつもある
ふりむいて一人の影は一人なり
そしてその夜すっかり魔女になりました
一枚の名刺ではじまる命がけ
五時からの女ですこし厚化粧
ベッドから落ちててもひとり笑わない

米子市 林瑞枝

北斎の絵から先祖が匂い出す
媒酌の席で新婦のソロに酔う
白いドレスの裾ひるがえしクレオパトラに

髪結うて新婦は花のシンデレラ
亡母は又遠い景色の中で舞う

目覚しが生きるリズムで四時に鳴る

和歌山市 西山幸

はつ夏の膝の寒さの孤独かな
豆御飯生きてるのはいいことだ

しらしらとにせあかしやの嘘が散る
バラソルで私を隠す私です

絹張りの扇子で愚かさを飾り
やはり裏表があつた後日譚

大阪市 津守柳伸

控え目な酒で十八番をたんと持つ
爛ざまし集めて母のかくし味

自画自賛上手に使う爛ざまし
五里霧中試行錯誤のひとり酒
今生の土産はつきぬ瀬戸鳴戸
清貧に耐えぬく父の浪花節

京都市 松川杜的

山等は無いが山号のつくお寺
自慢じゃないが老人医療無疵です
言うなれば器は料理の着物です
阿呆くさい五ツ木だんごが売れる春
金封の黄色ばかりが減る余生
街録のマイク美人にばかり聞く

米子市 林荒介

声にして昨日の事を確かめる
満天の星にわたしを見て貰う
馬瘦せて昨日の夢を喰らうのみ
迷子札杜の深さをまだ知らぬ
膝を抱えれば故郷が遠くなる
潮ときは今だと思ふ弓の弦

名古屋市長 越村枯梢

老残をくすぐるCMまむし酒
好きですと最初に言っけ負けている
不倫などよいではないかおぼろ月
医者に見立ては何でもなかった心身症
頻尿に医者という字は疎ましい
路地裏に咲いてもバラはバラの花

兵庫県 遠山可住

逢いに行く鏡へウインクアカンベー
勉強がいやなら野球なとやるか
われ老えり柳に風と聞かいや味
むらさきに雨が染まっけ菖蒲咲く
唇を星のロマンに盗まれる
駅までの距離で結論言うておく

富田林市 板尾岳人

地獄から届く便りは不眠症
戦争を知っているので峰歩く
折々に戦争ごっこするねずみ
人妻を騙し切れない水中花
七月の雨を憎んでいる渡し
愛されているのに拗ねている羊

唐津市 久保正敏

フグ料理財布痺れる領収証
小喃を聞いたことない二重橋
信管が転がるテロの寒い部屋
打掛が明日の予報を聞いている
欠航の言い訳出来ぬ橋が出来
一面はとっても冷たい三面鏡

豊中市 田中正坊

なら・シルクロード博(五句)

飛火野は天山南路へ続く道
熱砂越え波濤を超えてきた浪漫
女体めく壺眠ってる碧い海
エンゼルも飛天も群舞する構図

西安へ夢はふくらむ唐詩選
十二神将の中の一人が父に似る

西宮市

林 はつ 絵

投げられた小石だいいじにとつてある
スターよりピエロの芸の深い羨
ケセラセラ歴史を変えざる事でなし
アフガンの野にもタンポポ盛りとか
ひとり酔う春の星座を置く窓に
まぼろしの敵の姿に負けている

尼崎市

春 城 年 代

その義理を申さば戦後からのこと
右足を病んで左がよろけだし
百八十度向きを変えたいかたつむり
男は強いと誰がいうたか弟よ
姉としてどこまでやれる血を疎む
なんとなく拘わるものを届けられ

尼崎市

春 城 武庫坊

春の河怒りの顔をひたかくす
白旗を振る潮どきを見失う
盗まねば教えてくれぬ芸の道
裏切りに耐える心を置き忘れ
れんげ田に生れた恋がよく育ち
昭和史の裏は奈落に通じてる

米子市

菅 井 とも子

洋蘭の香りにむせたフルムーン
豊かさに馴れて何でも捨てたがる

地続きが売りに出されて気にかかる
名古屋で

三の丸で見ている鯢と花嫁と
ひとり旅自信無くした忘れ物
何処へ行っても赤いポストでほつとする

倉敷市 野 田 素身郎

用心深い観光客は傘を提げ
手助けをしたいができぬ後遺症
保母さんの仕事が増える花が散り
病院に来てまでくつつきあっている
一年生が入りはりきる二年生

倉敷市 稲 田 豊 作

大ジョッキ持てば王者という気分
新築にローンの鬼が同居する
幸福な顔は仲間にくれぬ
貸した金けろツと忘れた奴の顔
貧農の汗を鴉よ喰うのか

伊丹市 樫 谷 寿 馬

花粉症妻は幼きクシヤミする
男にもピンクの季節桜餅
淀みなく焼香の列流れゆく
僧が脱ぐ白き花緒に散る若葉
湯上りへ赤子と分ける天瓜粉

松江市 柳 楽 鶴 丸

二十一世紀が見たいから禁煙しようかな
僕の英語はメードインジャパンです

コレクシオンで再婚雜を買う
リンゴのホッペに愛らしいミトンの指
七草粥象牙の箸が不釣合い

柳井市 弘 津 柳 慶

濡れながら妻は私を待っていた
口紅で鏡へ悩み書きなぐり
燃えきって寂しく故郷へUターン
夢一ぱい胸に包んで男意地
雨風にビヤガーデンの灯がゆれる

竹原市 小 島 蘭 幸

晩年の亡父を思っているコップ
まだ青い男に聖書置いておく
雨の砂丘風の砂丘を見ていたり
竹の子がぐんぐん伸びる淋しさだ
胃の検査終りやすらぐ胃となりぬ

竹原市 森 井 菁 居

したたかなプロレタリアの一行詩
華やかな人生葬式までのこと
年甲斐もなくジーパンの旅づく

子供三人(二句)

外国語進むほかなし長女次女
本に名前書けと長男もう言わぬ

京都市 都 倉 求 芽

丸い石ばかりを拾う春の浜
ひらがなの丸みが温い旅日より
メーデーを横目に道路工事休まない

夫婦しておんなじ思い違いする
お見舞いが風邪の神さん置いて去に

笠岡市 松 本 忠 三

しあわせは妻と喧嘩のできる日々
札つきの悪ですそれでも我が子です
点数にならぬ力を抜いてやろ
一昔前の話に花が咲き
瘦我慢好きなら好きと言いなさい

下関市 石 川 侃 流 洞

急流の棹へ船頭黙秘権
河豚供養人間勝手だと思ふ
引き抜きへと金あつさりくれてやる
長生きをしてねと一合量られる
遺伝子をいじると無精卵孵る

高槻市 辻 白 溪 子

花活ける婦警和服に隙が無い
冗談に受けとめ恥をかかせない
貸農園苺も植える子沢山
記念にと写真屋鹿を連れて待つ
きっかけを司会は面白がつて聞き

浜田市 中 川 幸 一

とつときのジョーク女房に通じない
横書きの履歴書も書き二度の職
団らんというても妻と二人きり
何べんも騙されながら自民党
ライスカレーに福神漬のない不満

美禰市 安平次 弘道

偽善者が軽いつづらを提げてみる

うぬぼれは止せと揺れてる水鏡

コラム氏に乾杯意見びたり合ひ

刃こぼれを確かめ妥協考える

石けつて見落す神のキーワード

兵庫県 辻 文平

生きてゆく演技仏の顔もする

さよならの後で重たいひとり傘

母さんの涙が重い重い春

鍋底を磨いて姑に迫いつけず

ほほえみで千の悩みを聴く仏

諫早市 原田メイシユン

出世する道だよ阿呆になるもよし

辞書引いて変人あげ足取るつもり

五人目が嫁って戸籍は二人きり

札束を握れば変る肝っ玉

鼻風邪を引いて薄着の酔いが醒め

東大阪市 森 下 愛 論

酒のない日の空白にボケーとし

小遣いはたんまりパチンコはよく入り

ひとり居の寂しさ仏壇へ恨み言

様にならぬは男米をとぐ姿

締めたかな消したかなひとり出のあと

守口市 羽 原 静 歩

漢口^{ハンコウ}の昔を想う雲の峰

可愛い女で柔道は黒帯で

ノンちゃんの記憶の中に棲むおんな

どん底の端株それでも離さない

旅衣 木曽路まつやまチューリツヒ

大阪市 西 森 花 村

ほこはこの芋と気が合う古新聞

頼まれものの綺麗に忘れた長話

二枚目の恋をしてても瘦せられぬ

責任はともかく産児は双生児

三枚目女房にこわい顔をする

大阪市 江 城 修 史

子供の日母の日五月の風うまし

日銭追う暮しに花道などはない

バイク乗る老妻はお世辞の言えぬひと

夫婦愛同じ心を温め合う

労わりの言葉に老いを意識する

大阪市 河 井 庸 佑

横車押してぎくしゃくさせただけ

身勝手な親と子どもに思われる

伸びる芽を摘んでいないか気にかかり

実力を信じたばかりに勇み足

親のした通りにしたのに叱られる

大阪市 黒 田 真 砂

約束をしてから重い落椿

雑草の意地ふまれてもふまれても

命果てるまで美しくいたい欲

裁ち切った絆にもろい涙雨
又少し欲がからんだ電話口

大阪市 本間 満津子

気の弱い鬼が棲んでる寡婦の家
風邪ひいても後のことなど考える
足踏みをしながら前を見つめてる
医療費が只で待合室のボス
何故かしら春の味覚はほろ苦い

大阪市 神夏磯 典子

短かすぎる紐を必死に結んでる
蝶結び紐に夢あり幸があり
腰紐が支える女の見栄と業
再就職ときどきゆるむ靴の紐
紅白の紐に一生縛られる

大阪市 藤田 頂留子

縁日の日にしか参らぬ信心家
もの言えば首に吹き矢がつきささり
左手は文句言わずに荷物もつ
その内に八百八橋になる地球
表彰ものだね霊柩車の無事故

大阪市 大塚 節子

泰然自若と見えてるだけの楽天家
家中へ当りちらして日の長し
しっかりとしている女詐欺にあい
さよならを桜時雨にせかされる
言わんでもええこと言うて寝つかれず

大阪市 古川 美津枝

興味津々もう一度ほしや十五歳
孫のよな沖田総司にかぶりつき
便りする友は遠きに居て聡明
リモコンの説明書と大相撲
スーパードライ夏がうれしい貝割菜

松原市 玉置 重人

道草は決してしない伝書鳩
意気壯ん背すじがピンと伸びている
風みどりポックリ寺も混みはじめ
年金で暮らしさほどの欲はない
ジャンジャン街香車の好きな串カツ屋

松原市 佐藤 藤子

猿沢池ことのついでに混んでいる
学園のみどり滴りくる序曲
夕暮の駱駝は遠い瞳をしてる
履歴書を一度も書いたことがない
早ければそれを気になる娘の帰宅

松原市 北野 久子

粗大ゴミどころか連休よく動き
心ブラも嫁と娘を連れて行き
まだ弾むものあり六十の握手
捨てる気で出した古着をまた仕舞い
遺産分け済めばだあれも寄り付かず
びびってるしけてる鼻毛だけ伸びる

岸和田市 福浦 勝晴

煮て食おうと焼いて食おうと当りクジ
逃げられたおんなにロビーで逢う幕間
嫁はんとラブを語った日もありき
梅雨近く拾って捨ててる空財布

岸和田市 清野 こう

世界の目集め登頂のチョモランマ
国境を越え友情のチョモランマ

山男眠れる友へ捧ぐ酒

登頂成功隊員涙でする握手

登頂成功高々上げる鯉のぼり

岸和田市 原 さよ子

海女の吹く口笛のどか鳥羽の海

幼稚園憎まれ口も習てくる

息子もう親馬鹿振りを見せている

くじけそうな晩学仲間に励まされ

三日間喋り通して旅終る

岸和田市 古野 ひで

もう一度声が聞きたい仏間の灯

憎みあう日もありました共白髪

青空へ心の扉開け放つ

成功の陰の苦勞の妻を誉め

一浪のそれもよからう子を訓し

堺市 中川 滋 雀

人生も花もいろいろ咲き違え

王義之の迫力ため息ばかり書く

中ヌキにした履歴書はつつくまい

はつ筋の雑踏メガネが二つ要り
点け役と消し役話のウマが合い

堺市 高橋 千万子

子にかける橋流れても流れても
この倅を長く長くとリンゴむく

問い詰めて問い詰めてなおふびんなり

陰口も甲斐性ものだなとは認め

この辺でつんぼになっておく話

米子市 小西 雄々

呼び合えば何時も波長の合う夫婦

お喋りもできて満足したグルメ

蛸壺の奥にぎやかな呪文聞く

牛の尻叩いた頃の土も痩せ

魂もギャルの神輿にゆさぶられ

米子市 石垣 花子

足並みを黙って揃えてくれる妻

一周忌女の温みひたかくす

馬鹿にした富山のくすり熱がとれ

雑草の中で水仙うぬぼれる

花束を抱かせ單身赴任させ

米子市 田中 亜弥

子に継がす土に肥やしはやってある

北壁のおしやべり風と雪のこと

わたくしの細胞みんな癖だらけ

三日坊主どうにか四日目を歩く

花たちよ簡単に散り急ぐなよ

米子市 野坂 なみ

深く耕やそう土の呼吸が楽になる
蓮華野に辿りつくまで歩きます
赤い靴ぐらひは許すパスポート
ゆたかさへ対岸からの石礫
くどの火に濡れた心を干した日も

米子市 寺 沢 みど里

白髪になつても続く天がある
生命線伸びておんなに暇がない
飼犬とときには深い話する
息切れを枕に氣付かれないように
行楽の列へ忍耐強くなる

米子市 政 岡 日枝子

言魂へ明るい言葉教えてる
いつからか父より高く飛ぶトンボ
お袋の味がグルメの元祖だろう
賑やかに或る日別れがやってくる
ミレーの絵母はどこかに隠れてる

米子市 沢 田 千 春

太陽に花は素直に踊りだす
父の忌に聞こえてくるよ枯すすぎ
方言をのせて発車の無人駅
平凡なぐらしに青い鳥がいる
鈴蘭が匂うとまわる走馬燈

和歌山市 堀 端 三 男
西方浄土いみじくも夕陽いま沈む

血走った眼をして軍鶏を抱いている
米寿まで生きりや勲章呉れそうで
幸村の遺徳をつなぐ真田紐
自己催眠今更何を慌てても

和歌山市 福 本 英 子

連休のおつりに街の溝掃除
酔うてきた訳は無言の父の背な
野心家の動く気配へ銀行家
越冬のメダカに負けた金魚鉢
着飾ってきたのに若さには勝てず

和歌山市 松 原 寿 子

鏡のなかでなぜか本心透けている
美しい嘘へシグナル青く冴え
まざれなく添うたは夢のひとこまか
君の瞳が背にある限り振り向かぬ
其処までを素敵な人と縄を綯う

和歌山市 細 川 稚 代

物忘れ重なり自滅する心
宅急便友の情けの蓬餅
ハプニングついてゆけない束ね髪
童心に戻してくれる駝鳥の子
でもでもいつも負けてる膝小僧

和歌山市 福 井 桂 香

野暮なこと言うまいばたん真つ盛り
アメダスの都合ファミコンでもしよう
エンゲル係数あなたチューハイのせいよ

ヘッドライト消してお別れのペーゼ
風と詩 私の胸でレイアウト

和歌山市 桜井千秀

記憶の糸たどると母の胸や背な

セントポーリア出窓で夢を見つづける

勝率八割夫はつねに組み易し

同じ穴の貉でよう似た騙し方

チェックしたページに残る雨の音

鳥取県 両川洋々

未練まだ女の二の矢よけそびれ

霊長目ヒト科うぬぼれ捨てなはれ

キューピットの弓矢愚妻に突き刺さる

枕木の息切れ貨車が聞いている

晶子なら末期の愛をどう詠う

鳥取県 林露杖

藤棚の下で繙く書を漁る

華やいで翳の寂しき燕子花

鯉幟眼玉眩しい子無し妻

句集出す人あり作句さばる人

女流パワーサラタ記念日有夫恋

鳥取県 松下たつみ

修正液にだまされまいと裏を読み

その裏の裏をのぞいてから独り

減反のみんな無口で冬を越し

販売機ここでも言わぬ有難う

職の無い朝もきつちり起こされる

鳥取県 中原諷人
配られた水から母を誇張する
おっぱいが大きすぎてもお困りで

風を食べたべ騾馬も四十の半ば過ぎ

空気粗末に吸うて懺悔をなされるか

還暦へ棘ある花の朱を届け

鳥取県 中原汲香

てっせんも野心あるから蔓を持つ

野いばらも燃えてきれいな貌をする

和服着ていかにも女らしくなり

夏が来て馴染みの花が蘇る

野心満々遂げて一節ずつ伸びる

鳥取県 土橋螢

蝸牛角ひっこめている暑さ

忙しいので幸福がわからない

男はいつも争いを掌の中に

暑いあついとスカートを丸く脱ぐ

君と呼ぶ友がたくさんありがとう

唐津市 仁部四郎

学長の式辞メモして父帰り

亡母へ摘む花盗人は許されよ

散り際のよさで顧問を二度務め

保護者へも出せぬものかな皆勤賞

皆勤賞亡父の写真と並ばせる

唐津市 田口虹汀

相談に乗れば私も共犯者

反抗期包みきれない母の愛

善人が多くて美点光らない

帰る日も近いと知った心電図

傘寿なお知らない事が多すぎて

唐津市 浜本義美

舟人の挽歌列島は陸続き

百姓に連休はなし田植する

蕨狩り無人の駅の賑やかさ

玄海を不夜城にして烏賊火燃え

缶ビール泡の分だけ安くなり

寝屋川市 柴田英壬子

ふるさとの最後のとりで義兄も逝き

ご近所の笑顔が頼りさし木する

たんぼが自由な傘になって飛び

冗談が本気の駒になるヒント

一週間届けそびれた旅みやげ

寝屋川市 稲葉冬葉

ブツンをしてから長い自己暗示

いたずらが過ぎて木馬が止らない

空咳のひとつで変る風の彩

実年の生活へ孫が寄ってこず

君はエンゼル明日の風を疑わず

寝屋川市 岸あやめ

ネックレスだけはサッチャーさんみたい

居酒屋で聞き手の居ない自慢する

花の散ることも寝たきり愚痴にする

肩書が取れたら温い人だった

飼われるに馴れたウサギは小屋を出す

島根県 小砂白汀

蜘蛛の糸花びら一つぶら下げる

一息いれたいところにある祠

白と赤隣り合わせて厳と咲き

清掃車公休七日はひどからう

活きたまま食わるるわが身見てる鯛

島根県 西村早苗

わかつているのに気持ちを問いただす

逢うひとが居るかのように街の角

目玉焼馴れたとまんが文字でくる

女でもよからう十指あるじやない

声帯を変えてテレビに目撃者 島根県 堀江芳子

尼緑之助先生を偲ぶ(一句)

大きさと温み日を経ていく胸に

伊勢神楽 笛は昔のよさと呼ぶ

夫婦でもライバルまずい茶うまいお茶

順番の恐さと順のない恐さ

想い出にまた触れてくる如露の水

島根県 榊原秀子

子離れが頭と心かみ合わぬ

亡弟よ今年も山の藤が咲く

母の日へ来る花束と娘の温み
夕牡丹はらり音なく散る別れ
居ながらの新緑しあわせだと思ふ

島根県 梶 みどり

喪の衿を清めて窓の風を入れ
職人の手のぬくもりを抱く蛇の目
あじさいの色かえさせる愛の雨
影法師月と二人の塾の道
花へんろ又逢えました坊の宿

島根県 錦 織 文 子

古井戸から昔話が湧いて出る
古井戸のその冷たさをすくいあげ
倅せの中で四恩に気づかない
誕生日私の青春ふり返る

ナツメロの口笛茶畑のあたりから

今治市 越 智 一 水

子が出来たいのにおむつ干してない
耕せば土がこたえる土の詩

鳥取砂丘にて

ああ砂丘妻が娘の声を立て
老妻と手をとる合うも大砂丘
夕焼へ風紋のいろ風のいろ

今治市 矢 野 佳 雲

勇み足許す夫婦という土俵
帰る家あるのに駅のワンカップ

背番号一を貴方にならあげる
廃船の余生フナムシ遊ばせる
子育ての姿問われるおちこぼれ

呉 市 林 野 甦 光

頬杖に朝の景色がぼけている
大げさな事に男のリアリズム
真ん中に置くレシートへ目のやり場
月曜日の好天すこし蛇足とも
一人になった時を考えている二人

呉 市 楨 田 英 詩

人の渦に巻かれて街は懲りごりだ
握手すると感激するのもトリックか
神様が間引き忘れた人生譜
冷静になれと鏡は言うけれど
白紙つづく日記に答え書いてある

奈良市 宮 口 笛 生

予定表すっかり狂い入院す
大部屋の療養かばい助け合い
病院の退屈早い食事すむ
お見舞いへ手術の傷をみてもらい
病院の暮しに馴れる不倅せ

奈良市 天 正 千 梢

いがんだ顔で心は喝采送ってる
でしゃやいて流れ弾うける破目
摩擦を避けたくて紺のスーツにし

尻叩く美しい言葉さがしてゐる
義理のつき合い多すぎると思わんか

出雲市 吉岡 きみえ

酔うたかなだれかさんに電話したくなる

ひいふうみ正直者の数え唄

追憶の花はきれいに咲こうとも

影法師おまえも不運な生れつき

負けて勝つそんなゆとりは大人です

出雲市 園山 多賀子

口出しはしない傾くだけの距離

ふところが軽いと口が重くなる

玄関の靴家風からはみ出して困る

誘われて割り勘少し腑に落ちず

若者の行住坐臥に目を外らす

出雲市 板垣 夢酔

罪と罰地蔵の鼻が欠けていく

雨降って乾いた恋が持ち直す

帰ったと家へ飛び込む盆の蟬

たっぷりと月の雫を吸うた梨

蠅に眼をいじめられてる飢餓うつろ

高知県 赤川 菊野

泣く胸がないから泣かないだけの事

春愁や羅漢に抱かれて眠りたい

子を五人生んだ姑にはかなわない

桜散り月も私も一人ぼち

亡夫の忌へつくし足りない事ばかり

高知県 北川 竹萌

古里へ向かうハンドルお茶摘みに

里人の遠近茶摘み唄のなか

揉め揉めと夫婦両の手茶に染めて

陽の恵み乾く度合いの揉み捌き

夕の膳額き合うて酌む新茶

姫路市 丁坪 サワ子

パンの耳食べない子らと飢えの国

春風がそつと運んでくれた嫁

営業とグツと耐えてる咽喉仏

愚痴るほど深みへはまる自己嫌悪

目に青葉山家に泳ぐ鯉幟

姫路市 人見 翠記

負目持つ人はしきりに逢いたがり

あの秘密子にも告げずに抱いている

グイエット二十一世紀覗きたし

平凡な倅せ説いて娘を嫁かせ

春蘭がりツチな気分にしてくれる

富田林市 藤田 泰子

マンションが建ってしまった麦畑

亡父の掌によく似た男を好きになる

今日の雲阿修羅のような顔してる

地の果で会う約束のちぎれ雲

人妻を口説くひとあり木の芽立ち

富田林市 田形美緒

流れ雲昨日は問わぬことにする

茜雲みんなに帰る家がある

みどりにも濃淡があり初夏燃える

バードウィーク愛の巣があるので覗く

飴玉のかけらで傷の付く事も

倉吉市 渡辺独歩

たんつぽの大阪の街好きやねん

草木染め私だけの色を着る

火の種は杉田久女から貰う

み仏にハワイで暮す話など

春の花一足跳びの靴履いて

宇部市 平田実男

スカートのほうが縮んだように言い

他所の家だから慌てぬ消防士

しゃべらせておけば自分の恥も言う

長いこと寝たきり涙のない葬儀

好調が続き少うし莫迦になる

羽曳野市 榎本吐来

退くことをひとに教えることは出来

染まる気はないウェディングドレスです

マンションが好きで入ったわけでなし

さみだれを貝になりたし定期券

花に月に約束ばかりして過ぐす

大和高田市 岸本豊平次

公園の野球に窓の落ち付けず

外国から嫁をもらって農を継ぎ

ポックリさんの近くに住んでまだ行かず

てにをはが変って広がる噂の輪

シルクロード黄色い砂も飛んで来る

榎原市 岩井本蔭椿

子育てに頼られている老いの知恵

妥協して女は淡い悔いを抱く

国宝の木肌兵火の過去語る

甘栗の袋の嵩にある作意

赴任から帰って瞠る子の背丈

西条市 片上明水

損をした日も善人の眼が丸い

リハビリに通う片手に遠い春

網の目を小さく替えて再起策

五人目の投手へアナの声が落ち

嫁が来て花瓶の数が増えた部屋

高石市 浅野房子

謎残しあなたの過去は知ってます

才女にもあった女の葛藤が

端株持ち一喜一憂する老後

風当りさけてトツプの座をゆずる

ガラクタに囲まれ豊かに年を取る

箕面市 坪田紅葉

半袖が今朝はコートのある寒さ

うたかたの恋の行く末秘めたまま

カーネーション母の日だけが主役です

洋蘭を出窓に出して留守にする

つくばいの石が知ってる雪月花

西宮市 奥田 みつ子

原爆は遠い昔のことでない

婿の酒父には少し物足らず

トータムボール野心が少し鈍くなる

民芸品土の匂いと手のぬくみ

ばんばんは東京弁を目の仇

神戸市 山口 美穂

みんな無言寛の音の露天風呂

みどりみどりみどり十津川村をバスの旅

数日の寿命をのばす森林浴

旧交を温め川湯の湯がやさし

お隣の犬へ留守番ありがとう

有田市 松井 かなめ

少しパアこんな女でいいきされ

弟の嫁が先逝く不公平

学歴も晴着も揃って縁がない

雑草のようにおとんば育ちへこたれず

神棚に通帳供え合掌す

大田市 藤田 軒太楼

表情をかえぬ男の底力

融通の利かぬ堅物の使い途

面白い甘い話に影があり

いつ迄も居たい二人の影が伸び

京都市 山本 規不風

せせらぎに逢う螢火の脈の彩

相談がまだまだ死んだらあきまへん

糸ほどの脳血管が切れたらし

辛抱をすれば快感となる眩暈

枚方市 宮川 珠笑

いさぎよく折れて責任とらされる

水虫も永年わたしの足で耐え

満員車夕べ餃子を食べた人

母から父に代る受話器は重大事

和泉市 西岡 洛醉

綾取りの絆還暦まだ続く

小さな家の奢侈の妻で居る

六十の手習いカラオケとは楽し

天運にゆだねる暮らしの細い糸

町田市 竹内 紫鏑

すわる確率雨より低し

勝負師の書くエッセイが売れ

介抱はせずマイク突きつける

しらがはみ出すコーチの帽子

玉野市 小谷 仙山

脂汗明日へ流す老いの意地

真実を写すいつまで鏡ふいている

エピソード着に故郷の夜が更ける
白旗はまだあげられぬ古希の坂

仙台市 川村映輝

政宗ブーム後を芭蕉引き受ける

釣革に連休ボケの大あくび

体調がよさそう老妻よく動く

福耳を誇り福に遠く居る

鳥取県 川崎秋女

椿咲く千代さんの顔鮮明に

人の愚やおんなじことの繰り返し

降り止まぬ雨に時計が二時を打つ

おとなりへ一尺高い鯉のぼり

鳥取市 森田熊生

カットバンころんだ訳は言わぬまま

母さんのまじない傷が痛くない

たして二で割る結論がちがいます

うまい茶を入れて母にもある話

鳥取県 新家完司

病院の窓に四角い空がある

つまらない男が敵でなさない

節穴がふたつ眉毛の下にある

声の出る時計に今朝も叱られた

鳥取県 中原みさ子

別れの曲恋も珈琲もセピア色

憧れの先生に逢う検診日

わたくしと同じインコの無精卵
人妻の髪はいつでも火の匂い

鳥取県 羽津川公乃

陽の昇る海だいいこときつとある

白うさぎワニが示談に応じない

示談書の秘密に触れて火傷する

別居する弓の背中に意地を見た

鳥取県 江原とみお

ライターの注意書読む待ちぼうけ

ポックリ寺のしだれ桜が枯れました

先生に叱られた子と海へゆく

犬も僕も性善説を信じてる

鳥取県 さえきやえ

野に下りムダなじゃんけんぼんはせぬ

のこり火をおだてに風がやってくる

自分を替える靴です白にきめました

嫁ぐ日が決まりまち針とってやる

東大阪市 崎山美子

久々の和服にゆっくり歩をはこぶ

ゆっくりと歩けば四季が見える街

自分だけ弾んでいるとは知らぬ酒

人並のキャリアで思う職がない

大阪市 北勝美

母の日に記憶の中の握りめし

薫風へ病妻座らせ千すふとん

杖がわりベビー車を押している
マスコミのちよつと淋しい妥協ぐせ

大阪市 大野 武太

仰山にきます税金ああ五月
日溜りに悠々自適のメダカかな
ゆきゆきて神軍むごいビデオ見る
反対に回すと軽く扉あく

大阪市 吐田 公一

要らんもの買うのも将を射る手だて
ドライ戦争女もドライビヤホール
豊稜の祈りが深い里神樂
あれ以来めくるとない花暦

大阪市 寺井 東雲

気晴しの寄席で笑わなどうします
建築の中の様子を覗いてる
悲しさの涙の終着鼻にくる
いわれればその形に見える遊覧船

大阪市 渡部 さと美

実が入ればそこらに居ないエンド豆
白い花好きでも藤は藤の色
欲すててからは埴輪の目にもどり
春や春あしかも演技特訓中

大阪府 坂口 公子

母の日へ孝子のあかし皆揃う
病窓へラーメン屋の灯が近い

家政婦様の機嫌はそこねてはならぬ
稽古中とて注射の針が泳ぎます

大阪市 松尾 柳右子

午後十時以後の電話は娘が受ける
母の日に娘好みを着せられる
蟻の列挙動不審が変える向き
お隣はトンボの眼鏡をした他人

大阪市 板東 倫子

心乾いて円空仏を夢に見る
人生観変りシルクロードから還る
明石まで蛸焼き食べに行くゆとり
潮の香が治してくれた花粉症

島根県 堀江 正朗

爪だけがペース守って伸びていく
ひとすじに数珠練りながら練りながら
それぞれの胸に沁みこむ雨の音
反論の勇気持つてる喜寿の坂

島根県 石田 清泉

ぼくんちが少し大きい鯉のぼり
二十一世紀の夢もふくらむ鯉のぼり
五月雨も又景となる京の町
人生が一日伸びた趣味に生き

島根県 松本 はるみ

もやしにもカイワレ菜にもある主張
銀色の雨は若葉を縫い合わす

哀しみも孤独も胸に揚雲雀
雨あがりアバンチュールのかたつむり

島根県 藤原鈴江

十六夜の月に魅かれてうろたえる
なめくじに今日はうれしい小糠雨
どうにでもなれと囁く月の暈

七十や赤かピンクか灰色か

島根県 北川民子

未知数で浮雲睡蓮の中を這う
バランスを崩して烈しく手を握る
深呼吸してみる故里の風の彩
山藤が和服を着よと唆かす

和歌山市 若宮武雄

ユーモアも皮肉も好きなベレー帽
善人にされて野心を持てあます
枯らせない妻の形見の鉢の数
五月晴れ喪のネクタイ眩しすぎ

和歌山市 垂井千寿子

ペンションで緑の朝を吸うている
極彩色の服で自分を見失う
園児の絵家庭の色も出ています
行きずりが同郷と知れ温い旅

和歌山市 内芝登志代

爪型まで亡母に似てきた里恋し
住み馴れて少しゆとりの街の風

こじんまり住んで老女の生き字引
他人には赤い花咲く園に見え

和歌山市 神平狂虎

亡父の所へ行こうと思う細い雨
詩には詩を霧の情けを詠うべし
焦げ臭い男心が来る港

遠くばかりを視つめてしまう男の樹

和歌山市 山川克子

まだ誰も掴んでいない青い鳥
不自由でも単身赴任にあるスリル
この私とあなたはそれでいいのかな
不器用で意地張る癖が直らない

和歌山県 寺田裕美

草笛が上手に鳴らぬ塾帰り
集まったおたまじゃくしへ風光る
万才をしたまま赤ちゃん寝てしまひ
過去語るあまりに哀し口紅よ

和歌山市 山田高夫

老いの恋二番煎じのお茶の味
計算に疎い律義が田に這わす
アドリブで暮す男のコップ酒
退職の今朝も鳴り出す鳩時計

弘前市 斉藤 蒔

廃線のホームに赤いチュウリップ
無意識はポケットに手が禁煙車

ステーキを馴れた手つきで食う隣
離農する話はよそうりんご剥く

父 田水 一滴もらさず引き終る
弘前市 真喜内 實

かげひなた無い貌ならぶ父息子
ハンガーで上着猫背をなおしてる
風泣いて車の速度諫めてる

米子市 金山 夕子

夜明けの月にしばらく答あすけよう
筍の皮から土の笑い声

春風がピンクの靴を履けと言う
正気です赤いパジャマで眠ります

米子市 小村 てい子

野にくだり気ままな笛を夫は吹く
塩なめてこれから山へ柴刈りに
今日の雨ダークスーツも句を結ぶ
爽やかな別れに草木染めを着る

高槻市 川島 諷云児

本心にそむいて舌が回りだす
片意地を張っている間に置き去られ
たとえばの話の裏に刺がある
生涯をB面のまま枯れてゆく

高槻市 河瀬 芳子

ポケットの笑い袋が病んでいる
旅ひとり老いるというは哀しけり

福助に出遇うたくにの小間物屋
フルムーンらしいふたりの春かばん

寝屋川市 宮尾 あいき

バス待ちの私を藤の香が誘う
エイエイオー畑一面のネギ坊主
さすが親の子ガールフレンドちゃんと居る
いいえ私が好んではいるしまい風呂

寝屋川市 江口 度

前うしろ乗せてペダルを踏む妊婦
これからも煙草を吸うよ肺の影
五月晴れみどりのチューブしぼりきる
堀沿いにタンポポ咲いて祖母達者

八尾市 山下 みつる

強欲な紳士もエイズの敵でない
痛む足引きずり大和の史跡旅
機密保護裏で盗聴しています
雨男今日は情けのあめにぬれ

八尾市 宮崎 シマ子

エネルギーたくわえている鳳仙花
旅をした深く悲しい山越えて
少し医者になった気で見る血圧計
遠い国の飢えを聞いている雨の午後

八尾市 鷺見 章

モンタージュ僕そっくりが手配中
ミニの膝躍る五月のアスファルト

蝶ネクタイ褪せた背広にある誇り
雑学の支えに座右の広辞苑

岸和田市 島崎 富志子

地引網子供の頃の一頁
引く波を追うてもどつて子は元氣
成人病検査元気でいても氣が重い
ばあちゃんと孫が呼ぶので意識する

岸和田市 芳地 狸村

妻入院（三句）

ピーボーのお世話になった骨折事故
寝たきりの妻に不眠でする看護
手術室とびらの外で落ち着けず
あの声が憎い深夜の電話口

唐津市 筒井 朴竜

靴抱いて通勤ラッシュの列に入り
お勤めは愛妻弁当の靴抱き
社の人事洩れた靴も左遷され
集金の夜道冷汗かくカバン

唐津市 浜本 ちよ

頻尿をかこちビールやお茶を飲み
竹割った気性の夫に苦勞する
中年の翔んでも見たい羽づくろい
室毎に花を活けても空ろな日

岡山県 直原 七面山

知っていて疎まれている

茶柱を見て旅に発ち
雲行きを見て策をねり
靴を手に娘は涙をゆく

岡山市 行吉 照路

どのねじを巻き忘れたかもの忘れ
試練だと他市の地図買いしるしつけ
マイカーを降りてテクテク汗を溜め
ひと言をつけ足しセールス満点か

岡山県 荻野 鮫虎狼

妻と僕だけの辻褃合っている
宅配と一緒に届く母の愚痴
欲ボケの背中が丸い応接間
凡人の父カラオケの特技持ち

岡山県 二宗 吟平

張りきりが過ぎどたんばでどじを踏み
年寄りが居って頼りのない返事
ちーちくばーちく夢中になって立ち話
泣きわめく幼児の足に追いつけず

岡山県 岩道 博友

地図に無い舗装道路で行き詰り
夕食の会話へ今日は波静か
薬漬けだんだん傾く体知る
早起きでシナリオ通りに燃えてみる

岡山県 山本 玉恵

楯になるたしかな背を信じ切る

ほろ酔いにほだされてゆく今日の憂さ
五時から女さあ忙しい主婦となる
無風地帯の中まで噂がとんで来る

岡山県

矢内 寿恵子

終バスが私一人に貸切られ
信念も背なも曲って古稀近し
水子地藏へ雨のリズムの思いやり
清張が砂の器にとる指紋

羽咋市

三宅 ろ亭

朝の雨今日は机を愛さねば
日課の一ついろりに炭火小さくして
挨拶の原稿妻からクレーム出る
言訳はすればする程ボロが出る

静岡市

渥美 弧秀

傘寿の師教え子の待つ駅に佇つ
風邪に寝て鏡の告げる不精髭
明日もまた詩に音楽の待つ暮らし
味噌汁の幸分かち合う妻が居る

静岡市

永倉 僕川

欲望は片目タルマを抱きつづけ
後戻り出来ない坂へ来てしまひ
人妻のお酌はなんとなく違ふ
大袈裟に症状告げる夏の風邪

西宮市

西口 いわゑ

姉が逝く白木蓮は遠く咲く

なぐさめて欲しくて花の前に立つ
金魚ひらひら七日も続く風邪の熱
マネキンの誰かに似てて立ち止まる

西宮市

瀬尾 六郎太

しわしわの手が創り出す祖母の味
役立たず言われ続けてカニのカラ
階段が老化度合のバロメーター
六郎太大河信玄出てきたぞ

姫路市

大原 葉香

リハビリを時計の針に監視され
一陣の風に落花の無言劇
いつか還る土だ大事にしておこう
シャッターチャンス突然犬に吠えつかれ

宝塚市

丸山 よし津

橋桁の島は失うものばかり
学園の青葉美し友が殖え
雨降って自分見直す時を持つ
親の愛知らぬ施設の鯉幟

七尾市

松高 秀峰

暗証番号忘れる程になった母
カタカナ語辞典を開く日が続く
新婚はこけても美味い目玉焼
粗衣粗食耐えた長寿の老夫婦

松山市

谷 信夫

新茶飲む今日のいのちのありがたし

死に神の鼻の高さが笑わせる
お手一つ貸して下さい観世音
ゆっくりと出て来たけれど忘れ物

加賀市 細呂木 魯 木

父の座もローンを背負ってうすくなり

どなった母が電話の別な人

銭湯の噂へ刑事も仲間入り

脇見せず一路勤めて平社員

羽曳野市 佐野 白水

連休は家族を出して事務整理

国民休日国旗出そうか出すまいか

老夫婦三百六十五日連休

不惑の娘ストレス溜めている電話

茨木市 井上 森 生

藤浪の誇りには負け仰ぎ見る

山躑躅故郷あとに三十年

風薫る中で思案の丸木橋

新緑の中を二人の笑い声(新婚に贈る)

河内長野市 井上 喜 醉

和解して笑顔が戻る四面楚歌

組板で跳ねて男が見苦しい

道一つ外すと怖い流れ星

再会の夢を信じる花時計

吹田市 茂 見 よ志子

乗ってからベンツと聞いて讀めて降り

禁煙をしつこくすすめ不興買う
父の日は何もこぬなと苦笑い
家計簿は日記も兼ねて母の文字

吹田市 栗谷 春子

何見ても眩しい五月潤歩せん

鯛の目玉私がいただくのですか

齒科医からの帰りイカリ豆を買う

ふり向いて追われる猫が待っている

倉吉市 淡路 ゆり子

リビングは路に蔵に筈と

葉ざくらを見え隠れつつ靈柩車

競い合う心はとおに捨てました

姿見が答えてくれる病み上り

守口市 森川 まさお

末席にいて理屈っぽい酒を飲み

寺の庭小蟹這い出て立ちどまる

砂の庭一度で箒目をつくる

末裔は奥の間にいて胡弓ひく

尼崎市 奥山 美智子

湧きあがる思いを抱いている五月

盲導犬の一心同体目にさやか

あり余る物を揃えて捨てられず

当然な話へ寄って来ない耳

富田林市 松本 今日子

プライドがあつて一本のバラ買えず

人ひとり生まれみどりのさわやかさ
綿雲よ私とおしゃべりしませんか
つよく降る五月の雨を聞くお風呂

姫路市

中塚遊峰

むきになる癖はやっぱり亡父ゆずり
捨てきれぬ物ばかり増え寡婦の部屋
傷心の旅をいたわる木曾しぐれ
羽根布団軽さに眠れん貧乏性

東京都

吉川一郎

空理空論欠伸が本音吐いている
輪の中で寂しがり屋のユニフォーム
小雨降るボタンの派手な開花振り
鮮やかにラストを飾る落椿

松原市

小池しげお

いうことは聞かぬ土木の係長
飯場から土木課長に声かかる
土木部長酒も煙草もみんな好き
土木部長親父おやじと皆んな言い

河内長野市

植村毘代

ラッシュアワー凹みになって私いる
ぼとぼと雫滴る物思い
患者から無事ついたかと電話来る
陽が登るまでの寒さに堪えている

海南市

三宅保

栗石が野心を持つと揺らぎだす

一徹な太陽だから信じてる
金で済むことと他人は言うけれど
他人とは思えぬ妻は他人です

広島県

藤解静風

頑固さがだんだん舅に似た眼鏡
生命線あんたが長い頼みます
人並みという群にいる倅せて
鉛筆の芯がとがっている句評

竹原市

岩本笑子

命輝け五月晴れを子と歩く
若葉透かして太陽の戯曲始まる
子とつなぐ手の愛しさよはかなさよ

竹原市

石原淑子

逆らって息子脱皮を試みる
ゆらゆらり金魚に嬉しいことの有り
納得のいく人生でかすみ草

竹原市

信本博子

幸せをポンポン弾く紙風船
さようならバイバイアデューでも恋し
夕暮れの風に呼ばれて来た二人

大阪市

中西兼治郎

献血ももう許されぬ齢になり
欲望も段々減って行く余生
うしろ指七十五日耐えて生き

大阪市

井上白峰

脇役に徹してドラマ盛りあげる
煙草の輪妻の筋書読んでいる
飼犬の夢は鎖のきれた夢

大阪市

北山悟郎

又の日を期して拳を温めてる
生還に神の期待を裏切れず
一服を仲居がしてる下戸の席

大阪市

町田達子

食われぬよう鯉に距離おくはぐれ雲
市場籠ベツトがリボン気にしてる
湧水を抱いて菖蒲の濃く淡く

出雲市

石倉芙佐子

友情をつなぎ止めたい蓮華草
友情が裏目裏目ところびだす
ななめから見れば友情危機せまる

出雲市

園山良子

ガラス拭き自分の仕事と思う夫
ブローチの位置が決まらぬ薄化粧
食後また消化に悪い訓示聞く

出雲市

竹治ちかし

子を測る親の定規にある歪み
今日暮れる明日も同じ今日だろう
子供部屋与えて父の部屋がない

鳥取県

広本文子

塩断ちへ菜の花漬けの鮮やかに

葉ざくらもこれから長い旅をする
春かすみ恩ある人の霊柩車

鳥取県

田村きみ子

初夏匂うグリーンピースの飯を炊く
ミニスカートおばはんだって穿いてます
五十歳で夫と別れる定めとは

鳥取県

津村八重子

土に還る日まで疾く疾く歩かされ
貧しくも健康という宝抱く
いつも風ぐ母の海から母として

和歌山市

後藤正子

吹きぬけた風かけがえのないものばかり
一カ所に集めた私燃えてます
食前酒にゆだねる刻を華やいで

和歌山市

木本朱夏

のびきったゴム紐に似る夫婦仲
酒タバコやらずさりとて金もなく
空席へやって来たのはおばあさん

和歌山市

青枝鉄治

竜となる夢は捨てない鯉のぼり
マツチ擦ることを教えた子供の日
投げ売りも崩してならぬ線があり

倉吉市

渡辺苦句

夜行型天才をパフォーマンと言う
大仏さんが歩き出したら君どないする

チャンスを狙う猫にはなりたくはない

倉吉市 野中御前

スリッパも廊下でおどる安米節

母ちゃんもときどき手ぬきしています

食べ合せわるかったのか失語症

豊中市 上田登志実

大楠は鎮守の歴史知っている

外出のたびに何かを忘れてる

寝室の画は故郷の山と川

豊中市 一瀬福一

伝言板待ったと書いて待ちもせず

国賊と言われ次々子が生れ

次々にいのちが延びる薬づけ

米子市 光井玲子

貞淑と思われるあらそわぬ

月見草夜明けの風をなびかせる

五年前に嫁かせた部屋を片づける

米子市 川上より子

みどり児を抱いて人形箱を出す

紙ふぶき港のかもめになりました

飛行機を送る振手よひとり芝居

岡山県 井上柳五郎

離職の夜帰る酌む酒酔いよ増せ

毎日がサンデーとなるとまどいも

悲しみに涸れた涙を呼ぶお骨

岡山市 花田たけ志

ご遺族に今の気持を聞く阿呆

悠々と余命にまかす長けた嘘

勤労の汗を鈍らす土地長者

高知県 中内朱坊

武者轍やと攔んだ五月晴

連日の雨に土工とアジサイと

二度とれる米が農政批判する

高知県 小澤幸泉

歳経過新興団地雨無情

幸せな二人がそつと影を連れ

正論を吐いて気まずい酒の席

寝屋川市 平松かすみ

妻が居て子が居て叩く石の橋

原発の未来を思う投票日

口車乗せて駄目です途中下車

羽曳野市 中村優

ジャンケンの勝負で友情傷つけぬ

ときどきは悪戯したい花言葉

アドリブが効いて本音の嵐吹く

唐津市 山口高明

ベトナムの悪夢紛らす芥子の花

出生はどうあれ親がふたり居る

檜山が恐いとひとつ善を積む

大東市 土岐トク子

母の日に遠き嫁よりプレゼント

母の日にエプロン御馳走精いっぱい

夕食の仕度ニューミュージック聞きながら

富田林市 片岡 智恵子

天職に賭するものなきまま暮れる

歯車の合わぬ話にうろたえる

贈られて刺ある花と知らぬまま

堺市 柿花 紀美女

連休は終つてからの古いプラン

衣食足り礼節忘れた現代っ子

お寺さん浮世の話して帰り

芦屋市 竹中 綾珠

子供の日大人ばかりでかしわ餅

日本を又もアメリカいじめ上げ

阪神が勝つと御機嫌良い息子

神戸市 仲 どんたく

さっぱりと未練を抜いて総入歯

小手毬が晩春暮れる道点す

御臨終まだ欲がある南無阿弥陀

奈良県 宮川 古都路

松葉杖人垣覗く大道芸

三日見ぬ駅のさくらは雨に散る

お好みのヘヤースタイルに顔かわる

藤井寺市 福元 みのる

偶然が必然のように思える日

主賓より遠くに坐る癖がある
哄笑の遺影で明るい通夜となる

和泉市 岡井 やすお

旧人類大日本が捨て切れず

ふざけ過ぎだんだん乱れてゆく国語

精神の移植も早くやって欲し

高槻市 竹内 花代子

こんなこと貴女だけにと内輪もめ

戒名と話せば胸がまた疼き

炎えているつつじ繁繁雨の窓

川西市 松本 ただし

専守防衛女の業と花の蜜

一生を捧げて来ました座りだこ

無為無策煩惱だけが起きている

寝屋川市 堀江 光子

銭けの何にもまさるその涙

涙拭くにぎり拳にある誓い

髪染めて夫婦どうやら倦怠期

守口市 結城 君子

折からの黄砂に花の散り急ぐ

チューリップ競い咲きた疲れみせ

みな下に眺めて鷺の自尊心

倉敷市 田辺 灸六

出た釘と知ったら潔く打たれ

忠告を気づいてくれぬ火取り虫

自惚れももうそのへんにしなはれや

箕面市 椎江清芳

税務署が覗いて見たい貸金庫

雲遠く瀬田は日暮れて鐘の音

姿よし氣立てもよしといかぬ縁

広島県 田村新造

北陸旅行(二句)

波頭安宅の関の古事を聞く

勸進帳ひとくさり聞くバスの旅

白内障未来図すこし曇り出す

島根県 城角鶏生

預金高ゼロでようやく新居建ち

風邪の神よほどわが家が好きらしい

てきばきと采配ふればけむたがり

兵庫県 脇田米朝

残り火が燃えて緞帳下ろせない

一刀両断漫画が政治の料理する

うるおいを倍に生かしてかすみ草

出雲市 小白金房子

幸福な一日だった感謝の灯

宝もの包んだように孫を抱く

出雲市 小玉満江

誰も来ぬボインセチアの赤と居る

老残の自慢はみじめになるばかり

出雲市 久谷まこと

親心残してくれたもう一步

末席はいつも同意をするものと

大阪市 塩田新一郎

地上げ屋の話で終る通夜の酒

味付もだんだん薄く髪薄く

大阪市 宮下とし

夾竹桃に囲まれ老い一人住む

連休に一人留守居の味をしめ

鳥取県 土橋はるお

道草が申告漏れになっている

信号待ちにポケットベルが鳴っている

鳥取県 乾喜与志

盲導犬が行く手を知っている安堵

学歴がなくて素直に生き抜いた

姫路市 都里遊光

しぶく雨牡丹の春も今日限り

長生きをしようねと別れた友が癌と聞く

豊中市 辻川慶子

れんぎょうの花咲く頃にいい便り

ビアガーデンビールの泡に星が降る

茨木市 堀良江

花嫁になる日も近しタイエット

美人ではないが明るくやさしくて

岡山県 池田半仙

足腰のたつうちという旅に出る

割り切ってしまうば愚痴も減ってくる

自選集

藤村 女

御無沙汰を詫びて届いた新茶の香
さしかけた人が濡れてる俄雨

それぞれの色で庭石濡れる梅雨

決心へ責任のない他人の口

太陽にはじない靴が朝を出す

正本水客

郷愁を誘う歴史の径の青

おとこの勲章光つてるとは限らない

はしゃいで見せてジャンケンまだ続く

相手役に芸の広さが分らない

おしゃべりな河童の顔に小雨する

児島与呂志

三女長男誕生(二句)

裕くんの鼻は確かに俺に似る

裕くんの目がサヨナラと俺を見る

黒川紫香

いい人で居たいと歳を取る毎に
お茶漬の味から記憶の無い二人
戦記もう誰にも告げぬまま埋め
本ばかり積み味気ないワンルーム
水たまり跳び越す孫を賞めてやる
自転車に邪魔されながら行く歩道
開かぬので走る窓から投げキッス
待たされて緑茶一杯馳走され

市川鈴魚

戯作者は妻でわたしがねむくなる
このトンボ狭い世間を知りすぎる
夢の樹海で樵がのぞく女の絵
低いやね低い腰して鬼がいる
あげくの果てに妻をほめてる濁り酒

小林由多香

メモ欲しい顔を知ってかビラをくれ
公共物皆建て替えて村貧し

野村太茂津

あり余る物へがまんが欠けてゆく
沈没も欠航もない橋渡る
疲れだけ残し女に祭り逝く
心づけはずみよろこび分ち合う
不機嫌な先生チョークよく折れる

工藤甲吉

シャガール展から素うどんで甦る
ハングリ―精神越後育ちに叶わない
独身体験塩辛茶粥塩昆布
チエンソーが不況みかんを泣き叫ぶ
青若葉の匂いに酔うて深呼吸

山内静水

世の中が变つて正義嗤われる
読むだけは読む朝夕の懺悔文
ペコペコペコ男一匹とは言えず
夕暮れの茜に染まり蟻帰る
蒲団干し日和竿竹売りがくる

本田恵二朗

バラ一輪妻に捧げる母の日や
そうなさいませととりつくしまがない
ばろかすに言えない隠主のコップ酒
みんなが笑う笑わぬのが一人いる
祭り好きな男がもっていた隠し球

藤井明朗

十分間で本四をまたぐ自慢橋
開通の鉄路の音が夢を刺し
博学と浅学妙にうまが合い
ど忘れをし合うて平和な老いの道
相性が良過ぎて喧嘩の種がない

大矢十郎

仕事は快調川柳に追われてる僕
ひとり暮しの効能時にはうらやまし
仕事と川柳両輪欠けてくるも歳
選挙第一不公平税制中断す
四季の旅詩作充電するプラン

水粉千翁

生きている事が嬉しい日々余生
バックミラーのダンプお前にや娘はやれぬ
強盗へ銀行ハイハイハイと積み

静けさの茶筌に語る雪月花

見忘れた笑顔を春のそこかしこ
見つめられ見返す誇り花牡丹
さつきばれ花はずかしきみどりいろ
青い風おとこ未来の扉を叩き

米澤 暁明

足早の四五人を追う五六人
貰い風呂少しぬるいと思うだけ
病人にもうなったよう検査漬け
一生を踏み台ですむ人生か
うぬぼれがつのりはしごを外される

高橋 操子

医者言う二年のいのち生きのびる
もうあかんあかんと言うてたつ月日
公職をこわってゆく淋しさよ
あの世まで持って行きたい恋をする
はなれ行く列車になつて遠ざかる

八木 千代

泳げなくても流れに溺れたりしない
輪くぐりもゲームの中と割りきろう
こどもはいいな新しい歯と変えられる
父の自転車はまだ風を斬るまっすぐに
梅の壺役に立つまで我慢する

小出 智子

人間が眼を付けだしてからの森
荒波をどんと潜つてきた背広
包んでみると意外に重い私の荷
スパイスをちよつと利かせてある小言
どうにもならないこと思いつつ落を剥く

月原 宵明

満腹で眠い動物的な幸
友来たるたこ焼提げて桐の下駄
酔うている足へからんで来る小犬
ライバルが俺の最期を見届ける
踏まれてるのは汚れてる太い靴

金井 文秋

健康を信じて日々のペダル踏む
ご機嫌をとつとく母へプレゼント
ひと言が多いと横で気にかかり
マイホーム主義を崩さぬマイベース
空間を縮めて橋が出来上り

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

谷垣史好

一年生の帽子よ小さい旅人よ

小島蘭幸

たしか昭和五十七年秋、清水白柳句碑建立記念句会に、まだ小さなお子さん連れて出席された蘭幸さんのことを想い出す。子煩悩で多分奥さん孝行で、よき家庭人であろうことは毎月の雑詠にうかがえ、私の好きな作家の一人である。

頭になじまぬピカピカの帽子。身丈に合わないランドセル。「小さい旅人」に多くの思いがこめられている。

さくらさくらさくらとちるさくら

有働芳仙

締切日の関係で桜を詠んだ句が多かった。その中でこの句、漢字を使わず平仮名ばかりの重ね言葉が、桜の風情の表現に視覚的な効果あげた。

人生が面白くないチンドン屋

高杉鬼遊

面白くなくても、それが職業とあらば愛嬌を振りまかねばならぬ。人を笑わせ、人を愉しませる商売というのは何によらず苦い味のするものかもしれない。

レトロブームでチンドン屋も見直され、一回、全国コンクールが行なわれている由。一種のパフォーマンスだ。

十本の指で英語をしゃべつて来

遠山可住

知つて限りの単語を並べ、あとは身ぶり手ぶり、それで十分、意が通じたというのである。要は度胸。なまじ文法を知っていると却って邪魔になる。こういう人がつくづく羨ましい。

僕が寝て老婆が寝てそれで夜

土居耕花

かくて一日が無事に終り、明日はまた、今日と同じように過ぎてゆくだろう。こだわりのない老夫婦の静かな暮しぶり。寝息がスヤスヤ聞えてくるようだ。

値崩れがしそうで年は言わぬこと

牛尾緑良

女の年を聞きながら男がいる。正直に答えてもらえぬと分つていても聞きながら。年がバレても、それがなんぼのもんじゃない、というの男の独善で、女には女の理由があるのである。それを作者は「値崩れがしそうで」から、と喝破した。

神様に話したことがおかしくて

片上明水

そうついて笑つて済ませるときが来て、よ

かったですね。悩みや心配ごとというのは、大半は、あとで冷静に考えれば、大したことでないものなのだ。素直な言いまわしで人間性の弱さをうがっている。

煙草に火つけてしまった自己嫌惡

江口度

三十年も前に何となく煙草をやめた私には禁煙の苦しさというのが実感できない。体験者によると死ぬほどの苦しみという人もいる。そんなにまでして好きなものをやめることはないと思うのだが。ただ、煙草を喫わない者に迷惑をかけないよう、それだけは最低守つてほしい。

それにしても米国の嫌煙運動を見ていると一種の魔女狩り、そんな気がする。そしてわが国で煙草の広告が、むしろふえているのはどうしたことか。

なお同じ作者の「井戸を出た蛙気弱になつてくる」は、川柳やがわ三月度し章作品と同じ句なので鑑賞を割愛した。小島句会であれ既に発表された作品を、雑詠あるいは他の投句欄に出句することについて、一度考えてみたいと思つている。

銃眼からのぞくと人は敵に見え

春城 武庫坊

金婚や入江静かに帆を畳む

柿花 紀美女

空調の音がかなり美術展

奥田 みつ子

充電をするかのように逢いにゆき

福井桂香

川柳太平記 (122)

川柳の群像

中村 富二

東野 大八

○一九二二(明治45)年2月15日生れ

○一九二四年ごろ川柳を知る

○自画像

美点 人間好き なまけもの人間嫌い

欠点 人間好き なき虫 人間嫌い

○家族 妻幸子 子供四人

○そして孫が五人半 花鉢二

○思いあまること 旅に出たし

○思い残すこと 旅に出たし

○人に逢うこと 親鸞、芭蕉、中気になつ

た国定忠次

○川柳への心象 御神所の猫の鈴と木像の

白蟻 穴

昭和51年3月発行「句集鬼」13人集・川柳
aの会刊・発行人中村富二―以下はその巻頭

の「自伝」これに続いて「火を焚く」と題する長い序文がある。以下はそこからの抄文。

「現在の川柳界が多士を擁し多才を誇つてそれぞれの柳誌をたて句会を祝う絢爛さにも別に異存があるわけではない。この点では何時も川柳界の中に住んで火を焚きつづける志は持ち続けるが、同時に火を焚きつづけるボク達がいささかの異分子であり時に謙譲なアウトサイダーであることも知って欲しい。

偉れた作家がしばしば自殺してゆき、残された作者は言う。「自殺した彼が俺を怒っている」。人は老いてはいけなと思う。人生は所謂自己の才能の挫折と絶望のくりかえしなのだろうが、絶望と希望との間にじっと堪えしのぶ事が「青春」であるならば、ボク

にとって川柳は「青春の詩」であって欲しいのである。

だからボクにとって川柳はあくまで生きざまへの方法論であって目的ではない。ただたとえ方法論であっても川柳職人といたしそして作品完結への希望はある。まことに他愛もない一般的希望だが「それが偉れた作品であれば、その形式は鑑賞者は意識しない」という定義があつて職人のボクの以て瞑すべき言葉だと思つてゐる。他人に形式を意識させない見解事な作品が出来ればロダンだつて喜ぶにちがいない。

山村祐さんの川柳中年文学説にはボクも肯定せざるを得ない現状を自覚している。若さを失つた文芸などいよいよ老いばれて野たれ死にする事だろう。現代作家の先鋭であるKさんも「自由詩の若い作家にアナタの作品は大正四年だ」と言われ苦笑していられた。川柳界全体が老化現象を起している。それは心ある作家はとうに気付いている事で、その人々はそれなりに自己改革を試みているだろうが、大勢の老化はビクともしない。こんな時いつも革命の文字がくるのだが革命には天才が必要である。天才でも英雄でもないボク達の出来る事は自立した作家が集つて老人宿に

青春の唄をとりもどすより他はない。敗北は覚悟の上であると、思いに火を点する」

自伝にもあるように十二歳（大正12年）に川柳を知ったという彼は昭和5年「みみず」「ふいご」同人。昭和13年学友の金子勘九郎と二人誌「土竜」を発刊。「路」「白帆」同人を経て昭和14年幸子と結婚。この頃、青年川柳人を結集して「鴉」創刊。柳界に新しい波を興し、現代川柳作家連盟（昭32〜37）に加わり「川柳ジャーナル」（昭41〜50）の運営に参画。多くの若い川柳人のアイドルとなり、昭和47年奥室数市らと「川柳aの会」を結成その主宰者となる。

このとき富二は「aの会は気違い部落などといわれたが、何の痛痒も感じなかった。作家たといえば川柳にのめり込んでゆくのは、どこか狂気じみた要素をもっているものだ」といつている。次の三句は富二の代表的作品。

- 私の影よそんなに夢中で鰯を食うなよ
- では私のシッポを振ってごらんに入れる
- パチンコ屋オヤ貴方にも影がない
- たちあがると鬼である

川柳公論（昭51・11）に富二のインタビューがある。以下その要点（質問者・松岡勝美）――頑固なほど面白いという川柳の教祖的存在の貴方が、富山人（初号）時代から川柳革新の富二と旗印を鮮明にした時期は？

富二 革新川柳？ いやな言葉だねえ、現代川柳でいいと思うけど。断っておくが俺はレッキとした伝統作家だよ。富山人時代、放浪人として暴れたけどその芽生えはあったな。集団活動は「鴉」以来だが、その時、川上三太郎さんが「ひとりぼっちになるなよ」といわれた。

――革新を標榜する柳誌・吟社が過去にたどってきた道のよろざについてどう捉えるか。

富二 それぞれ個々の事情はあるだろうが革新派の欠点は地域的に固つてしまひ、横の連繋、共通の地盤がないのが第一、それに作家個々の純粹さが団体になった時に損いするといったところかな。川柳の革新とは形式でなく技術でしよう。ただし「水・半文銭」などは相当甘い。川柳として表現できる限界はあるでしよう。わかるわからない以前の問題として川柳で何を表現すべきか。言葉を信じるか、信じないかによって作家と読者のコミュニケーションは歪められてしまふ。

言葉の背後にあるのは人間、その人間の言葉を信じようとする作者が存在する以上、その言葉（人間）を信じないと水掛け論になつてしまふ。ギリギリの接点で解らせようとする作者（自己）の技術、理解しようとする読者（他人）の努力、それは開い以外の何物でもないはずで、その開いをせず解る、解らない論議はナンセンスだ。

60年ぐらい昔の句に

○一握りの胡麻は三百六十四 川上日車

この句によつて無意識の中で、私の守備範囲が決まり胃拡張が始まつたように思う。

――現在の川柳界を色で表わすとしたら？

――うーん、色というより濁かな。

富二は昭和55年5月3日胃ガンで死去。信知院釈賢富 読売新聞ロケル版武相川柳選者。著書に「中村富山人集」等五冊があり、昭和56年5月「川柳aの会編集委員会」の名で故人の「中村富二句集」（ナカトミ書房刊）が出されている。富二作品の持味は、ほとんど連作・群作の形で表現されている。

- 北が好きなら君は眉間を描いている 富二
 - サアテ諸君胃のない狼に雪が降るよ
 - ポンポンと叩くと消える去年の花屋
 - 某月某日蓋をあけると何もなし
 - 帽子を脱ぐ目と鼻がはらはら落ち
- 〃 〃 〃 〃 〃

★次回は「菅生沼畔」

俳風柳多留廿六篇研究

(三十六丁〜三十七丁)

南 得二・小野真孝・本多正範

石田 成佳・大屋六郎・八木敬一

鈴木 黄・石田晋一・多田 光

故岡田 甫

621 狐にはかされ薄キをしょつて来ル

南||「狐」は遊女の異称。「薄」は、月見に

団子等と共に供するところから、柳句では吉原の紋日八月十五夜、九月十三夜の異称に使用される。

句意は狐のよく化かすことから、吉原の遊女にたぶらかされ、月の紋日の登樓を約束させられて帰って来るとのこと。

ばかされた息子芒をしょつて来る

大屋||賛。

いたい事星に月夜をねだられる

四三三

尾花より女郎のまねくこわい事 喜一 36
多田||賛。

622 身体髪膚そこなつて夜具が出来

南||「身体髪膚 受之父母 不敢毀傷 孝之始也」(孝経、開宗明義章)の文句取りの句。

ほり物をするか不孝の初也

九本半小指に成つて見れば疵

遊女の客への心中だてにする○○○命の彫物

も、勿論小指を切つて客に贈る指切も、孝経の教への父母からうけた身体髪膚を損うことになる。であるから五体満足の身体を生んで貰つた親に対して不孝な行為になるが、その

お陰で非常に高価な三浦団を客に調えて貰ふことが出来たということ。

大屋||賛。

小サな指か雪になり月に成

おやゆひのきやくからもらふ三つふとん

六一 19
安九仁 4

多田||賛。

623 こたつほと咄しの出来ぬ涼台

南||冬の炬燵は恰好の恋の場になり、川柳にもぞつした句が多いようです。

四角でも巨燵は野暮な物でなし

冬の炬燵に対して、夏は涼白で、

三八 6

涼台巨燈もあしのつく道具

七四 13

恋の橋渡すは闇の涼台

八六 36

ということになる。で本句炬燵の場より涼台では咄しがしにくいとなり、比較の問題で、屋内と屋外の相違があつて、涼台ではどうしても人目が多く、邪魔が入りやすいことになる。

爰におりやすとむすめの門涼

一〇 23

すずんでるむすめ時々呼ばれる

一七 4

多田 〓 賛。

624 李下の冠り桃の木の蟬袋

南 〓 「李下に冠を正さず」疑われやすい言動はさけねばならぬといふと、という諺と同様で、桃の木の下へ蟬袋を持って行くのは、桃を盗むと思われても仕方ない疑わしい行為といふことになるが、桃の木の下に蟬袋を持ち出すのは、あきらかに桃の実を盗まんとする腕白小僧のいたすらしい。

とんだやつ李下へ袋を持参する

二五 13

ぬき足をして李下へくるふてへやつ

三四 28

多田 〓 賛。

625 講親のあるのハけちなやかた船

南 〓 「講親」は伊勢講、題目講などという講中の世話役をいうのであるが、本句の場合は川施餓鬼の講の世話役のこと。

普通では乗れそうもない豪華な屋形船に（川施餓鬼）つまり法の縁で一人前五十文か十六文か、一ト長屋をそのまま移したように、うら店の連中が船の沈むほど乗り込むのだから、けちなといわれても仕方がない。

多田 〓 賛。「けちな」は本当の船遊山とも對比しているか。

626 老ぬれハ土場浄瑠璃の茶など汲ミ

南 〓 本句、土場浄瑠璃とあるから、乞胸配下の杜地寺地等の空地で興行の葎賣張で、地面に葎など敷いたもの。茶汲などは女の仕事とすれば老いたる女義太夫のなれの果か、俚諺「老いぬれば驚馬（土間）」の振りの句作。

本多 〓 「街談文々集要」に、女太夫芝翫について記述があり、「老ぬれバ麒麟も土場の浄瑠璃といわれぬ先にゆずる名人」の歌が記されている。主題句は、俚諺を下敷きとして詠まれたこの歌の文句取りではあるまいか。女義太夫のなれの果てを詠んだ句

多田 〓 賛。蛇足ながら土場太夫の句。

さげ銭でかへるを見れば土場太夫

安四桜 3

土場太夫袴で行くハ何事ぞ

明六満 2

土場太夫元ト直かぎりの合をして

明四梅 3

三十七丁

627 千代の春近く雲井へ登る也

小野 〓 「千代の春」「雲井へ登る」とおめでたい言葉が並べてあるところをみれば、將軍家より禁裡へ献上する鶴のことを詠んだものであろう。

毎冬、三河島万年橋筋、小松川、亀有村に於て將軍自ら鷹を放つて獲た鶴を天皇皇上皇及び東宮に各一羽ずつ白木の箱に納め、御用飛脚を以て東海道を上らせて進献する慣例であったという。

萬乗へ千代のためしを御進献

四七 14

雲に入ル鶴は千歳の小松川

九〇 15

八木 〓 賛。「千代の春近く」は暮のことをいっているであらう。

多田 〓 賛。

江戸川柳富籤志 (2)

阿達義雄

(三) 江戸の富と一の富

富突が神社仏閣の修理費調達を口実に興行されたことは前に述べたことであるが、川柳評万句合にも次のように詠まれている。

神々を平口のせて感応寺

(宝曆九・閏七・二五)

だが、富突の正体を「一生多殺」と看破した句に次のようなものがある。

感応寺一生多殺札を売り (宝曆二三・梅三)

また、麻姓外骨氏は『変態知識』第二号に明和頃の句として、

一人の富に損する数万人

(明和)

と句を掲げ『柳多留』百篇には

富は一生の財をなくす種 (二〇〇・127)

と見えている。右の二句の富は勿論富クジのことである。

但し、柳多留には、この弊害を率直に言わ

ず、この富の隆昌を詠んだ句も多い。即ち、

絶えせしな富の緒川に人の浪 (八四・21)

花の江戸次第くゝに富栄え (七七・9)

世は豊か江戸は残らず富だらけ

(九六・14)

四里四方平ら一面富栄え

(九六・15)

月の野に富も十三七ナところ

(一〇二・17)

——「お月さまいくつ、十三七ツ、未だ年若い」の利かせ。月の野は武蔵野、即ち江戸。

突く日には湯島湧く程人が出る九二・21

右は湯島天神にも富突が行なわれたからである。なお、次は漢学者も理屈をつけて、富

の札を買ったとして、

富は家を潤すものと儒者も買ひ (八三・56)

と詠み出している。

なお、参考までに、当時の識者の見解を、安永九年刊『古朽木』巻之二から引用してみよう。

「当時は世間富が頻りに行はれ、この堂建立、彼所の勸化と江戸中に幾所となく富興行あれども、終に札が売れずに困ったといふ沙汰は聞かず、いつも油断すれば買付けられぬ繁昌、さりとてはてんばなこと、いふもの、人々皆一の富くゝとねらへど、千枚二千枚の札の内にも、一の富は只一枚、是をつけるは百正にせよ、三文にせよ、泥中へ投込んで仕舞ふ様なもの、手も濡さず金儲することゆえ、興行するは道理なれども、付ける人が何とも気の毒、信心の趣ならば只奉納すべきことなり。

又、興行する方も、衆生済度の方便ともいふべけれども、貧乏者の銭金を集めて、堂宮の建立して、何で仏神の御心に叶ふべきや、悦ぶ者は千人に一人、あとは皆残念々々と思ふ人のみなり。

又、富の札買ふ位のことを惜しいとは思はぬ身上の者は、たかで富は付けぬ道理、富で取った金は身に付かぬ者ぢやといふも、富を付けるなどいふ戒め、折角取った金を身に付けねば、取った甲斐はない筈、もしまた身に付かぬということにや、いかさま数百人の残念は、一の富取った者に、自然と怨が帰するを以て、かくはいふなるべし。……

……江戸にては谷中感応寺の毘沙門天、これ

富の本店なり。堂塔の建立も、只出せ出せとばかりの御勧めにては、よくよく信心の輩は格別、慇懃の凝固りたる親仁や、切店のそり手合など、奉納沙汰は思ひもよらぬことなり。夫故双方へ徳のつく御工夫なるを、只寄進すべきことは、甚だしき了簡違なり。

又、当れば仕合、中らずば夫迄という括がなく、札を買ふ者あるまじければ、一の富を取つても数万人の恨の、一人に帰するいはれ有るべからず。己、一の富を取ること初よ

第12回全日本川柳大会 で高杉鬼遊氏に大会賞

第十二回全日本川柳大会は六月十二日、千葉市の千葉ニューパークホテル別館で六二〇人の参加により開催、入選句が発表された。各題二句、計一四句に大会賞が授与され、川柳塔社から参加した高杉鬼遊氏が当日出句の宿題「夜明け」で大会賞を獲得したほか、多数の同人・誌友が入選した。なお、文部大臣奨励賞と川柳大賞は後日、日川協全理事の選考により大会賞の中から決定される。

「野心」(事前) 白井 花戦選
旗揚げの旗に野心の文字が透く

千葉 田島 歳絵

り知れて、人に金を出させて取りもするならば、恨もかかる筈なれど、神慮仏意に叶へばこそ、一の富に当れ、中らぬ時は同じやうに損する覚悟の仲間といふもの、然すれば富の札買ふ者共は、金銀は遣ふ為の物と覚えたる人にて、富の札買ふとて呵る輩は金銀は遣はずにしまつて置く物と覚えたる人なり。」

と、堂々たる富籤論であるが、川柳の之を端的に表現して余す処のないのには及ばない。あつたら大変といふ富と鰻 (九三・三七)

底なしの沼から上がれない野心

「花」(事前) 東京 山田 戯童
ドライフラワーあの日の空をまだ信じ

来賓を誇示するたかが胸の花 群馬 田中寿々夢

「酒」(事前) 静岡 丸岡 泉里
雪月花ぬるめの燭があればよい

盃を置いて弁明聞いてやり 福岡 富永紗智子

「ロビー」(当日) 東京 山本 春一
五百羅漢の一人になっているロビー

秋田 猿田 寒坊
待ちぼうけロビーの広いのに気づき

一の富何処かの者が取りは取り (安永六・松六)

治世にも槍先で取る一の富 (二四九・一九)

取りにきと人に語るな一の富 (九六・三六)

落ちにきと人に語るな一の富 (二七・八七)

右の二句は、僧正遍昭の歌「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我落ちにきと人に語るな」の本歌取りの句である。

(つづく)

「書く」(当日) 山梨 後藤 紫風
すらすらと僕には読める母の誤字

誰にでも書ける平和の字の重み 山梨 清水 美春

「答」(当日) 東京 中村 柳児
答なら母の轍に埋めてある

岐阜 柳原はる子

完璧な答は父の背にも無い

「夜明け」(当日) 長野 井出 秀夫
敗者復活ひそかに待っている夜明け

秋田 菊地 一竿
核のない夜明けを鳩が待っている

大阪 高杉 鬼遊



黒川紫香選

鳥取県 小谷 美つ千

春暁の眠りへ誘う海のなぎ
涙など見せない空が碧いから
風光る午後のやさしい瞳の中に
少年よ翔べ七彩の風よ風
逢ってきてまた人に逢う髪を梳く

今治市 野村 京子

春愁や少女の顔が媚びてくる
したたかに生きる女の赤い爪
苔寺のみどり濃くした京の雨
レンタルで男借りたい日の慕情
好きな人の影に寄りそうカスミ草

熊本県 大川 幸子

肩が凝る強がりすぎたせいなのか
すがる蔓むげにする事出来ますか
愛してる花びら残りほっとする
かんたんに老人病と医者言う
足もとのビッグチャンスに気がつかず

熊本市 宇野 昭代

あじさいが好きなお人と時雨寺
素顔になると差がつく目鼻立ち
これからの夢に律気な目覚し奴
安心をさせる小さな嘘をつく
年金の来る日を孫が知っている

熊本市 永田 俊子

少女の夢伸びて頬染む木瓜の花
真赤な顔で何か言いたい落椿
平凡という幸せ湯豆腐おどり出す
ねじ少しゆるめなさいと春の風
友の計へ一汁一菜ありがたし

倉敷市 田中 好啓

経済には強いハンサムには惚れぬ
花盗人はきつとやさしいひとだろう
生き過ぎて紙おむつなどしてもらう
北限の猿はひとりで死期を知る
焼きたてのパンの香のくる窓に住む

八尾市 高杉千歩

脇役がライトを浴びる喜劇だな

弱い者いじめの罠に又かかる

家計簿の隅へ慶びごとのメモ

シナリオに奮をふやす日のゆとり

あるがまま生きて花道去るピエロ

佐賀県 寺中 三枝子

ささやきに弱いオウムがいた不覚

時刻表片手に点と線を読む

煮っころがし摘まんだ指が亡母を恋う

モンローにほくらだけなら似てる妻

サヨウナラ待つのにあきたカフエオーレ

浜田市 中尾 まゆみ

青春起承転結はてしなく

言いそびれた言葉をつたむ日記帳

気まぐれな風がページを繰りにくる

髪を梳く五指もかすかな予感なく

休日を軽い気持ちでだまし舟

堺市 桜沢 あかり

二十一世紀への夢があります松の芯

寝たきりに自家菜園の豆ごはん

折れて出ることを知らない一本気

ワープロを使いこなしている無口

花盗人の心を花は知っている

名古屋市 藤井 高子

ふところに霞をためている優雅

ティーカップ恋の序奏は軽やかに

時々笑うて下さる弥陀如来

ブーメランいささか酔うて父帰る

はじかれて五月の空へ飛んだ毬

広島市 流 奈美子

姉ちゃんと呼ぶ姪もいてもう六十路

やさしさの心ひととき紙人形

蓬摘み亡母と語っているわたし

片べりの靴のリズムに馴れてくる

指定席もらってからの肩の凝り

富山市 舟渡 杏花

お隣の猫が覗きに來て困る

デジタルの試しに乘らぬ古時計

慰めが欲しい茶房の隅にいる

晩酌の代りに買った文庫本

お釈迦さまに裁かれているクモの糸

和歌山市 森 茜

開演を待つてリッチな春の宵

和紙のよな花びらにある自尊心

一陣の風はいたずら急きたてる

ふと夜半目覚めて音のなかりけり

としかなと思ひ緑へペダル踏む

岡山県 土居 ひでの

尺貫法母には母の道がある

片ことへ握手と頼ずりして別れ

矢印へ戻って野心捨てました

すり切れた膝のモンペがよく喋り
思いきり眠ってみたいねむり草

高槻市 笠 嶋 恵美子

たんぼよ母を見舞ってくれないか
相槌を打つだけでいい妻の愚痴

マネキンの指に暗示をかけられる

沿線の花も民営化の証し

倅せがぼんやり見えるすり硝子

大阪市 上 田 柳 影

若葉もえて胸をゆさぶる風である

燃えるものまだすこうしは持ち合わせ

手を振って別れた駅は雨になる

何をしているのか男の指の柔らかさ

墓を買う話を子等がひそひそと

静岡市 片 平 静 代

長野の娘これから桜咲く電話

大空の鯉のぼり見る池の鯉

四季の花咲かせて姑丸く住み

あなた好き突然言われ眩暈する

へそくりが溜ると旅へ出たくなる

和歌山市 堀 畑 靖 子

脱皮する時期を逸した割烹着

立ち直るために拭っている涙

よくとちる二人羽織に似た夫婦

勝率は八割夫との喧嘩

馬鹿みたいそんな事する人に惚れ

長岡京市 木 本 如 洲

手仕事を持って母くる縁ぬくし

しあわせな暮し壁の絵が踊る

医者通いこれも日課か父の杖

夕焼けの森憶病な刻をもつ

よく喋る鏡が社員寮にある

久留米市 鶴 久 百万両

カイゼル髭を撫でて老後の絵図を描く

出世するまで良心に封をする

きみの危機に片腕ぐらい貸してやろ

脱サラの決意こもごも母に書く

百組目をみごとに結ぶ太郎冠者

草津市 久 保 和 友

中国へ旅

春節のどの家もある水たまり

クラシックパンツが似合う上海プール

信号も一方通行もない道路

文化とはワンタッチの傘いま売れる

老人と海きようは鑑真号の上で見る

吹田市 井 上 照 子

好きといわれ雲に乗ったように揺れ

海の宿絶景を見る非常口

輪になると女噂のたね拾う

健康が宝余生の意気もやす

嬉し泣き涙流れるままでいる

京都市 松川芳子

縄電車シルバーシートの客ばかり

聞いて来た噂話題にして夫婦

カリカリのペーコンが好き目玉焼

お供えのおはぎへ地蔵のよだれ掛け

むき出しの鬨志挫折にはもうし

東予市 小山悠泉

目立ちたい女がつけた胸のバラ

寝たきりの妻のわがまま聞いてやり

あじさいの心変りを嘆く雨

言い勝ってみてもむなしい春の風

年金の余生夫婦の設計図

静岡市 沢田きん

蜜蜂に口説かれていた花の芯

お早ようの声で家中動き出す

万歩計頼らず歩くことにする

強がりと言っても女弱い者

米子市 足立由美子

平凡に送れる日々が有難い

それからの話は海にまだしない

海に石投げたら想いふっ切れた

雨しきり誘いの電話鳴り続く

鳥取県 西川和子

師のジョーク噛んで砕いてまた噛んで

里帰り新妻らしい顔になる

小包にカーネーションが添えてある

ブレッシャー掛けてはならぬ私語がある

岐阜市 渡辺杏村

蟬しぐれ今日も暑いと予告する

暑氣払いとそつとお盆にのる梅酒

食欲をそそる小鉢の冷奴

子供たち丸いプールで大はしゃぎ

静岡市 杉山やす

忘れてた人思い出す春の風

五月晴れ老いてはならぬ背を伸ばし

引き際がよくて人柄褒められる

聞き上手余分なことまで喋らせる

大津市 安田志津

青葉濃い膳所城跡の碑物思い

城の径青葉時雨と鳥の声

残務整理のような日々でもありがたい

遊び球持っているからゆとり持ち

熊本市 黒田緑

日曜と聞いて関節までゆるみ

力作のゆとりを足をふみはずし

型どおりに生きて自ら縛られる

拙せんを待つ少年の氣に戻り

藤井寺市 高田美代子

悠々自適右も左も煩わし

追つて来る足音がせぬかくれんば
格好はともあれ天狗の高い鼻
紙かぶと似合う子供の顔がない

西宮市 松本一郎

賢と愚を上手に使う妻に負け
欲しかった時間を余し閑居する
連休のブランは孫が決めてくれ
飲み屋から電話と書いたメモおかれ

静岡県 蘭田 模沓

転ぶ人にはそれなりの理由がある
靴下で家族の数を干している
ネッシーが居れば河童もいるだろう
吉日を待つて小犬がもらわれる

羽曳野市 吉川 寿美

許すとも許さぬとも言う帯の芯
手拍子を揃えてくれたは影法師
疑心暗鬼の中で心が瘦せてゆく

祝笛生氏退院

折り鶴の一羽が翔んだ快気膳

西宮市 秋元 てる

艶の出た家具と離婚思案する
出て行つた穴そのままに春炬燵
目玉品ばかりヘレジの丁重さ
腰に巻くセーターで決めるペアルック

出雲市 金村 青湖

花咲いて散つて噂はもう聞かず
履き馴れた靴が支えの二度の職
落し蓋母の苦勞が煮えたぎる
これを機になどと夢からまだ覚めず

熊本県 岩切 康子

泣き虫になったなあと思うある夜中
年金にまだまだ遠く積み立てる
知らざるを知れと他人は唆かす
馬鹿になれば耳は優しく聞かされる

堺市 近藤 豊子

地下鉄で行けて結構遠い街
辻久子豆粒ほどに見える席
頼みごと直球で来る電話口
中之島橋の下にも街の風

河内長野市 大西 文次

車井戸昔の音で汲み上げる
子と孫で超満員の縄電車
お灸でもすえてみたらと医者と言う
夜桜を昼のテレビをつけて見る

和歌山市 山口 三千子

悔しさをバネに心を切り変える
向う意気強く火の粉よくかぶり
遠廻りをして避けたのに又出逢う
原点に戻れぬ溝が深すぎる

鳥取県 山根 八重

コーヒーに不満をこぼす待ちぼうけ
手ぶらでも笑顔の母が待っている
ふるさとへ小さな噂置き忘れ
指切りを一番星に見つめられ

岡山県 森 下 正 子

一飯の義理に居座る迷い犬
運命の決まる通知を待つ長さ
断りに行く日の仮面こしらえる
歩かねば今日の日課が終らない

和歌山市 田 中 輝 子

豆の莢昔ばなしの出る老母と
遅咲きの花に注目させられる
年に一度おり佇つ父の無人駅
シャワー全開流れるものを流さねば

尼崎市 森 安 夢之助

オッチョコチョイに苦勞をします影法師
パジャマ着て散歩をしている快復期
幸せは婆さんと飲む二人酒
丁寧な会釈をもろた田舎道

尼崎市 鈴 木 良 征

生き残る為にランクを下げてみる
ハウス物ばかりで旬を知らぬ嫁
タレントの書いたサインに癖がある
冷や飯を食って少うし丸くなる

寝屋川市 宮 崎 菜 月

酒粕を丸めて私のおやつかな
蒟蒻のベッド夢見る蒟蒻好き
牛と馬で干渉しない夫婦です
黄昏れて二句一章につなぎけり

鳥取県 黒 田 くに子

箒目がきれい尼僧の目も涼し
ぶらんこに二つ並んだ影法師
トンネルを越えてもつばめとんでいた
結ばれた日から名前は呼び捨てに

静岡市 中 川 み つ

家中の声消す皿の割れた音
子供より親が気にする通信簿
ガラス屋が来るまで窓の段ボール
あせつても地球はいつもマイペース

鳥取県 横 山 房 子

花ひらく時を信じて水をやる
肩書きを捨てて気楽になった羽
泣き笑いあつて私に張りができ
石橋を叩いて娘を渡らせる

貝塚市 池 田 寿美子

パリッと効く糊の敷布に深い夢
食べ頃を少うしずらしてよいメロン
たんぼぼの綿毛に見入る信号待ち

高野山奥の院にて
苔むして墓しみじみと杉木立

豊中市 村上とく子

電卓はいらない父の五ツ玉
相槌を打ったばかりに長電話
姉妹がやっと揃った法事の日
浮世絵の切手は孫が持っている

静岡市 久保きぬ

気まぐれの嘘が他人を傷つける
メロン切る手先に孫の眼が走る
出世した友を感心してる駄馬
健やかに育てと祈る鯉のぼり

尼崎市 山田保藏

地震なら藪に逃げよと教えられ
横町のうまいお店に借りがある
均等法男も化粧はじめます
社長室何でも知ってる吸取紙

熊本市 北川一進

軽く踏むベダル良い事あった顔
それとなく誘ってみたい茶飲み友
夕方のラッシュつかれた靴の音
句集から知る人生を振替える

熊本市 高野宵草

ふるさとの変らぬものに檀那寺
生真面目な狍犬へ鳩遊びに来
ぐうたらを日記帳から嗤われる
高い税とって豪華な役場ひま

鳥取県 太田幸枝

友去った空き家に沈丁花が咲いた
ころろ豊かに仏さま信じてる
海鳥も連絡船の灯を恋うて
潮焼けの男の喉がかれている

和歌山県 森三枝子

夕焼けを信じて明日のブラン練る
恋愛で結ぶ仲人座るだけ
道を聞く人がよく来る角の家
カーネーション航空便で届けられ

尼崎市 尾宮弘治

弁当の色が淋しい母の風邪
元部下の机を磨く二度の職
戻る日の目安がつかぬ左遷の荷
シャボン玉母子でとばす陽の温み

伊丹市 小熊江美

夫が居た事は遠い記憶だけ
さがし物ばかりしている齢になり
地下鉄の中はポスター読むばかり
野仏にレンゲの数珠が掛けてある

徳島県 宮武まつ女

それぞれの思い出沁みる箸袋
痕だらけの足へ祈りの松葉杖
改築へ睨みをきかす鬼がわら
久しぶり指が覚えていたぬくみ

米子市 大田 みさと

廿日市市 森川 抜智

振りかかる火の粉払って旅に出る
春の海幸せ運ぶ舟ひとつ

野仏の笑顔が好きで今日も来た
産声が我が家の明日を決めました

尼崎市 的場 十四郎

病みあがり春の景色が塗りきれぬ
仔犬でも優しい言葉についてくる

さりげない言葉で心しぼられる
そのときの風に乗ります紙風船

尼崎市 中澤 向西

網棚の新聞ちよつと借りて読み
孫達に好かれて財布空になり

内証事真似して喋る九官鳥
インタビュ―言葉少なに勝力士

尼崎市 吉永 伊三郎

一言が多くて足りぬ嫁姑
おいでやす私の好きな諭吉はん

フルコースやっぱり無理と箸半ば
疑いは晴れたが妻まだ帰らない

尼崎市 野瀬 昌子

虹の橋渡れば浄土見えるかも
母さんのキンキン声を通り過ぎ

年毎に酒量も減って旅仲間
言い訳が上手になった常習者

アルバムが過去の思い出つみかさね
坊主が屏風に賽銭箱の絵を画いた
民芸品作る爺さん九十二
頭髮が減って口髭が延びてくる

京都市 小林 英子

愛憎のはざまに揺らぐ影法師
神様の心になれぬ哀しい日

許されて許して夫婦らしくなる
ふとよぎる孤影ひとりの父といふ

西宮市 上嶋 ふさ子

鼻歌が聞こえる母のしまい風呂
子育てが終り気ままに紙風船

木苺がうれて熟女の一人旅
聞き上手へ花のおしゃべり赦されよ

岡山県 清水 悠貴女

雨だれの音譜へ慕情深くなる
旅の夜のジョークを許す露天風呂

大阪市 亀井 円女

ごめんねと詫びながら草を引いてます
孤をかこつときは仏間ときめている

サンバにタンゴ心ゆくまで独りの夜
定年を共に味わう弁当箱

横町の飲み屋おかみに逢いに行く

尼崎市 木下 義嗣

湯上りの大胆娘の白い肌

堺市 山本半銭

赤ちゃんに遠い先祖の顔を見る

棒グラフトップに立った日の孤独

しまい湯のわたしを月がのぞき込む

高槻市 津田スミ子

紋白蝶に案内された春の道

連休に働く人のある安堵

稚児行列母の背中で寝てしまい

大阪市 島路太郎

あかしやの雨に相合傘一つ

結婚という切り札に女酔い

東京へとんぼ帰りの旅かばん

伊丹市 猪原石莊

孫来る日作業ズボンに穿き替える

月曜の雨にゆっくり寝る床屋

花吹雪浴びて郵便バイク来る

米子市 新正子

一つの巣三つの雛でかましい

ひまつぶし猫に本気で遊ばれる

鈴の音隣のタマは元気でず

静岡市 諏訪志げ

前掛けに隠して祖母がくれた金

調子良い返事の割に重い腰

星飛んで疎遠となりし友一人

真夜中に蛙はげしいラブコール

有夫恋夢見る女なくもなし

山菜を摘む道野辺に笑むあざみ

岡山県 千原理恵
尼崎市 新井泰子

宇野千代の本に背中をつつかれる

他愛ない秘密が好きな日記帳

のみこんだ言葉が夢に出て来ます

京都市 木村たけし

紫陽花の坂から許す午後の雨

紫陽花の色彩にある妥協点

情けには弱いおんなと花に酔う

京都市 森川春子

日曜の画家も風来坊らしい

どこからの種かクローバ茂る庭

流鏝馬も止まれば只の馬だった

鳥取県 乾隆風

私より燕は白い腹してる

豊かさを追うポケットが破れてる

買物袋に瀬戸大橋を提げていた

尼崎市 明壁敏之

新婚の弁当皆から覗かれる

花の下一年生が駆けてくる

池の端廻って一句ひろうてき

岡山県 伏見すみれ

合格を告げるベダルの軽い足
心の乱れさとられまいと落椿
母の苦労エプロンの中に包み込み

静岡市 浅子 まつゑ

釘付けにさせてる裸婦の肉体美
ほどほどの暮し欲などない暮し
馴れ染めを聞かれ照れてる老夫婦

旭川市 朝倉 大柏

つまらない首でもロボットにはやれぬ
隣から貰った花に気をつかい
ごった煮の鍋に故郷の冬が溶け

大坂市 吐田 純子

山あいの桜へおそい春惜しむ
風紋へ足跡残し旅終る
可愛さがビデオに写るロスの孫

兵庫県 森脇 和子

母が好き母の日に画く丸い顔
師を慕う記念切手を貼りながら
催促をすると崩れるえびす顔

熊本市 鶴田 謹爾

春寒く五月晴れ無く雨期近し
初夏の陽に青葉若葉が目沁みる
動物園遊び施設に子らは混み

居酒屋へ歩いて五分父の酒

静岡市 安本 孝平

お恍けの上手なオーム飼い馴らす
精いっぱい今日を生きての明日がある

酒田市 永沢 裕子

仏様食べる間がない手がのびる
雑草も生きる権利で伸びたがり
わだかまりあつて素通り友の家

佐賀市 江口 万亀子

いい嫁と自慢の花を咲かす姑
古い絵馬興味半分読んでます
赤ちゃんが笑って家族皆笑い

静岡市 三浦 つね

公害のない山間の鯉のぼり
よく見ると同じ顔なしこけし棚
差し向い少し眩しい人と居る

豊中市 三宅 つえ子

迷路でも口笛を吹く車椅子
ふれあいの糸電話から春になる
二度三度母を泣かせた銀の匙

和歌山市 田中 みね

添うてゆく貴方の妻でいるかぎり
さりげない仕草に愛を感じ取り
意のままに咲いて生きたし水中花

兵庫県 東浦 砥代

相合傘のチャンスをくれる慈雨
軋ませて定年のない母の椅子

古手紙焼いて断ち切る後ろ髪

枚方市 森 本 節 子

毛氈に散った花びら坐りかね

三階のテラスに小さな鯉のぼり

花みずき夏に真近の風に散る

米子市 服 部 朗 子

浮き雲もすなおな風に消えて行く

おだやかなお茶でついつい根を生やす

暗い日があったと見えぬ笑顔

大阪市 今 西 静 子

人にきく方が早いとたたむ地図

宝石より妻のエプロン光ってる

よく似合いますわ女はもう買う気

寝屋川市 井 上 すみれ

店長出て店員とたんにきびきびし

それぞれの愚痴おのろけの宿の雨

五十四歳の子に子が出来て孫八人

兵庫県 奥 野 テ ル

つまずいてから改まる言葉尻

ライバルへ弱気は見せぬ紅を引く

春一番女の位置を狂わせる

岡山県 杉 本 伊久栄

トタン屋根リズムに乗った雨の音

特価品山ほど買った市場籠

補聴器に出会えば会釈だけにする

農経営今にベントに乗ってやる

筍が負籠おこいっぱい降りて来た

恩師の書簡

遺書となる文ずっしりと胸に抱く

岡山県 松 本 元 江

脱ぎ捨てて夏の陽を吸う父の背

思い切るように浮んだちぎれ雲

無人駅ここにも名所ひとつある

岡山県 後 安 江 山

平凡という倅せを子に貰い

観る人の心酔わせて散る桜

母の日に電話一本それでよし

鳥取県 西 浦 小 鹿

冒険の筏女が乗っている

ホロホロと涙を流し酒を飲む

この橋を渡ると亡母が待っている

静岡県 小 幡 芳 男

キッチンに定年がないお母さん

山好きの父の帽子にロマン見る

めし茶碗欠かしてならぬ共白髪

大阪府 柏 木 八重子

湯上りのピンクの肌に炎えてくる

カラオケで胸のうつぶん晴らしてる

あの雲に乗って幸せつかみます。

佐賀市 古川 一 徳

若い日の地図に日の丸揚げました

小心な人かも知れぬ真つ正直

過去ばかり誇り小さく生きる羽目

弘前市 小寺 ギホウ

三歳の長男に主権ある我が家

普段着で会える仲間が懐かしい

お隣の屋敷を泳ぐ鯉のぼり

枚方市 中山 おさむ

ぬくもりの醒めないうちに意見する

ナンバー2が牛耳る噂聞き流す

分解をして組み立てて男の子

岡山市 大石 あすなろ

気まぐれな風が噂の種を蒔く

子には子の溜息をつく訳がある

上品な口が西瓜を持て余す

和歌山市 根本 実

私のグラスにいつも残る酒

花束の下には何時も嘘が棲む

ここ迄と自分へ決めた道に出る

十和田市 阿部 進

名水を旅の土産に母帰る

肩で風切る上役は恐妻家

風に背を押されてのぼる老いの坂

鳥取県 鈴木 芙美

やっこ風ばつんと空に消えました

潮騒を遠くに聞いて我が平和

三日月にっこり笑う月見草

大阪市 川原 章久

鐘の音青葉から降る古寺の屋根

紐付きの金に自由が縛られる

売る牛に寄り添う別れの峠道

島根県 小田川 智重子

お茶入れているのは暇な校長殿

豪邸もやっぱり洗濯機廻ってる

電燈を消して一日無事終る

岸和田市 三輪 通彦

連休も無縁で働く小企業

青信号必ず無事と限らない

申し訳程度にギャルのヘルメット

寝屋川市 立床 晴風

置き去りの路地に錆び付く三輪車

そんな事あったかいなとボケ上手

ロボットが笑うと歪になる地球

高槻市 芦田 静江

親ばなれ取残された夫婦靴

遍路笠角を曲ると亡夫の園

れんげ追う一人に慣れた遍路笠

尼崎市 佐藤 美代子

見栄を捨て路地の温みにいやされる

一望の低い家並は保護地域
音もなく新芽洗って雨上がる

唐津市 浜本治幸

何時来ても変らぬ波止場孤独満つ
取柄なき町だが土が温い
夫より妻が長生きすると決め

島根県 高橋武衛

初給料孫が小遣いくれました
戦争の思い出新たな五十年忌
連休もすみふる里も過疎となる

田辺市 染道佳明

添木にすっかり抱かればたん咲く
蠟燭を一日灯し泣いていた
ストレスをらくがきちように書き溜める

岡山県 牧野秀香

置き手紙おやつの上に母心
平凡な暮しに心いつも春
広い海掟が漁場を狭うして

寝屋川市 河合時弘

厨房に男を入れぬ古い妻
冗談もわからぬ夫に疲れだす
ないねんと語尾味のある大阪弁

豊中市 小林一夫

いい顔で会おうよ生きている限り
手を取ればおのずと合ってくる歩幅

美しいまま標本になっている

愛媛県 八塚三五島

電話口いと簡単に断られ

抱枕にしばしセールスマンベンチ

平凡なこの幸せがもの足りぬ

藤井寺市 楠昭子

フライパンのメニューが続く若い嫁
捨て猫で我が家を丸くした情
言い訳を考えている煙草の輪

唐津市 福島紀一

春の芽に鉄線どっこい生きていた

花吹雪玄海までも飛んでゆけ

まな板の鯉といえども一度跳ね

岡山県 後安ふさえ

ウインドの0をかぞえて諦める

風吹けば風ふくまのちぎれ雲

割り切ってみても未練が顔を出す

大和高田市 寺脇三倉

演出のうまい女に今日も負け

時間までたっぷりあると嫌な客

父よりも母の涙に叱られる

静岡市 柳沢たま

地球儀を回して探す我が日本

感心に老婆いたわる孫娘

湯上りの肌着に写る乳二つ

青森県 永 沢 招 人

水際で組んだ作戦図にあたり
無資源をまだ気づかない使い捨て
ナウイのか孫の名前を忘れかけ

香川県 今 谷 多 織

車椅子ハートがみどり吸いたがる
窓は青葉わたしの位置は冬のまま
孫と読む絵本みどりの風が緑る

岡山県 福 原 辰 江

耐えてきた肩のうすさよ沈丁花
公害は気にせぬ風よ鯉のぼり
夕やけをすっぽり包む寺の鐘

和歌山市 丸 岩 晏

流行語知らずに肩身せまい老い
嫌いになれぬから苦しみが続く
朝帰り嫉いてもくれぬ妻にして

今治市 渡 邊 伊津志

孤独さを天に向って啼く小鳥
寒椿風の重さをもて余し
漣が湾になじんで夕焼ける

大阪市 堀 口 欣 一

日章旗へんぼんとして故郷の春
春の夜明ければ野崎観世音
ひと塩の鯖はうまいぞ春の宵

寝屋川市 内 本 さかえ

やむをえぬ都合で今の妻めとり

つきあいの祝儀袋にある未練

賞められてバカチョンカメラとは言えず

島根県 今 川 三津江

連休をよそに総出の農繁期
冷蔵庫のそばで寝たふりしてる猫
窓あけて空の青さへ深呼吸

流山市 神 田 治

走っても歩いてても良し夫婦道
居酒屋の隅でいいこと言うオデン
友達の数がこの世の宝物

和歌山県 田 中 隆 積

先生の愛をしつかり受け止める
専門の城にこもった孤独感
子供等の明るい顔が師の励み

大阪市 菱 木 淳 一

注意した筈が文句と受け取られ
過去帳のルーツにうちは源氏方
功成つて陰の力を忘れかけ

呉 市 岡 田 寿美礼

必勝をバッグに詰めて甲子園
春の陽に老いの心は浮かれます
笑みふくみ手酌の父も幸せそう

兵庫県 酒 井 靖 子

怖いもの知らずの舌がふと淋し

残り火が燃えてお世辞がうまくなり

兵庫県 倉垣恵美

母の日へコロッと優しいママになり

電話ならちよつときびしく言えました

大阪府 松永すすむ

間違いの電話かわいい声だった

うわさにもされないような年になり

静岡県 青柳金吾

下駄箱に肩身を狭く下駄の顔

電話口妻は氣どった声で出る

黒石市 相馬英三

離婚式挙げず他人になる私

弔詞なら仏に聞えるだけでよい

大阪狭山市 桜井莊次

正体を知ってる人が頼りない

お隣は静か我が家は荒れ模様

岡山県 江口有一郎

太陽のパワーを背中にして止む

待っていた封書手応えある重味

奈良市 米田恭昌

窓際でじつと耐えてる重い腰

噂でもいいから流してほしい恋

兵庫県 円増貞子

掃き寄せて捨てるに惜しい花の彩

しゃっきりと着こなす和服に過去からむ

恩師訪えば一言多くなられけり

八尾市 椎尾公子

モダンジャズ兎の如き軽快さ

畳替えそろそろしようと妻がいう

レモンティくるくる夢の彩となる

気兼ねして賽銭ほどの願をかけ

御守りがとび散っている事故現場

セクシーな声と言われて照れている

軒毎にカラオケがあり村平和

立読みですますつものの漫画本

焦り過ぎ視野から逃げる探し物

口ぐせに別れましようと妻強き

付き合ってみたら案外面白い

(前月分)

SLの頃と変らぬ駅を降り(久しぶり帰郷)

鶴去んで殺風景な町となり(故郷・出水)

億の税納める人もある平和

ひな人形やっぱり高い方にきめ

泉佐野市 大工静子

新潟県 高野不二

岡山県 北岡波留吉

静岡県 小久子

豊中市 玉井房子

高石市 宮田純一

高石市 宮田純一

人も家も変り古里墓地までも
夫死んでわが子のような僧を待つ

久留米市

中垣米之

棧橋で手をふる母の遠ざかり

瀬戸大橋つばめもツイと渡り初め

静岡市

滝花喜平

父の日に孫にもらった万歩計

世は無情つくり笑いに馴れて生き

鳥取県

伊吹富恵

切り札の葵の紋を出しそびれ

父の背はいつも標的まともなり

川西市

田中喜俊

ラケットと五月の風に戯れる

トンネルを抜けて行きたい母の里

島根県

加本義良

押して来る敵へうっちゃり考える

法話聞くみな善人の貌でいる

大阪市

神保拓生

縁遠い女につらい招待状

ストレスの石を砕きに旅に出る

大阪市

榊本落児

女房が買い物に行くついでゆこ

ならんでるなんやしらんがならんどこ

八戸市

島田昭治

大嘘を聞かせて貰うむなしさよ

懐しさ亡父のゲンコツ想う日よ

和歌山市

前田美子

巢作りに今年もつばめ翔んで来た

編みものも眼鏡かけない母に負け

静岡市

大石たき

初孫の産声聞いて皆安堵

灯をともし仏に告げる今日の幸

泉佐野市

真崎浪速子

健康な汗ゆっくりと砂時計

ブラウン管見るのが恐くなる戦火

唐津市

入江喜久夫

玄関で同時帰宅の共稼ぎ

道産子が乗替えなしの瀬戸の旅

橿原市

西本保夫

世渡りが下手で定年まで勤め

老夫婦だけなら料理などはせぬ

島根県

児玉幸子

火祭りのホラ貝の音峯寺坂

新聞配達終ればぬくい母のお茶

吹田市

西岡豊

首の骨ボキボキならし失語症

欲のない親切だから慕われる

大阪市

山北三三三

夜よりは朝が悲しい不仕合せ

金持が自分基準に話する

奈良県 和田 萬里
トマトなす植えて五月の休み明け
一年に一度もらえるカーネーション

静岡県 三井 三津子
三歳の孫に好かれて疲れ気味
ライバルを持つと女は強くなる

静岡県 西村 千代
親一人子一人やっと嫁が来る
追い越した人に越された八十路坂

島根県 小田川 昭子
新築になってとまどうつばめの巢
連休の中に法要する便り

八尾市 片上 英一
太閤もせせこましがるツインビル
あすのこと誰にも見えぬ太鼓橋

静岡市 丹羽 定次
湯気の立つ味噌汁匂う我が家朝
口で勝ち心に残る口けんか

岡山県 福原 悦子
春の膳木の芽あえにも母の味
鏡台に愚かな心覗かれる

唐津市 野田 旭恒
肩叩き花の生涯幕を引く
三顧の礼無下に断る事出来ぬ

出雲市 高橋 きよし

紐解けば家系図浮沈の跡がみえ
カーネーション母の日母の胸飾る

出雲市 岸 桂子
稲光り師の伝言を聞きもらす
水田に月が遊びに来る季節

大和郡山市 渡部 トキワ
レガッタの背新緑の風爽やかに
忘却も生きたる知恵かと諦める

愛媛県 石手 武
通り魔の事件後ついた街路灯
転々と画商に渡り値が上がり

藤井寺市 武部 敦子
句が抜けて童心になる二重丸
退屈へついふらふらと衝動買い

八代市 増田 一乗
本借りた子がテストでは群を抜き
一日の始まり先ずは歩くこと

佐賀県 山口 松枝
台風の窓いっぱい木が動く
愛犬を亡くし代りがほしくなり

泉南市 坂根 流水
大川の瀬の音やはり故郷です
僅かなる余生飄飄旅に出る

島根県 喜島 ノブ
(前月分)
惜しまれて去りし恩師を日々想う

春風よ私の哀しみ持つて行け

島根県 喜島ノブ

車椅子お供に連れて散歩道

爪だけは遠慮なく伸び日は暮れる

島根県 松本聖子

模様替え心に区切りつけたくて

春愁や老眼鏡へ黄砂降る

鳥取県 久野野草

海鳴りに平家の悲哀今もなお

山桜ながめて今日も歎洗う

富田林市 大澤三四子

乗った舟沈まないけど揺れ続け

春の音緑の若芽誘って

鳥取市 西村黙光

霧深き谷間へ満つる柳友の愛

濃霧晴れひとときわ映える山の峰

大阪府 平山和多留

喫煙はかたみの狭き世となりぬ

老人はいやだが老人パスを待つ

羽曳野市 麻野幽玄

望郷や一泊の距離にある人気

自分には読めぬお経を暗誦し

鳥取県 木下芙葉

手をつなぎ歩く姿に花が舞い

亡き母を偲んで頂く草の餅

大阪府 富岡温子

母ゆずり我が家の味も健在で

浩宮様ワルツで親しい人となり

岡山県 富坂志重

飛び込めばみんなやさしい人ばかり

法律のうらに住んでた大ネズミ

奈良県 横井都姫子

病窓の桜が咲いたもう散った

病院のエレベーターでふいにキス(＼)

高知市 山崎一求

祝日に日の丸掲げる家が減り

若葉車に足踏ん張って助手の席

鳥取市 山田草人

山開き海開きそして老いふさぎ

百姓は黄門様を信じて

吹田市 山田里子

下馬評を定退席は意に留めず

頂けるものならなんでも母の実家

京都市 山脇正之

献体へ素直に同意老い二人

無位無冠これぞ私の人生か

奈良県 田中紀美代

尼さんと仲良くなったグアム海

リラの花好きで乙女にすぐ戻る

富田林市 加藤ミツエ

信号無視ばあちゃんあぶないあぶない

一パイあてにして友の後ついて行く

大阪市 平山登代

永年の家事おろそかに習いごと

宣伝の寺の牡丹は若くして

青森県 波ただお

正直に答を出して叱られる

愛鳥週間カラスの勝手を我慢する

東大阪市 太平太郎

祖母と孫教えられたり教えたり

慣れぬ身で狸寝入りが身に付かず

寝屋川市 豊福路子

娑婆のみち青いごみ箱並べてさ

山吹へ報らせたくない核の数

鳥取市 武田帆雀

審判の二つの目玉と五万の目

地団駄を踏んだ昔の傷がある

大阪市 喜多佐津乃

トンネルに峠の地蔵も淋しそう

老眼鏡借りてキッチン片付ける

大阪市 平井露芳

危機脱しボケと痛みが戻って来

オリオールズ勝つとニュースにもならず

藤井寺市 菊地繁男

パン一つくわえて捨てて犬ついてくる

金儲けだけではすまぬ世の義理も

島根県 星野昌子

ふる里の過疎就職の子を送る

又しても夢を追うてる宝くじ

豊中市 額田明吉

奈良博で悠久ロードの遺物観る

天守閣ツインに挟まれ喧しい

島根県 菅田かつ子

どつしりと鯛の風格祝い膳

アイシャドー塗ってパンダの顔で出る

奈良市 井上大

世をあげて飽食そして多病かな

花粉症いまさう伐れぬ杉林

島根県 岩田三和

黄砂降る漢方薬かねむくなる

ふるさとにミミズが居ない赤い土

◆ジュニアの部

尼崎市 新井晶子

カッターでけずったえんぴつ短かすぎ

電話なるそれきた私の出番だぞ

大阪市 福西範子

カメラを買ってもらって

東京はさくらの上に雪かぶり

ポロライドカメラで楽しい春休み

(10歳)

愛染帖

橘高薫風選

米子市 石垣 花子

あの夢をとてもしかめには行けぬ
左遷という別れも拍手してくれる
糠みそも人の温みに気を許す

堺市 高橋 千万子

美人求む女は一度立ちどまる
はけましたなどと化粧に念を入れ
懸命に父の顔にしている無職

和歌山市 牛尾 緑良

無縁仏のように他国の水を飲む
一歩ずつ夫婦一歩ずつ他人
おにぎりの丸さを本心としよう

米子市 八木 千代

罪の絵もつすい墨なら画けそう
傷に効く草を探しているのです

羽曳野市 吉川 寿美

真実も不実も問わぬおろしがね
こった煮の中で本音が煮くずれる

伊丹市 榎谷 寿馬

マジシャンに愛打ち明けて春の馬鹿
満開に明石の蛸と踊り合う

大阪市 山北 三三三

信心が過ぎて極楽通り越し
男から男へ女欠伸する

青森市 工藤 甲吉

啄木の季節柳が青くなり
万緑の中に外人墓地光る

今治市 矢野 佳雲

酒入れたらしい山頭火の湯吞
ツバクロの腹仰いでる渡し舟

鳥取県 新家 完司

おにぎりは妻が青空は神さまが
蝶のように舞えたら免許皆伝か

唐津市 久保 正敏

人生のブルでターンの繰り返し
浪人の一人は腕をもて余し

唐津市 田口 虹汀

傘寿なお僕は我が家の避雷針
懸命に春を支えている桜

茨木市 井上 森生

菜の花の近くで秋迎の音がする
志一つでつかく葱坊主

藤井寺市 福元 稔

瘦身と美貌お金で少し買え
騒音で平和な小島こわれそう

堺市 山本 半銭

泣き虫になって化粧は控へ目に
お灯明倅せ少し続いている

笠岡市 松本 忠三

老人の世話老人がして楽し
品定め幾らでしたが先に出る

鳥根県 榊原 秀子

真つ白に散りしく花の終りかな
星一つ誰かを探しているような

大阪市 今西 静子

でばちんで宝石見てる女連れ

川西市 松本 ただし

灰色の陽炎が立つ都市砂漠

米子市 林 荒介

今買った玩具が動く猜疑心

米子市 川上 より子

翔ぶ羽根の一翼に母おわします

富田林市 田形 美緒

狙の鯉が脳死をしています

鳥根県 堀江 正朗

闇は平ら昼夜の線に茶碗置く

倉敷市 田中 好啓

シャガールの絵の青い馬赤い馬

香川県 今谷 多織

瀬も潤も塗り替えられて河童病む

西宮市 奥田 みつ子

腹芸も出来ずいつでも体当り

今治市 越智 一水

団結の字が消えメーデーあわれなり

和歌山市 西山 幸

オフエリアのように蜜柑の花が咲く

米子市 寺沢 みど里

花言葉みんな優しい声になる

東大阪市 大平 太一郎

折鶴も折り疲れて色が褪せ

堺市 井上 たかし

おばろ月仁王めめりと闇に立つ

高槻市 笠嶋 恵美子

何ゆえのいくさ阿修羅の目が曇る

倉吉市

大胆に春を脱ぎすて桜散る

吹田市

タクシーの割り勘ジャスト夏木立

西宮市

風邪引きの見舞のようにはらが咲く

富田林市

地揚げがときどきみに来る花鳥

富田林市

種蒔いてうたがい深く待っている

片岡

満潮が凡夫の中を往き来する

米子市

ワンピースワイングラスの脚線美

和歌山市

腹ワタが煮えくり返る笑ってる

大阪府

えんやこらよういどっこい風まつり

島取県

君と呼ぶ友がたくさんありがとう

島取県

甲羅干して亀はシナリオ書いている

名古屋市

口笛はいまだ誤算に気付かない

名古屋市

鮎を配って一番上の柿になる

米子市

朝抜きに側肉食った日曜日

大阪府

万緑に居て時ならぬ寂寥感

鳥取県

花吹雪仁王の足がむず痒い

島根県

一本の桜のこんな花吹雪

寝屋川市

恥重ね愚を積み夫婦古稀に入る

唐津市

バラ一輪わたしの命閉じ込める

竹原市

饒舌の女に翳をかいま見る

和歌山市

牛買いの騒がしくなる町はずれ

徳島市

草に寝てこつぽり空を一人占め

鳥取県

読まれても構わぬように日記書く

今治市

踏んざりがつかずに卵あたためる

和歌山市

逢った日も逢えぬ日も鳴る鈴の音

高石市

利用されるばかりの絆捨てられず

奈良市

二軸目にいつも好みの女が居る

和歌山市

原型が少し歪んできている愛

大阪府

蔵王堂おどろおどろの気が流る

姫路市

飲まれてる花見の酒の吹き溜り

奈良県

いただいた種をお礼の写真集

岡山県

税務署が中流にしてくれました

大阪府

みみずくにうしろ暗さを見透かされ

大阪府

そぐわしいものに才女の胸の薔薇

岡山県

しんしんと大気に軋む夜の地球

岡山県

深く散って実ったサクランボ

岡山県

パズル解くつもりで人情解いてみる

芦屋市

走らねば渡すバトンを持っている

吹田市

ドア締まる時の本音を聞きもらし

鳥取県

行きすりにポツリ雨ねと軽い笑み

和歌山市

ダゲイズム女は少し強情だ

和歌山市

凡俗だ背伸びしないで生きていく

豊中市

お話の中で言葉を選る陛下

兵庫県

流し雛ひとつ還らぬ思慕を載つ

平田市

余生凡々伴せ彩に咲いている

米子市

花菖蒲何がでてくる京料理

守口市

耕花

土居

板東

倫子

あやめ

江口

有一朗

松本

元江

綾珠

照子

たつみ

茜

高夫

登志実

米朝

瑞枝

代仕男

まさお

西宮市 松本一郎
水子地蔵手向けの花の深い傷

大阪市 稲本凡子
子に賭けた夢が実現して独り

大阪市 亀井円女
思い出の詰まった小箱一つあり

河内長野市 植村喜代
ばれていることも知らずに鬼の面

広島県 田村新造
金箔の料理に出会う加賀の宿

弘前市 波多野五楽庵
患者あり父の轍の跡があり

吹田市 西岡豊
いらいらに泰然とした聴診器

唐津市 山門タミ
いかなごに須磨の思い出つめてくる

唐津市 仁部四郎
財布から昨日の傷の呻き声

唐津市 山口高明
やりくりの術も覚えぬ娘は嫁ぐ

摂津市 もちづき遊美
白髪に颯爽として赤ネクタイ

奈良市 井上大
税改革必要ながらさりながら

静岡市 渥美弧秀
ポツクリ寺遠く詩と音楽に酔う

今治市 渡辺伊津志
残るのがなくなったので愛始まる

鳥取市 小谷美つ千
人の世の川は流れる逆らえぬ
愛媛県 石手武

友達が百人も居て疲れ気味
茨木市 堀良江

みつばちも子らも来ず藤いろの雨
茨木市 藤井正雄

粗品だけ頂きに来た案内状
守口市 羽原静歩

岩屋寺の面河鰻頭舌にとけ
羽曳野市 麻野幽玄

保険屋も挨拶だけの歳となり
米子市 田中亚弥

箱舟の少女いつしか母となり
藤井寺市 武部敦子

幸せをこぼさぬ様に回り道
豊中市 三宅つぐ子

花言葉氣にいった花買に行く
寝屋川市 宮尾あいき

草刈機あざみの花にも遠慮せず
岸和田市 三輪通彦

親離れしても子離れできぬまま
和歌山市 古久保和子

込み入った話を窓を開けてやる
富田林市 松本今日子

私にはないものがあひ孫育つ
倉吉市 淡路ゆり子

絆とは我慢の糸を繰りつづけ
寝屋川市 豊福路子

無理せずに野菊のように生きて
和泉市 岡井やすお

高いなと思えばメイドインジャパン
伊丹市 猪原石莊
わが癖に妻よ疲れて居はせぬか

海南市 三宅保
光彩を放って敵に狙われる

出来心見抜く鏡を吊しとこ
米子市 光井玲子

好き趣味の友ありてわが年齢忘れ
西宮市 朝山千世子

花の彩ゆつくり愛でる御堂筋
寝屋川市 河合時弘

お地蔵さんがティッシュペーパー持っている
鳥取県 土橋はるお

この花も色即是空土になる
鳥取県 西浦小鹿

仏壇で紋りをほどこ花菖蒲
米子市 服部朗子

投句先 下560 豊中市中桜塚三丁目13-15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題「失敗」 選者 森中恵美子

締切 7月10日

（ハガキに三句以内）

投句先 大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局、ふれあいラ

ジオセンター、川柳係

発表 7月24日（日）ラジオ第一放送

午前11時5分から

茴香のむ

八木千代選

葱の根の強さと相撲など取れぬ

名古屋 藤井 高子

葱の根に眼を凝らしたのは作者の発見です。こんなあたたかい川柳の眼で葱を掘り下げるなんて。土の哀しみを知りつくす葱の根は、主役にはなれなくてもどんな料理からもうまみを引出します。多数の人の心に深くまっすぐに根をおろしている正直な主張だとも思われます。手ごわくは見えず、柔らかくて優しい葱の根だから、いちばん強いのでしょうか。

肥後守 一本持つて山へ行く

松原 佐藤 藤子

この肥後守はまさかのときの覚悟なのです。今、山は新緑、わらびタラの芽、滝水菜山路、と自然の幸でいっぱいです。陽光と青葉風のすがしさは命のありがたさの再発見。ところが何が起るかわからぬ恐ろしさもいっぱい。解放感と緊張感のくりかえしです。この世の山坂でどうぞ肥後守など使うことありませんように。

子がくれる夜明けの音のオルゴール
折々の花を糸口だと思ひ

米子 川上より子
和歌山 後藤 正子

藪椿 消えそうなので馳けてきた

大阪 田中 弘子

その無理は聞けぬ一対一の旅

寝屋川 平松かすみ

十字架が暮らしの真正面にある

和歌山 西山 幸

公園でちよつと調律して貰う

西宮 林 はつ絵

とじ針の先は思わぬ方に出る

大阪 鍛原 千里

占いは吉でも橋は渡らない
王様に退屈という罰がある

一糸の狂いがあつてはならぬ約束よ

尖つてはみても所詮は紙こより

たかが蓋されど香水びんの蓋

うちの土つけてこの花差し上げる

正面の丸木橋から試される

雑草になりきれぬものもて余す

お葬式すんでしまえば過去のひと

まだ知らぬ夜明けの谷を掘り下げる

風は緑に包帯の足なんとしよう

粥うまし いずれ一人の時が来る

母と妻の重さくらべたことはない

胸ばかり拓くから手足冷えてくる

帰巢本能 妻は安心して眠る

ひとしきり笑ったあとが続かない

土着するまではあなたも泣いた筈

捨身にはなれずに海と向い合う

忘れること下手で足先しんと

さようならしたくないから ただ歩く

雑音を聞く片耳が微熱する

ありがたきことの一つに吾が雅号

プランコを羨ましがるやじろべー

神さまの罰重すぎる筈がない

てにおはを一つ違えた目が冴える

島根 松本 文子

米子 林 瑞枝

和歌山 松原 寿子

藤井寺 高田美代子

和歌山 山川 克子

米子 足立由美子

佐賀 寺中三枝子

和歌山 森 茜

鳥取 川崎 秋女

米子 服部 朗子

尼崎 春城 年代

堺 山本 半銭

大阪 本間満津子

寝屋川 宮崎 菜月

高槻 笠嶋恵美子

大阪 堀 いくの

富田林 片岡恵子

米子 青戸 田鶴

鳥取 広本 文子

河内長野 植村 岳代

羽曳野 吉川 寿美

寝屋川 稲葉 冬葉

米子 石垣 花子

西宮 奥田みつ子

和歌山 福本 英子

血のめぐり早い男とグーチョキパー
 すぐ曲る釘ならたんと持ってます
 私のままで咲いてるねじれ花
 宝刀を抜いたが空を切るばかり
 歩かずに富士に登った自己嫌悪
 自己暗示いまほど若い時はなし
 許せない事も許して旅に出す
 火を抱いた宝どこまで守れるか
 海を信じてつかずはなれず飛ぶ鷗
 人のこと言うまい言うまいひよつとこ面
 カーネーションあなたの母で良かったと
 広すぎる部屋に静座の場所がない
 沈丁の葉かげに哀がつるされる
 窓あけることを覚えた紙人形
 通り雨 惑い一気に消してゆく
 健康にもどれば何といそがしい
 草に寝て草も寝ているやわらかさ
 いつの間にか労わられてる子も大人
 トントン拍子いやな予感の音もする
 「エイ」「トウ」の気合い二人の私で
 尺貫法 母には母の花ごよみ
 ジョークのない鬼をかごめに揉めている
 むらさきの花房 母の背の匂い
 ストライク恋の三振ばかりする
 泥の舟あの人となら乗れそう

大阪	津守	柳伸
高槻	河瀬	芳子
松江	竹内寿美子	
大阪	西出	楓楽
米子	新	正子
大阪	嶋村美津子	
米子	小村てい子	
徳島	宮武まつ女	
米子	金山	夕子
八尾	宮西	弥生
富田林	田形	美緒
和歌山	坂部紀久子	
岡山	矢内寿恵子	
米子	政岡日枝子	
広島	流	奈美子
吹田	栗谷	晴子
和歌山	染道	佳明
大阪	鈴木	節子
和歌山	桜井	千秀
米子	野坂	なみ
岡山	土居ひでの	
貝塚	池田寿美子	
茨木	堀	良江
鳥取	小谷美つ千	
岡山	灰原	泰子

綱引をくりかえしては空を見る
 芽の出ない種に水やる児がひとり
 夫似てそれは自慢の姫だるま
 泥ごときでわたしが消えるわけじやなし
 淋しくて折づる蘭の数が増え
 吊橋が揺れてどんどん逃げる雲
 木の芽とき今年も何かありそう
 葛藤を逃げようとして鍋みがく
 三度三度 母の好みを強いている
 筆先にみごと雑念見ぬかれる
 フライパンで煎られるごとき焦燥よ
 歩け歩け瀬戸大橋に亀の足
 夜明けまでは昔の夢に甘えます
 団地にはかくれて泣ける場所はない
 雪しきり幕は静かに降り始め
 無為無策 箒倒れる方へ向く
 想い出が素通りさせぬ花時計
 早死にへ小言の水をかけてやり
 遊び疲れてすこし無口な藤の房
 ジーンズにない風格の藍木綿
 終電車 美人のあくび見て欠伸
 怒ったり泣いたりしても生きている
 茴香はけなげな花の集まりね

米子	沢田	千春
奈良	横井都姫子	
和歌山	田中	みね
堺	鈴木三千代	
倉吉	淡路ゆり子	
大阪	町田	達子
兵庫	倉垣	恵美
米子	光井	玲子
枚方	森本	節子
和泉	中川	楓
和歌山	木本	朱夏
岡山	千原	理恵
西宮	秋元	てる
寝屋川	岸野あやめ	
富田林	藤田	泰子
鳥取	伊吹	富恵
和歌山	内芝登志代	
大阪	古川美津枝	
米子	寺沢みど里	
香川	上藤	多織
有田	松井かなめ	
米子	大田みさと	
摂津	もちづき遊美	

ハガキに雑詠3句 毎月10日〆切
 投句先 〒683 米子市花園町14

八木 千代

句評リレー

前月号から

藤井 明朗
神平 狂虎
竹内 紫鏑
小出 智子

やうへんやうへんやうへんやうへんやうへん

有働 芳仙

明朗 春は万物躍動する季、さくらを楽しむ苦が喜怒哀楽を秘めて散ってゆく。この句はそうした世情を詠歎して共感よぶところもあるが省略過ぎて十五字、表現不足とも思ふが。

狂虎 句調、リズム感の大切さは言うまでもありませんが、その中に、已むに已まれぬ作者の感情移入が、より重きをなすべきだと思ひます。

紫鏑 一種のリズムの句だし、こつという型破りの表現が出てくるのは楽しい。住居の近くの桜も、種類や天候で散り方がさまざまだ

——という素直な解釈をしてから、桜前線の動きの報道が次々流れる「賑やかな日本」になったワイ、という句意にとりつつある。

智子 この句の中の「と」について考え込んでしまいます。散る花の風情をたたみ句のかたちで表現されて「と」に意味が籠められているのでしょうか、私は「と」がない方が桜に対する思い入れが深くなるのではないかと感じたのです。

明朗 智子さんの評も一理あり、この句はさくらに人生を詠じ、悲喜を表わしていると思います。表現がたたみ句として、新鮮味を言い得ているようですが、下5に目が集まる気がします。

狂虎 どなたの句評も、なるほどと思いますが、結局、「さくら」を通しての自己主張だ

と言えるでしょう。つまり「さくら」としての気品と、誇りを最後まで失わず散りたい、それが又、作者自身の気持に思えてなりません。

紫鏑 説明し尽くさないと読者が余情を汲み取ってくれる句がよいのだろうが、手掛りの少ない句に苦しみ、逆にスピーチ過剰になるのもこの宿題のせいだ。最後に「松島やあ松島や……」という句を思い出した。

智子 前に書きましたように、やはり「と」にこだわっています。この句から感じ取るものは、散っている桜の素晴しさを一句に纏められたと思うからです。

リトマスに浸してみたい足の裏

波多野 五楽庵

明朗 足の裏はくせ者である。人をだますよろめきも、人それぞれのくせを見る。ほんとに足の裏も検査をして見たいほど複雑な世でもある。この句は共感を呼ぶところがある。

狂虎 句の中で時々「裁かれる」とか「試される」というのがあるが、それはあまりにも傲慢でしょう。元々人を試したり、裁いたり出来るのは「神」より他にないでしょう。

紫鏑 まず、技術屋としての連想をした。

体液の酸性・アルカリ性に注目する健康の尺度を、手軽に調べたいという願望と、足の裏の湿りが気になる中高年の不安とを、結びつけた心境か？ ユニークな発想。

智子 作者はお医者さまとか聞いていますが、さすがおもしろい発想をされる。しかし「足の裏」というのは少々不消化。何かはつきりしたものを掴みたいと思つ焦りでしょう。

明朗 人間の足の裏は忘れられている。歩くことを知らない、足の裏の弱点を見直す風刺の一矢とも見たい。

狂虎 この場合、やはり「足の裏」は又、心でもある筈で、それを試したいという心の迷い、不安が感じられます。

紫鏑 今度はじめて作者の「職業を知った」「足の裏」はよく効いている言葉だと私は思うし、身につまされることでもある。リズムも良い。

智子 ある時ふつと良い発想が思い浮かぶことがあります。さて下五はとなるとなかなか適当な言葉が見つからない。こんなことに何時間とも思い煩うことがよくあります。「足の裏」をもつて一度考え直してみたいと思います。

受付に縁起をかつぐ人が居り

森川 まさお

明朗 よくある情景で、何をかつぐか、受験か、縁談か、何げなく上へ上げていく。欲を言えば下五に「工夫あり」そんな氣も無いでもないが、如何でしょうか。

狂虎 人は自分の意志とは関係なく、産まれ、そして生かされている。心にやすらぎを与える生き方を探して止まない。

紫鏑 中七以下が言葉として平凡。「受付に」だけが一句を意味あらしめているが、迫力を欠く。想像するに、例えば有名幼稚園に入る申込みのさい、番号で縁起をかつぐ人があるくらいに、運に左右される時代になったことを諷した句なのだろうか。

智子 この句を見てまず感じたことは、何の受付だったのだろうか？ ということでした。上五で領ける何かがあれば、この縁起が生きてくるのではないか。紫鏑さんもそのことを書いておられます。

明朗 智子さんの評に同感。表現の弱さ、内容に突っこみが欠けているような氣がします。句想の平易さを感じますが。

狂虎 人の「弱さ」は又、見方によっては

美しい、縁起をかつぐという姿も、写生を越えた「念い」が欲しいですね。

紫鏑 作者の意図を察し切れなくて申し訳ないが、そのうち何かの「受付」でコレダノとヒザを叩くことがあるかも知れません。その時は、後半を短くすることになりそうです。

智子 この句の場合、「受付」に具体性がないので下五が説明になっていると思います。紫鏑さんのご意見のように、内容をはつきりさせると下五は不要になり、もつとすっきりした句になるのではないかと感じたことです。

告訴する程でなし妻の便秘症

板尾 岳人

明朗 中年近くなった夫婦、現代病とも言われる諸々の疾病、医者にも解らない事が多い。上五に告訴すると上段に、下五の便秘症と、何げない生活の一端を思わしむ。

狂虎 血が通う、道が通う、心が通うという言葉があるが、心の通わせたい句想は、必ずや何処かで読者の心を打つ筈だと思います。

紫鏑 こういう暗喩？ はにがて。しばらく考えたが、句の良さが分からぬ状態。

智子 発想の意外性がすべて……。そんな感じのする岳人さんらしい句だと思います。

便秘症を暗喩とするならば聞き捨てに出来ないものがあるようだが、確かに一般受けのしない作品と思われる。

明朗 人間の病いは多種多様となる、近年特に感じる事が多い。作者の表現に、はっとさせられ、病いではなかった。表現のうまさ。

狂虎 「逃げる」か「突っ込む」か、そこが句の鑑賞の醍醐味でもあると思いますが、この句の場合「妻」をフィルターにして、何処か遠くを見ているような、そんな作者が浮かんできます。

紫鏑 前回は考えすぎだったようです。誤診を告訴する時代の、ある家庭内の心の揺れを想像します。

ついでながら、私は同人の顔も職業も齢も全く知らず、いわば無記名作品として読んでいます。「誰々さんらしい作品」という解釈の手順はないのです。そういう、離れ小島の人間に句評をさせるのも一興と思われたのでしようね。作者の背景を知っている方が大きく肯ける（選を通る）ということはあるようです。本句に関係なく弁明。

智子 紫鏑さんが「作者の背景を知っている方が大きく肯ける」と書いておられますが実のところ私も何も知っていないのです。ただ解っていることは、奇想天外なことを句に

する人で、それがその人の個性とも言えるのではないかとも思えるのです。「便秘症を告訴云々」こんな思い切った発想をする人が他に居るでしょうか。一句としての成功、不成功は別として、そんなおもしろさがこの作者にあると感じました。

腐らせるのがとても上手な冷蔵庫

新家 完司

明朗 豊かなくらしを突いて反省するところ多い。無駄なものを買ひ、使い捨てにする。やんわりと、まことにちくりと痛い。微笑笑を誘う。平易的を得て感銘するところ非凡である。

狂虎 逆説、皮肉、いずれも作句の手法だと思えます。そしてその一句の中に何よりも新鮮が必要でしょう。つまり句想が新しいか、それとも表現が新鮮か、そのいずれかが現在の川柳には要求されているように思えます。

紫鏑 近ごろは、三段式の内容別的大型冷蔵庫が宣伝され、それをアテにしきった利用者が時に後悔する。つまりは誰かの巧妙な作戦だった、とする見かたもできる。作者もひねりが「上手」である。

智子 三人の方のご意見に、なる程と頷いています。私も「皮肉」と受取りましたが、それにしても好作家の完司さんの作品にしては少しもの足りない「腐らせるのが」である。

明朗 この句上七がリズムに難いようで、発想はうまいし、風刺も効いて共感するところが多く、川柳の本質を見がち得て老練。

狂虎 「腐らせる」のが上手な「冷蔵庫」ならば、言わずもがなで、きつと掃除も洗濯も駄目だと言えうでしよう、せめて冷蔵庫に「詩」を、と言いたいですね。

紫鏑 明朗さんの二度の感想と同じです。冷蔵庫の罪にしたような、とほけた表現で人を叱る——そんな上役が会社にもいました。

智子 みなさんのご意見も出尽くしたようです。この作者独特の軽味の佳句を作る人にして、つい欲なことを考えてしまします。

六十の浮気は色でなかりけり

板東 倫子

明朗 六十の浮気と、言訳のような表現さばはえましく、さわやかさと思う。若返り、ストレス解消に役立つ色気でもある。下五とばけて、遠慮がちの実年を表わしている。

狂虎 「人の道」の事はともかく、年齢の

句は又、いわゆる「動く」句に陥る怖れがあるように思いますが、如何でしょうか。

紫鑄 俳句や短歌の文法では、適切に使われた「なかりけり」は、虚子の例句もあるが誦して実にきれいだという。川柳では、パロディにもなるが難しい。本句は、内容として古くはないか。

智子 この句は「六十にもなれば色気ではない」ということを説明しているだけだと思います。年齢の句は動くと言われる説に私は雑詠の場合、その年齢に対する深い感慨があり年齢は大切なもの。従ってその年でなければ出来ない程の作品でなければならぬと思います。

明朗 下五のなかりけりは、やや古さも感じますが、この句の場合、遠慮さを表わす表現と思われます。恋心はいつ迄も、如何でしょうか。

狂虎 それぞれの年齢に、それぞれの輝きがあるものですね。そしてそれは又、生きている証でもあるわけで、それだけに毎日を大切にしなければと思います。

紫鑄 「金と力はなかりけり」といったウガチの句ではなさそうですが、現在形でなくてこういった文語調に書かれた理由がまだ判りません。智子さんの言う通り、ある齢にな

ると気がつくということは確かにありますが、否定で終った句なのが物足りません。

智子 二度目にリレーされてきて気付いたことは、この句は作者自身のことではなく、第三者の眼で捉えたものを表現されたものであろうと感じました。それだけに句が余所事のようにになったのだと察しられます。それだけ作品とは敏感なものだと感じたことでした。

犬連れて娘は逢いに

直原 七面山

明朗 作者の雅号は古くから知っています。岡山大会でも一度お会いした先輩である。終始この句風を持論とされているようで、参考資料にしています。句の余情は下五へ預けられている。読む方の心次第、まねの出来ない句であり作者の独特の表現で個性は尊重。

狂虎 静かな池に、小さな石を投げたような句、どんだん広がつてゆく波紋は限りなく楽しい。それは、そこに作者の深い愛情が伝わってくるからです。

紫鑄 「逢いに」で句が活きてくる。柴犬綱、娘のすらっとした背、長い髪、などを描いた新聞小説の挿絵を想わせる。最小限の字数で、心象風景を浮ばせる作者の努力に敬服

する。

智子 明朗さんが書いておられるように、大先輩の句、字数が少ないだけにより深い思い入れが必要となってくる。この句の「犬連れて」が深い意味性をもっている。

明朗 やはりまねの出来ないリズム感がある。人物、情景、表現によつては深く、浅くの余情はあるが、余情ひろがる句である。

狂虎 嬉しくなるほど、生き生きとした句だと思います。そして「犬」よりも「娘」よりも、句の背景に居る父親の気持ちが熱く胸に伝わってきます。

紫鑄 紹介者も出会いも（私には）めったにないが、本誌を通して氏の「自選百句」（昭和60）を見た記憶は強烈である。誰にも思い当る暮しの機微を8-10音に煮つめた句がよくも続くと感じ。別人の感想を読むのも今度が初めてだが、七七調句作者として安心した。

智子 七面山氏には路郎先生もこの五五調を特にお許しになったとか、ある故人からそんな逸話を聞いたことがある。それだけに自信をもって作句されているのだと思われま

す。皆さんの真剣な協力で句評リレーを終えさせて頂きます。ありがとうございました。

言いまわしの個性

—先輩作品の分析—

(二)

(1)

竹内紫鏑

1、国語辞典の移りかわり

明治24年初版の『言海(大槻文彦編)』の付表から、五十音別に和語と漢語の比率が出せる。10倍以上に和語が多いのは、

あ、う、お、つ、ぬ、ま、み、む、わである。逆に漢語が和語より多いのは、

し、せ、ち、そしてラ行の字だけである。見出し語の数の点では「し」が一番多く、以後90年間、国語辞典でトップに立っている。3%以上を点める音を順位どおり並べると、表1のようになる。頁数と語数はほぼ比例すると見てよい。語数のほか使用頻度を考えたとき、俳句は季語多用のため五十音別句頭語数の順位は変わってくる。また、川柳の作品では季語とは違う特定の語句が多く出る。

新聞や小説のような多量の散文については、角川小辞典によると、「異なり語数」では漢語の方が多く、「延べ語数」では和語が多出する

表1 辞典の見出し語の語頭音の多出順位

頁数の 順位	言海 (1891)	広辞苑 (1983)	コンサイス 外來語辞典 (1987)
1	志	し	フ
2	か	か	ハ
3	さ	こ	ア
4	は	き	シ
5	い+ゐ	た	ス
6	た	は	コ
7	あ	あ	ク
8	こ	い	カ
9	く	お	ト
10	お+を	さ	ホ
11	ひ	と	オ
12	き	ふ	テ
備考	全体の和語：漢語の比＝62：38 「し」は漢語>和語		ハ、フ、ホの元は欧語のf, p, h, b, vなど

ことが円グラフで示されている。「延べ語数」が多い語句は、多い順から「する」「いる」「いう」「(漢語)こと……」といった基本語である。文章中に頻出する名詞・形容詞に関する記事の統計(個人の書くものは、好みが更に偏るだろう)には触れない。

昭和31—44の間の国語辞典の見出し語は、和語37%、漢語53%、外来語4—8%、混種語

2—6%と数えられているから、漢語は明治時代よりかなり増加したことになる。外来語は『言海』時代は14%に過ぎなかった。動詞は今でも、大部分は和語だが「愛する」「信ずる」などの混種語が少しある。外来語は新聞記事では8%ぐらいになり、いろいろの分野に、ハ行の外来語が進出している。

2、作句修業と表現語彙

他人がめつたに使わない句語を知っていれば、時には前書きが必要でも武器の一つになる。一般に、人間は使える語彙に偏りがありスピーチの時には癖が出る。恥ずかしがって使わないでいると、失語症の方向へ漸次進む。句でも散文でも、読んでいるだけでは頭の鍛練にならない。白い紙に書くことは時間(秒刻み)に縛られる発言と違い、納得のいくまで表現を推敲できるはずなので、時間をかける習慣は続けるべきだ。

最近、流行し出したワープロは、推敲するための機械なのに、あれが点滅していると気が

が落ち着かず、スピーチの心理——早く言葉を決める気持や玉虫色に収めておく気分——に傾くものらしい。

以前述べたことがあるが、作文でも談話でも、自力で白紙に書ける言葉を豊富に持たないと仕事にならない。それを「表現語彙」という。以前これを発表

語彙と書いたが同じことである。これとは別の、受身で読む（聞く）とき解る言葉は理解語彙（受容語彙）と呼ばれる。前者は後者に比べずつと少ないが、連想ゲームの強い人はそれが豊富だということになる。

職業用語を頭に収めて使いこなす人は、「その道」の表現語彙は多いだろうが、生活相談のときの説得力が乏しいこともある。仕事熱心で無趣味で、家では無口という人物には心当りがある。

表2 句集索引における句頭音の多出順位

句数 順位	明治書院 俳句大観 (1974)	浜田・神田・渡辺編 「川柳のすすめ」 (1979)	田辺編「川柳 でんでん太鼓」 (1985)	橋高薫風著 句集「愛染」 (1986)
1	か 8.0 %	か 7.0 %	し 7.6 %	し 10.3 %
2	あ 6.7	し 6.4	こ 7.3	は 7.0
3	は 6.5	こ 6.0	お 6.0	お 5.1
4	し 6.0	は 5.7	は 6.0	こ 4.8
5	ひ 4.8	と 4.8	た 5.1	か 4.5
6	こ 4.2	あ 4.6	か 4.8	い 4.3
7	た 4.0	お 4.5	ひ 4.5	あ 4.2
8	い 3.6	た 4.4	あ 4.2	ひ 3.5
9	ふ 3.6	ひ 3.9	い 3.9	き 3.4
10	お 3.5	い 3.0	さ 3.6	く 3.2
11	う 3.1	ふ 3.0		
収載 句数	7,500	863	646	880

さて、句を練るとき「言いまわし」となると、主婦の方が軟かい和語を使い慣らしていることが、本誌の作品ですぐ分かる。筆者はその辺が苦手である。単語は理解できても句意は暗示的で、すぐにはのみ込めぬ場合がある。

それと違って、サラリーマン社会は、それ自体が漢語主体で成り立っている、といえそうである。履歴書、面接、就職、入社、通勤、残業、昇進、秘書、美貌、栄転、上司、辞表、定年——という漢語がそのまま句に入っている。拙句を顧みると、そんな題材を扱ううち和語使用能力が後退してしまつたらしい。

3、俳句の多用語

さてここで、俳句の上五の出かたを調べてみよう。句頭音を五十音順に並べた索引付きの書物『俳句大観』——明治から近年までの七、五〇〇句を収載・解説したものである——から句数を算え表2に記入した。川柳とちがいに、「し」よりも「か」「あ」「は」がその順に多用されている。しかも、季節でそれが変わるのだ。理由は、カン（寒）、シュン、シュウも出るが、和語の春、夏、秋、冬、初、が多数現れるからである。

次に歳時記にある有名句（約三百）を対象に、季語の置かれる位置を調べると、季語は上五に50%、中七に21%、下五に27%、そして句またがり（1-2%）になった。「句またがり」というのは、例えば中七から下五にかけて一語が続いている状態をいう。

4、川柳の多用語

次に、川柳解説書二篇を取り上げ、その索引の句頭語を数え上げた結果を表2中に%で示した。「し」が多いのは大抵の句集と同じである。そして俳句の季語に当るような頼出語は、子、友、親、男、母、神といったところである。老（おい、ロウ）の字もかなり見え、作者の境遇に共感はそののだが、今日の柳詠ほどは多くなかった。その他の多出語には、朝、大（おお）、花、一人、一、などがある。

さて、次は個人句集の鑑賞・分析である。

まず、橘高薫風氏の『愛染』を一念に研究した。句頭音の多い順に示すと、し、は、お、こ、か、い、あ……となる。「し」が特別に多く10%を超すことに注目したい。これは、「路郎忌」や「師」という字句がよく登場するためと思う。「十二月」とか「白」も目につく。固有名詞を多数使うのは、選者級の作者の行き着くところではあるまいか。類句を避ける心理と、テーマを決めた連作が考えられる。

薫風の作品に「は」が多いのは、母や花をよく詠んでいて、それが上五に來たとき目につくからだろう。初鏡、初光り、初日記など

は俳人の愛用語だが、この筆法は川柳家も学ぶとよい。師を尊い、家族を愛するという心情は、作句の基本態度として大事なことと思う。

筆者（紫鍔）は前に述べたようなサラリーマンで、和語が退化きみである。そこで「あい、う」を調べると、『愛染』では「ああ五十」「いつまでも」「旨いとも」「おぞまじき」等の表現があり、大変参考になる。思い浮びそうて浮かばない言葉である。次に誰でも少

表3 個人句集の句頭語の分類

作 者 名	調査対象句数	語 種 %				固有詞名 %
		和語	漢語	外来語	混種語	
橘 高 薫 風	(愛染) 880	51	36	4	3	6
工 藤 甲 吉	100	55	34	5	2	4
高 杉 鬼 遊	100	55	40	1	1	3
野村太茂津	100	43	36	10	3	8
濱 野 奇 童	100	49	42	5	4	—
八 木 千 代	100	72	16	3	9	—
竹 内 紫 鍔	180	25	58	14	1	2

ないのがラ行の句である。「ルンペン」はどいう一句に仕立てられたのかと、本文をめぐったら、

ルンペンに王候の鬚詩人の眼とあるではないか。やられた……と感じた。「王候貴族」という成語は知っているが、「の」をはさんで詩語にする「語彙の加工要領」をひとつ学ぶことができた。

最後に、表3のように個人別に、上五表現の特徴を探ってみた。経歴の違う二人の作品（百句）を並べてみると個人差がよく分かる。二、三の女性作家を当ててみると、男性作品とはハッキリ違った数字になる。

拙句中に外来語と漢語が一番多いのは、新登場の商品に注意し、人間心理を考えることが職務上あるためかもしれない。固有名詞が少ないのは旅行しないのと、有名人にまつわる出来事あまり知らうと思わないせいだろう。

本稿執筆中、松井栄一氏（現山梨大学教授）に語彙の分類について指導を戴いた。厚く感謝する。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 前月号から

柳 楽 鶴 丸

猫舌のあなたに合わず玄米茶

寺 中 三枝子

猫舌に合やす事は難しい事です。「玄米茶」は生活の全てを現わしています。何時迄も幸せに。

息切れをしない歩幅で生きている

足 立 由美子

平凡ではあるが無難な生き方です。チャンスがあっても息切れしては何んにもなりません。

電子レンジ操作 男も自立する

高 杉 千 歩

今迄は女の自立が叫ばれていたが現在には男。男やめめ惨めさを見ると男の自立と言われる事はよく理解出来ます。

もう二度と掛けることない椅子を撫で

舟 渡 杏 花

実感のこもった句です。私も二年前退職した際これと同じ感じでした。淋しかったです。

ご飯ですババは日曜大工さん

片 平 静 代

よいババさんです大事にしてあげて下さい。手のひらでゆれる豆腐をだまし切る

永 田 俊 子

だまし切るとは面白い表現です。朝の味噌汁をつくる時よくやります。そこからドラマが始まります。

小鳥のラブコールせめてピンクの服着よう

永 田 俊 子

若さですネ春ですネ年を取っても浮々します。春帽子かぶって足がはずんでる

宇 野 昭 代

そのものズバリ実感でしょうが、健康的です。お揃いの茶碗洗える老いの幸

大 田 みさと

誰もそうありたいと思っていますが、人生はままならぬもの、何時までも元気で。

ジョギングがその気にさせたハワイ行き

松 川 芳 子

ホノルルマラソンですネ。頑張つて下さい。

いつ株を買うたか妻の相場欄

上 田 柳 影

世相がよく出ています。財テクブームうまい話に乗り、深みにはまると大変、欲もほどほどに。

墨壺の糸が妥協を許さない

小 山 悠 泉

一度打った墨は消せません。頑固者をよく表現しています。

デザートのように年寄り薬のみ

杉 山 や す

デザートとは面白い表現。実感でしょうか。

ハンカチの折れ目に妻の愛がある

金 村 青 湖

細かいところによく気のつく奥さん、ハンカチの折れ目が生活の全てを表現している。青湖さんは愛があると言い切っているの、これ以上何も言う事はない。お幸せに。

餅肌へ触れた石鹼の独りごと

森 安 夢之助

石鹼がネ何んと言っていましたか面白い句。グルメブーム結局落ちつく母の味

朝 倉 大 柏

何んだかんだと言っても母の味に勝るものはありません。大切にしておいて下さい。

青いレモン下着は白と決めている

新 正 子

青いレモンは御自分の事ですか素敵ですネ。中流をバイトやパートで持ちこたえ

明 壁 敏 之

世相が出ています。あまり背伸びしない様に。私の駄句に「方程式のない中流に背伸びする」

嬉しくも淋しくもあり無料バス

平 山 和多留

全くその通りの実感句。着想は一寸古い。目を閉じる明日が見えるまで閉じる

岸 桂 子

静かに反省すれば必ず希望がわいて来ます。手も足もあつて出来ない事ばかり

松 本 元 江

誰しも思う事は同じ。羨しく思うより自分だって誰にも出来ない事が一つはあるはず。自信を持つ事です。

花は舞う大唐の春

東 野 大 八

漢の高祖劉邦は、四年間にわたる漢楚の壮烈な抗争を勝ち抜いて宿敵の項羽を倒すと、洛陽に都をおくことを考えていた。これに對し側近の婁敬は洛陽首都論に強く反対した。

「洛陽は確かに天下の中央に位置し、各地の諸侯が貢物を献上し夫役を出す距離が等しいという長所をもちますが、徳がなければ滅びやすい土地柄であります。漢の建国は武力によるもので、この点、徳を重ねた周王朝とは全く異り、四方にはまだ怨む者も多い現状です。従いまして、肥沃な天府の土地、四方のふさがる要害の地にある秦の地（長安）こそ都にするにはふさわしい。秦の地ならたえ山東（函谷関以東）の地に急変が起りますとも百万の兵がそろえられます」

高祖が群臣にその可否をたずねると、群臣はみな山東の出身だったので、わずか二代で

滅んだ秦の故地よりも、数百年続いた周朝の旧都洛陽こそ都にふさわしいといった。（「漢書」婁敬伝）迷った高祖は知謀の臣で、最も信頼の深い張良に尋ねた。張良は

「洛陽は土地が狭く地味もやせていて四方から敵を受けます。ところが関中（長安周辺）は三方天險に隔てられた沃野万里の土地柄であり、ただ東方の一方だけで諸侯を制圧すればよい利点があります。平和な時は黄河と渭水を利用して天下の物資を運び込み、もし諸侯に異変が生じれば流れを下って兵士や物資の輸送ができます。関中こそ金城千里、天府の国と申せましよう」

と答えて婁敬の説を強く支持した。高祖はこの言によって長安に都したという。（「史記」留侯世家）長安が前漢二百年の都城に選ばれたのは、要するに農業生産に恵まれ、しかも

軍事的機能が卓越したことに基いている。長安の名は、秦代の長安郷の名に由来するといわれ、この名称の採用には子孫が長えに安らかであるという願いと祈りの気持が込められていた。（「三輔黄圖」序）班固の「兩都の賦」には長安城の位置を

泰嶺にのぞみ 北阜（北嶺）をのぞみ
澧・霸に挟まれて 竜首（原）に拠ると表現する。

前漢の都長安の人口は五十万といわれている。「長安の閭里一百六十、室居櫛比し、門巷修く直し」（「三輔黄圖」卷二）とある。漢代の長安は、宮殿や官署および高官・貴族・諸侯の大邸宅が城内の二分の一以上を占め長樂・未央の二大宮殿だけで、全城の三分の一以上の面積があり、武帝の時代には新改築された明光宮・桂宮・北宮を加えると二分の一を越えたところ。

紀元前二〇〇年完成した未央宮は「未央（きんぎょ）きず」という名称に暗示されるように、中国の歴史上、最も長く使用された宮殿である。前漢二代の恵帝以降、天子はこの宮殿に住み絶え間なく修理された。はるか後年の唐の武宗の会昌元年（八四一）にも修復されたという記録もある。未央宮の周囲は約八・六、大帝の住む宣室殿を中心に、それを取りまく

諸殿は、あたかも北極星をとりまく燦然たる諸星の如くであつたという。

前漢の末、長安は赤眉の乱によつて廢墟と化したため、後漢時代は都は洛陽に移つた。

三国魏の時代、乱世の梟雄董卓は、幼帝献帝を洛陽から拉して、自分の根據地長安へ移つたが、養子呂布のため未央宮で殺された。

この時代、長安は諸葛孔明の率いる蜀漢の北伐軍を防ぐ軍事上の要地となり、司馬仲達らがここに駐屯した。西晋時代には異民族が流入し胡漢雜居都市と変じ、いわゆる五胡十六国の乱世以降、長安は前趙・前秦・後秦・西魏・北周の五王朝が盛衰し、未央宮はそれらの朝廷の役目を果たしてきたが、東晋の太元八年（三八三）苻堅の肥水の戦いによつて長安はついに壊滅的な廢都と化した。

このあと名僧羅什によつて弘始三年（四〇一）都長安は一大仏都と変じた。長安きつての名刹草堂寺はこの名僧をまつる寺だ。

かくて北魏・西魏・北周・東魏・北齊・隨代の二百十余年を経て随滅び唐が起る（六一八）。長安はまたも甦えつたのである。

「家々の門には長安の道あり」「大道長安に通ず」等と称された大唐帝国の都長安の幕明けである。

都城の人口百万から百五十万、高宗の顯慶

元年（六五六）「大唐三藏聖教序記」の碑石が大慈恩寺境内に運ばれたとき「京師の士女の観る者 百余万人なり」（大慈恩寺三藏法師伝）と伝えられている。

唐の元勳高祖は名君でそのあとを継いだ名君太祖の世を貞觀の治と呼ぶ。貞觀元年（六二七）にはじまる太祖百年の計は、千年の計と称される享和民福八方に気配り眼配りした庶民の和平浄土を現出した。この貞觀年間にシルクロードの道をとりに印度に赴いた玄奘の取経記がはじまる。唐の瓜州を出て西域の玉門関を迂回し、ただひとり赤毛の老馬にまたがった逞しい僧形の若者こそ、出国禁止の国法をおかし印度への求法の旅にのぼる唐僧玄奘その人であつた。十九年の歳月を費して彼のもたらしたものは佛像八体、經典六百五十七部、仏舍利百五十粒、これらを朱雀大街に陳列するのに馬22頭を要したという。

顯慶四年（六五九）彼58歳のとき、慈恩院から玉華寺にうつり、ほう大な般若經の翻訳にとりかかった。かくて滿三年十一月で全六百卷の漢訳大般若經を完成した。これをもつて彼の訳出した經典は千三百三十五卷に及び、すべてを成し終つた満足感のうちに六十三歳で入寂した。有名な「西遊記」の三藏法師のモデルこそ他ならぬこの玄奘であつた。

世界文学史上、唐都長安は多くの詩人によつて謳歌された古都は他に例をみない。中国の古典詩は、唐代（六一八―九〇七）に絶頂期に達した。長安こそ中国詩人の洩瀝の地であつた。それこそ数多の唐詩選社を中心とした詩人がきら星のごとく輩出し、さまざまな榮章を奏でた時代である。

弓削川柳社創立40周年記念

第40回西日本川柳大会

とき 昭和63年9月3日（土）、4日（日）

ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削
久米南町中央公民館ほか

9月3日 久米南町内觀光と大園遊会
9月4日 川柳大会

兼題 「乗る」

石原 伯峯選

「渡る」

海地 大破選

「惑う」

小松原爽介選

「宴」

田口 麦彦選

「メグル」

西尾 渠選

「幕」

森中恵美子選

特別題 （当日一題）

安藤富久男選

各題2句、当日10時締切

参加費 二千元

この唐詩人中の巨星は李白と杜甫である。李白といへば、直ちにバツと花開く想いがするのが玄宗と楊貴妃の一大ロマンだ。

玄宗は開元年間を二十九年、天宝年間を十四年この間の四十三年を皇帝として過したのだが、この時期を盛唐と呼ばれ、詩文学の最盛期とされ、気力にあふれた唐朝の輝やかしい平和と繁栄を讃える発らつたる詩章が溢れた。「憶う昔、開元全盛の日」と老いたる杜甫が成都で作った「憶昔」にもある。

天宝初年、李白は道士呉筠の推薦によつて玄宗に招かれ都入りした。大志を抱いてきたはずの李白は、翰林供奉という閑職をあてがわれ、やけになつて酒杯を離さなかつた。

そんなとき、興慶宮の牡丹の花が盛りで、玄宗は貴妃を連れて見物にきたが、同行の樂の曲が気に入らず「名花を賞し、妃子に對す新詞なかるべからず」と李白を呼んだが、既に彼は泥酔していた。酔いざましの薬を飲ませ詩を作れと命ぜられたが、詩人は酒を所望し「臣は斗酒百篇、酒をのむほどすばらしい詩ができる」と忽ち詩章三篇を書きあげた。世に残つた「清平調詞」である。今もこの場所には興慶宮公園として開放されている。ここで彼の有名な白居易の「長恨歌」も想ひ出されよう。

西安の東25[°]の華清池は驪山の麓にあり、ここで湧く温泉が世にきこえた「貴妃池」で楊貴妃が入浴したところだ。現在ここでは、貴妃が髪を梳いた「飛霞閣」と「長生殿」が觀光用に建てられている。ここには白い土塀の上に「長恨歌」全文が掲げられている。全部で百二十行。玄宗・貴妃のロマンスを讃え嘆じた四部編成の長詩である。第四部には

七月七日 長生殿
夜半人なく詩語の時

天に在りては 願くば比翼の鳥たらん
地に在りては 願くば連理の枝たらん

この詞はこの長詩のクライマックスである。貴妃楊玉環は荔枝が大好物だった。しかし

この果実は四川・広東しかない。玄宗はこれを産地から宮廷へ運ぶため、早馬による駅伝輸送を命じた。杜甫は「京より奉先県に赴く」の長詩に、玄宗と貴妃とそのとり巻きの連中が、華清池で過したぜいたくで退廃的な生活と民百姓の困苦を思い合わせ「酒門酒肉臭くして路に凍死の骨あり」と嘆じている。

楊貴妃の墓は西安城外の馬嵬波にある。前に碑坊がたち「唐楊氏貴妃之墓」とあるが、墓はすっぽりと練瓦のよのいに包まれているがこれはなぜか。こうしなければ付近の女たちが競つて墓の土をとり肌塗に塗るからだ。

「安祿山の乱」によつて貴妃を失つた玄宗は息子肅宗に政權を渡し隠退した。かくして唐は、幾つかの大乱を招き天祐四年(九〇八)高祖以来二十世、二百九十年の唐朝は滅ぶのである。かくて長安の王城の灯も消えた。花の大唐の春を謳歌した詩人たちの中の巨星は李白・杜甫・韓愈・白居易だが、「新唐書文芸伝」は十五人のそろつたる詩人の名を連ねている。

数知れないほどの西安の觀光ルートの中で必ず日本人が訪れるのは阿部仲麻呂(中国名晁衡)の白く典雅な高い碑である。ここには詩友晁衡を悼んだ李白の友情の詩がある。

晁卿衡を哭す

日本の晁卿帝都を辞し

征帆一片蓬壺をめぐる

明日は帰らず碧海に沈み

白雲愁色蒼梧に満つ

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山

にいでし月かも

首をあげて 東天を望めば

神は馳す 奈良の辺り

三笠山頂の上

想う また皎月の円かなるを

(訳者名不詳)

俵万智さんの西安紀行

袖 浦 紅 子

私の大好きな俵万智さんが「よつ葉のエッセイ」という楽しい随筆集を出しました。早速買って読んでいくと「西安紀行」という短い三章がありました。川柳塔で吟行の旅を催されるときいて、お役にたてばとその紀行文を一寸拝借して彼女の歌も頂くことにしました。

「果物のすっぱい町だった。西安の朝の市場。一週間滞在していた言語学院」彼女はこの宿舎の前で、寄宿舎の油っこい食事に閉口して、朝市でスイカ、トマトを毎日買って食べるのがとても楽しみなのです。活々とした、親切でやさしい中国人の人たち。

「豊かな日本、にもかかわらず、西安の夕暮れの光景に、胸しめつけられるようなつかしさを覚えたのは私だけではないらしい。日本人が、モノとひきかえになくした何かがここにありますね」そう話しかけた私に同行のS夫人の答えは言葉が今も耳に残っている。「なくしたんじゃないの、捨ててきたのよ」(「朝市と夕涼み」篇)

彼女は「西安で昼寝しないか」とS氏に誘われて、昨年の夏、神戸港から鑑真号という

船に乗って上海へまる二日かかって到着。上海から飛行機で西安へ一直線。外国人宿舎の西安言語学院に落ちつき、七日間滞在するのことにしたのです。

「私は大学で少し中国語を勉強していたこともあって、今回の旅では積極的に中国語を使ってみた。朝市での買物や市内バス、ホテルでは結構役に立ち、気をよくしたものである。要は度胸と愛嬌。(中略)かたことの中国語を使いながら、あらためて思ったのは、「言葉とは〈道具〉である」という、まことに基本的なことである。あるいは〈手段〉といってもいい。リングゴを買う、行き先を告げる……そういった目的を達成するための、言葉は最も有効な手段なのだ。(中略)中国語もつてすると、まことに不思議な道具として「言葉」は実感された。そしてその不思議さと対照的に実感されたのは、モノとしてのリングゴの手ざわりの確かさである。必死で歌を作ったりしていると、言葉そのものを目的のように錯覚しがちだが、決してそうではないことをこの原始的な中国語体験は教えてくれたように思う。伝えたいことがあってこそ言葉である」(「言葉」篇)

「中国語訳の『万葉集』や『百人一首』も手に入れた。詩集のコーナーで出会った青年は、『ここに並べてあるのはみな老人の道徳くさいものばかりだ。上海にいっただけで買ってくる』といって詩人の名前をメモして渡してく

れた。そういった記憶の断片が、名所旧跡を巡ったことよりもずっと鮮やかに今の私の心にある。旅というより生活してしまった西安の町(「非日常」ではなく日常してしまった一週間。その私が最も強烈に「旅」を、そして「非日常」を感じたのは、西安を離れる朝であつた。ゴマ油でベタベタの手打ちうどんを作ってくれた朝市の少女。電卓をあげたその日から態度が豹変した宿舎のおばさん。一緒に映画を見た学生。おそらくもう一生会うことはないだろう。そして彼らの日常はこんなかたちでこれからもずっとずっと続いてゆく。西安という町で、ある夏やってきたへんな日本人の女の子のことなどもう思い出さずともなく。そしてここにある彼等の日常と、帰国後営まれるであろう私の日常とのあまりのかわりのなさに、私はなんともいえない気持ちになった。それぞれの日常、その空白を埋める、何物もありやしないのだ。異分子である自分をはつきり自覚した。おそらくそのときはじめて私は「旅人」となったのである」(「さらば西安」篇)

のぼりたての太陽つれて立っている大雁塔
よさよつなら西安 俵万智

川 柳 塔 柳 箋

一冊 二〇〇円
送料 二四〇円

小林由多香句集

『いさり火』を読んで

土橋 螢

いきなり序文の西尾葉先生のことば「フランス料理のフルコースを食べている作者由多香先生の自然の姿をその微笑から貰う。この世に生まれたのは四五〇日ほどはい、ちよつと小柄で精悍な横顔は海軍で飯を食った艶がある。同じ志を立て海の兵として、また俳句から川柳の道をたずねる旅人である。鳥取県川柳界のトップとして私たち川柳塔鹿野みか月川柳会育ての親でもある。還暦記念出版まことに改めてとうございます。仲よしのご夫妻に拍手を送ります。

反省の横顔ビンタ待っている
たくましい海の男よ漁り火よ
さわやかに定年となり誕生日
ともかくも完走をした汗を拭く
生きている証しに噴火してみせる
由多香先生に「笑って待つ」こころを教わった。

(待たすこと待つこと平気ビール呑む 螢)

還暦なんて、と思つていたら、由多香先生の次は、私も、そして愛妻の芳子夫人もやがて六十歳。

十干(甲乙丙丁戊己庚辛壬癸)

十二支(子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥)

の組合わせの一めぐりだけの還暦である。

まだ隠居して跡目に家督を譲り赤頭布をかぶるつもりはない由多香先生ご夫妻ですね。赤い座布団に誰かを座らせる。赤いちゃんちゃんこを着て夕焼けを眺める姿は想像できないおふたりである。もう一めぐり十干十二支を待つ構えがある。由多香先生の普段着にネクタイをしめて、何か獲物を待っている「佯び」のこころを、ご教示願いたいものです。

「今日無事」の時の流れにも笑顔で待っている奥さんが「待たされています。六十年燃えたいのちも一日一日の積み重ねであり、母の日も母が動いてから明けるその思いがやがて正午還暦になる。

志 恋をしてから揺れはじめ

バランスを保つ右肩少し下げ

小石には小石の重みだけの渦

かけがえのないのちが一日燃えて、やがて夕暮れ夕焼けを待つ由多香先生と女が待つ

過去捨てるひとりの旅は雨が いい

悪人になりたくない耳ふさぐ

第19回奈良新聞川柳大会

日時 昭和63年7月31日(日)10時開場
場所 東大寺二月堂参籠所

(二月堂向って左の石段上り茶店の奥)

奈良交通バス奈良坂行「今小路」下車へ

題

読者 歌藤 一麦選

参道 古川 佳子選

うしろ姿 杉野 睦朗選

夫婦 平井 綾女選

吹く 宮口 笛生選

伝説 河合 渡口選

席題 一題 各題2句 締切正午

会費 二、五〇〇円(昼食・発表誌)

〈欠席投句〉五〇〇円(発表誌呈)

7月25日必着 左記へ

奈良市北市中町71 杉野睦朗宛

〈出席申込〉7月21日まで

奈良市三条町 奈良新聞社

文化事業部川柳係

電話〇七四二一・二六一一・三三一一

主催 奈良新聞社

漁り火の点々孤独つものらせる「やがて落日」
孤独を楽しむ「佗び」のころは男と女の交
歓が激しいほど、ひとりがさびしいそうであ
る。仲がよいふたりだから、ひとりの時は切
ないことと思います。「俳句では味わえない
人生のドラマを五七五の川柳のリズムでいの
ちを刻む」由多香先生の教えに背かないよう
に勉強してうしろからついて行きます。

死ぬまでご指導賜りますようお願いします。

ささやかに暑さをしのぐ水をまく

書留で戻った旅の忘れもの

句集「いさり火」の珠玉編、私なりの読み
方で申し訳なく思いますが、悪しからずご容
赦ください。

生かされている還暦の昼さがり 螢
いのち輝く花が咲くのを見つけた 螢

『いさり火』発刊を祝う

両 川 洋 々

鳥取県川柳作家協会会長の小林由多香さん
の句集が、五月十五日の吉日に発刊されまし
た。氏は茗人、日満に次いで県川協三代目の

会長であり、今年は還暦を迎えられたことも
あって発刊を決断された。三十五年間の川柳
活動と還暦という人生の重味が、この句集を
産み出す土壌になったと言えましよう。

私と由多香さんの出逢いは昭和三十七年頃
で、私は高校在学中であり学生服を着て句会
に出席していた頃だと記憶しています。当時
由多香さんは県警本部の職員だったにもか
わらず、温厚で人当りの良い人だったので、
てっきり商人さんだと勝手に思い込んでい
たのは不覚でした。

その頃から由多香さんは森田茗人門下の第
一人者で、「わしの後是由多香くん」が茗人
先生の口癖だったのも今はなつかしい。茗人
先生の眼に狂いはなく、現在鳥取県下の川柳
界を見事にリードし開花させた手腕はさすが
と舌を巻く。

句集の作品群に目を通すと、この人の温厚
誠実な生きざまが全ページに滲む。革新川柳
とかに心酔されている作家諸兄には、平易、
平凡と映るかもしれないが、難解句は句にあ
らずの信念で作句と取り組んでいる由多香川
柳だから、この句集もきつと小学生からご老
人まで幅広く愛読していただけるものと確信
している。

過去捨ててひとりの旅は雨が いい

欠席の嘘考えながら歯を磨く

二次会をはずれて左遷ひとり飲む

熱さいた愛へあくびが止まらない

人のいい男歯止め杭となる

傷心へ演歌雨あめもつと降れ

約五万句の中から一千句に絞った今回の句
集だが、人間小林由多香を知っていたたく上
で、どうしても外せなかった作品である。

その反面「菩薩の由多香」がキラリと放つ
芯の強さと、観察眼の鋭さで詠み上げた句に
も出会える。

愛冷えた夫婦が札を数え合う

国の補助待つ雨漏りにバケツ置く

英雄と言われる謀反だつてある

弁当を開けば今朝のヒス匂う

保護色に己れの好みなどはない

風当りきびしい椅子に春信す

ハッターも時には武器として温め

大会当日は生憎の雨にもかかわらず一七〇
名の参加で、さして狭くはない会場も溢れる
熱気でムンムンの盛況でした。

近い将来、由多香さんの第二句集、そして
句碑の建立と川柳仲間の夢は無限に広がって
行きます。職から身を退かれたのを機に、身
体の部品点検を終えて休養ののち、来るべき
日に備えていただきたいと祈る。

■句集紹介

藤後実男遺句集

『蝶タイ』

保 西 岳 詩

川柳塔社同人の藤後実男氏が逝ってから、この五月八日で一年が過ぎました。

背が高く、がっちりとした体格で、いつもきりつと背広を着込み蝶ネクタイを締めた、貴公子然とした彼の、どこに病魔がひそんでいたのか、最初に入院したのが昭和四十一年六月、この時は「胸部血管破裂」という病名でした。その後、昭和五十六年十一月に「直腸潰瘍」で、そして昭和五十九年五月に再発で入院と、三度も生命を左右する大手術を受けた彼の人生の後半は、病魔との戦いの連続でした。

そのような彼の心を支えたのが、文芸の世界で、最初は俳句に親しんでいたようですが、昭和三十五年に大阪鉄道管理局の文芸誌「大鉄文芸」の川柳欄に投句したのが正本水客氏の目に止まり、私どもの「川柳あしなみ会」に水客先生から紹介を受け、以後川柳一筋に作句に励んで来られました。

毎月行なわれる川柳あしなみ会の例会会は

勿論のこと、川柳塔誌や、あべの、卯の花等の句会や、各新聞の川柳欄へ熱心に投句をしておられたようでした。

このように川柳を愛し続けた彼が、人生わずか五十八年でこの世を去ったのは、本人もまことに残念であつただろうと思います。彼が愛した川柳を御遺族の方がどのように受け止めておられるかは分りませんが、このまま彼の句を埋もらせてしまふのは、いかにも惜しい気がして、彼の句を一冊の本にまとめて後世に残してあげたら、実男氏の供養にも、また御遺族への形見にもなるのではないと思ひ、遺句集の発刊にふみ切つた次第です。

このように私の独断で、御遺族の了解を得て発刊した句集ですので、発刊費用は最低限におさえるため、私の出来る範囲は全部手作りとしましたため、まことに見苦しい遺句集となりましたが、すこしでも実男氏の鎮魂に役立てばと思つております。

遺句集の中から、私の心に残る句を二、三句ご紹介して発刊の弁といたします。

よく似合う夫婦と云われ少し照れ
父と子でやつぱり似てる影法師
ふと風が止まり幸せつかめそう
蟬の声が手術の後の傷にしむ

第3回国民文化祭ひょうご
88文芸大会川柳部門募集要項

(1) 作品 未発表作品 宿題10句・各題1句
(2) 題と第一次選者

『港』 安藤富久男
『爽やか』 磯野いさむ

『白』 大野 風柳

『民』 斎藤 大雄

『島』 田口 麦彦

『城』 田中 好啓

『本』 時実 新子

『踊る』 西尾 栗

『彫る』 広瀬 反省

『ペン』 渡辺 蓮夫

(3) 応募料 一、〇〇〇円(郵便小為替を作品に同封)但し海外投句は無料

(4) 応募方法 400字詰原稿用紙 1枚に題と作品 1枚に郵便番号

住所氏名・年齢・性別・職業・電話番号と大会当日の出欠を明記

〒650神戸市中央区下山手通4-16

1-3 勸兵庫県文化協会内

(5) 応募先 第3回国民文化祭文芸大会川柳部門事務所

昭和63年7月31日(日)当日消印有効但し海外投句は7月31日必着

文部大臣奨励賞ほか

(6) 締切

(7) 賞

どちらともなしに選んだ孫の服
梵鐘がやがて心の奥で鳴る

遺句集は発刊費用捻出のため一冊千円でお
頒けいたしておりますので、ご希望の方は左
記までお申し込み下さい。

〒672 姫路市飾磨区矢倉町一丁目五四

保西岳詩

TEL 〇七九二一三九一〇八四四
郵便振替 神戸二一六七二六 保西岳詩

越村枯梢句集

『川柳 二河白道』

句集の題に二河白道という仏語を借りた。
人は生れてから死ぬまで一刻一刻を生と死の
狭間にあつてこれを見つめてゆかねばならな
い。その見詰めてゆく焦点は二河であり白道
である。(広辞苑)によると「観経疏散善義」
貪瞋二河の比喻、おそろしい火の河、水の河
にはさまれて幅のせまい一条の白道がある。
火の河は衆生の瞋恚(しんい)水の河は衆生の
貪愛(たんあい)白道は浄土往生を願う清浄の
信心で、いかに火、水におびやかされても、
白道を進めば西方浄土にいたり得ることを説

いている。著者は生死の問題を深く考え、こ
れを正直に吐露することによって楽しみはよ
り楽しく、哀しみはより深くなって人の心を
打つのでなろうか、私はこれが私の川柳観
であると思つている、と誌されている。

この小誌を出す氣になったのは、うちの親
父が或いは祖父が晩年どんなことをして閑を
潰していたかという私の生きざま死にざまを
子孫に知ってもらいたいだけの動機であり、
世の批判を乞うものでなく、いうなれば私の
遺書の一部としたいだけのものである、と。
二十歳迄の命と医者に宣告されたのが、ど
う間違つたのか生きのびているという著者の
枯梢川柳の切実な叫びが、各頁にあふれてい
る。B6判 一二頁 非売品 (M)

二河白道越えるためなら助走する
千手観音わたしの縋る手が足りぬ
石ひとつ置いとけばよい俺の墓
余生何年おつりのように数えてみ
石塊と話す仏と話すそして冬
咲いて散つて咲いて輪廻の輪の中に
終章を飾るに野辺の花がよい

◇ 名古屋市北区水草町二ノ六水草団地9-404

越村枯梢

選考方法 第一次歌者により各題秀句10区

・佳句50句を選出第二次選は第一次選者
選出の秀句各10句計100句から賞を決める
第二次選者 去来川巨城 奥田白虎 橘高
薫風 小松原爽介 寺尾俊平
森中恵美子

※入選句および応募作品より一人一句を
選んで発表誌に掲載、主応募者に配布

発表大会

日時 昭和63年10月23日(日) 10時開場
会場 神戸国際会議場(メインホール)
神戸市中央区港島中町6-9-1

大会内容 入賞作品の講評と授賞式ほか

記念講演 園田学園女子大学助教授
坪内 稔典氏

当日句会 (各題2句・締切12時)

灯 卜部 晴美選
皿 久保田寿界選
草 遠山 可住選
街 平山 繁夫選
笛 藤本静港子選
文 山本 哲郎選

主催

文化庁・兵庫県・兵庫県教育委員会
兵庫県文化協会・国民文化祭兵庫県
実行委員会・神戸市・神戸市教育委
員会・日本川柳協会・兵庫県川柳協
会・神戸川柳協会

初歩教室

題 — 砂

阿 萬 萬 的

課題「砂」とくれば先ず一握の砂から
 掌に遊ばす砂が逃げて行く
 一握の砂にも砂の詩があり
 私なら下五、砂の意地を見た」としますが
 一握の砂に吐息を洩らす恋
 一握の砂から崩れた日の惨事
 一握の砂から崩れた過去の夢
 一握の砂の悲しみさらさらと
 手の砂をさらさら洩らす日の反省
 (掌から砂さらさらと過去を消す)
 次は砂丘の砂にも詩がありますね
 いじわるな心を砂丘に埋めて来る
 砂丘まで行って終りにするつもり
 (砂丘に心埋めて終りにするつもり)
 さようならあとで砂浜夕陽浴び
 (あきらめましょう砂丘に赤い日が沈む)
 宿抜けて夜の砂丘へ運ぶ下駄
 (夜の砂丘へ女ひとりの宿の下駄)
 神代の唄を歌っている大砂丘

つえ子
みね
富恵
由梨
小 鹿
すみれ
久留美
正 子
若 水
とく子
喜与志

(神代からの唄を歌っている砂丘)
 風紋の見事自然は偉大なり
 行く度に砂丘の顔が変わる
 生きている砂丘は風に眺める
 (大自然砂丘にオブジェの線を描く)
 曲線美砂丘の風は裸婦が好き
 (裸婦の寝た姿砂丘のまいる影)
 砂にも心があり、まして石庭の箒目には
 岩と砂箒目がつき庭栄える
 石庭の白砂を敷き童安寺
 (禪の心を教える童安寺の白砂)
 珊瑚の残骸と言えはそれまでですが星の砂
 にもロマンが秘められていまして……
 孫へ土産夢がふくらむ星の砂
 片思い両手で掬う星の砂
 南国のロマンを語る星の砂
 (星の砂かなしい唄の残る里)
 鳴き砂にもまた違ったロマンが生れて……
 鳴き砂を踏めば千鳥が語りかけ
 砂浜で亡姉とつたつた浜千鳥
 (鳴き砂のリズムで歌う浜のうた)
 軽快な足どり鳴き砂まではずむ
 キュッキュと砂が泣いてる私小説
 鳴き砂の涙きさらさら月に濡れ
 (鳴き砂の浜辺に女月に濡れ)
 ともあれ砂浜はだんだん影が薄くなって
 経済大国即白砂小国
 (経済成長白砂みじめに消えて行く)
 私達だけでなく貝にも砂に郷愁があつて

静 子
正 之
富 恵
金 吾
しんじ
八重子
静 子
小 鹿
温 子
繁 男
秀 香
保 夫
和 子
遊 光
晏

砂を吐く浅蜷ゴトゴト音を立て
 店先で蜷居る砂抱いて
 (店先でも蜷居る砂を抱き)
 砂の中貝の淋しい私語を聞く
 (貝になりたい私は砂に潜りたい)
 また都会の片隅の小公園にも……
 砂遊びママもお喋り忙しい
 砂トンネル母子の指が結ばれる
 (砂トンネル指が届いた顔になる)
 夕暮れの砂場にシヨベル忘れられ
 夕時雨砂場に残る洋人形
 (時雨ひととき砂場に残されてた人形)
 鍵つ子に砂場に淋しい日が沈む
 公園の砂場に残るポリバケツ
 (日も暮れた砂場に残るポリバケツ)
 砂と言えは春を告げる黄砂もその一つ。
 偏西風黄砂も運ぶ春の使者
 (日中親善黄砂も運ぶ春の使者)
 フリーパスで悠々黄砂やって来る
 台風の前で走る黒い雲
 志重さんが本社の手違いで走るとして出句
 されたものです、こんな風に変えて。
 (春一番黄砂にけふる山の線)
 高校野球とくれば甲子園の砂。
 球児の土産汗と涙の砂袋
 砂煙あびて走者が星に出る
 (盗塁成功砂塵の中に立つ走者)
 草野球砂まき雨後のプレーボール
 (砂を撒き雨後再開の草野球)

露 芳
照 子
美 子
美 子
純 子
義 晏
光 子
三 倉
三 津 江
サワ子
志 重
正 之
み ね
方 子

西部劇の砂塵も思い出の一つですね。

駅馬車の砂塵修羅場に胸を打つ 明 吉

(砂塵濛々駅馬車が行き幕終る)

苦い思い出には戦争があり……

砂袋かなしい戦さの物語

戦争の面影残す砂袋

そう言えば油脂焼夷弾には砂袋をぶっつけ

るのでしたかねえ。

思い出と言えは砂に書いた文字や名前にも

好きな人の名前書いた砂の上

砂浜の落書を消す春の波

砂文字もやがて消えよう寄す汐に

(砂文字やがては消える性を持ち)

満ち潮が砂の足跡消してゆく

砂文字を書いた時代が懐かしい

(砂に文字書いたむかしの浜のうた)

そして夏の浜辺では……

砂浜をお掃除して待つ海開き

砂浜に寄せては返る人の波

砂浜に甘いムードのサングラス

夏の恋育ててくれた熱い砂

(熱い砂恋は育って消えるもの)

シルクロード博では……

シルク博砂漠の砂を瓶で売る

砂漠にてシルクロードここに再見

(シルクロードの熱砂を踏ますパビリオン)

砂風呂の砂から首だけを出して……

砂風呂でリュウマチ治す目的地

(砂風呂で同病旁わりつつ話し)

砂風呂を浴びて解脱の途をつけ

肩書きを外して砂風呂おつき合い

(砂風呂で浮世離れたおつき合い)

本当の砂ではないが、砂を噛む思いは誰に

でもあるものでして……

砂噛んだその時点から信じない

(砂噛んだ思いを忘れて又信じ)

後足で砂のお方も老いていた

倦怠期砂噛まされるあざり汁

言い過ぎの舌に残った砂の味

砂の塔、砂の館は儚ないものでして……

主義主張持つてはならぬ砂の塔

まだ若い砂の館は何度でも

砂山のトンネル今も掘り続け

気を抜けば崩れていきそう砂の家

砂の塔あなただけの気持崩れ出す

(砂の塔かもねえ淡い恋だもの)

生きものばんざいではないが、それぞれ……

護身術蝶器用に砂をかけ

蟹の目の二つ二つの砂の浜

幸せな蟻がせつせと運ぶ砂

古樹の根へ蟻二筋も砂運ぶ

(古樹の根へ蟻二筋の砂のみち)

砂浜で生まれし亀の子急ぐ海

ではここらでいつもの様にもうもの砂を

小雀の庭砂浴びて春静か

(春日遅々 雀が砂浴びています)

夢を秘め砂金掘って気の長い

(ゴールドラッシュの夢枕欠けで砂掘い)

太一郎

保夫

若水

円女

治

サワ子

緑良

章久

都姫子

三千子

松枝

美恵子

章久

とく子

明吉

和多留

遊峰

美恵子

遊峰

遊峰

遊峰

遊峰

遊峰

遊峰

遊峰

遊峰

遊峰

遊峰

遊峰

貝になったか実家に帰り砂を吐く

(貝になり息子帰って砂を吐く)

砂浜に潮騒琵琶や須磨の浦

(須磨の浦砂に一弦琴のうた)

白砂青松佇む人の面影よ

(白砂青松朗々と詩を吟ずる)

砂山に登り切れない蟻一匹

(蟻地獄の蟻に自分の影を見た)

砂埃浴びて微笑む石仏

中七の微笑、本当は苦笑ではないかしら。

砂を蹴る雀を叱るスイトビー

(砂浴びる雀と喋るスイトビー)

頑固にも祖母愛用のみがき砂

砂時計計気にせず妻の電話口

待ちわびて来ないと知った砂時計

浜木綿の群を見つけた砂小径

切嗟琢磨砂は互いに磨きあい

ガリバーになって保父さん砂遊び

硅肺が胸にしみこむ鋳物砂

砂に水沁み入るような愛を待ち

砂時計紅茶を入れて一休み

砂時計計無心に見入る雨の午後

安らぎは霊場巡りのお砂踏み

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

義

遊峰

松枝

成明

サワ子

百合子

温子

喜代子

昭治

結美

和子

勝美

金吾

登代

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

勝美

鞆

松本 ただし 選

セールの鞆お世辞も少しつめ
生きたため七ツ道具のある鞆
まっすぐに育ってほしいランドセル
鞆あけると母の小言がつめてある
一泊と雖も女の旅鞆
互角とは思えぬ課長のいい鞆
ライバルの鞆の中にある聖書
手品師のカバンは涙の物語
アイラブユーすべてあずけた鞆です
ランドセルそろそろ汚れ出す五月
ボシユットに知らない鍵が迷いこむ
セールスマン先に鞆が戸をくぐり
大学へマンガを詰めていく鞆
靴などダサイと大きな紙袋
札幌の味は知らずにいる鞆
団体の一人は鞆見張る役
小さめの鞆に替えた二度の職
分別を詰めた男の古鞆
気がつけばオシメ鞆になっている
学校にまだまだ慣れてない鞆
母親の見栄も背負うたランドセル
流行は気にせぬ好きな鞆持つ

知恵子 規不風 雀踊子 辰江 秀峰 玉恵 恵美 やすお 新一郎 公一 倫子 可住 正敏 重人 敦子 ちかし 宵明 達子

票になる顔を見極める鞆持ち
ご主人の評価は鞆に聞かぬ良い
靴からナイフ飛び出すかもしれぬ
定年で鞆のいらぬ職につき
新人類大きな鞆マンガ本
すり切れた鞆で往診のベダル踏む
きまじめな鞆で知らぬ縄のれん
おふくろの鞆は何もかも入れる
靴持ち杯洗かわりもさせられる
五時からの男で鞆持たぬ主義
宿敵へ極秘文書を売る鞆
出張の鞆にひそむ穴場地図
單身赴任鞆の中にしかと妻
塾鞆もう競争の渦の中

悟郎 たけ志 富恵 新造 八重子 静子 サワ子 ふみ 夢酔 克子 本蔭椿 白峰 三枝子 奈美子

腹話術の坊やがせりふ言う鞆
旅靴あなただの癖を知りつくす
言い訳の種を鞆で持ってゆき
靴持ち豊太閣の夢を抱き
マジシャンの焦りは鳩が出ぬ鞆

よし津 元江 博友 満津子 京子

一年生これから重いランドセル
人情を入れる鞆は別に持つ
現実を詰めると重くなる鞆
雑学のルーツも入れた古鞆

雄々 大柏

祭

江原 とみお 選

夏祭りあの娘も脱皮したそう
兄嫁へ遠慮はしない村祭り
お祭りマンボ不死鳥がいま甦える
楽しみは模擬店だけの文化祭
本業は葵祭りへ済んでから
祭りから祭りへ渡るたこやき屋
こんちきちん京は浴衣の町となり
初恋の美代ちゃんも居た祭笛
七階で祭太鼓に遠く住む
夏祭り昔が残る店に佇ち
おまつり日だけ肉食べた日の記憶
想い出のひとつこまにある雪祭
青い目のハッピーが似合う青柏祭
帰省する祭りの好きな息子たち
ふる里を捨てても祭り忘れない
山笠に親子三代ついて行く
粗大ゴミ祭り囃子の主役する
秋祭り斜に見ている道祖神
文字よりも句を見てほしい文化祭
村祭り住所不定も来て踊り
赤信号がこわいと思わない祭り
お祭りの裏に進行形の恋

三枝子 しげお 白光子 八重子 やすお 古都路 米朝 高夫 ちず子 玉恵 典子 秀峰 よし津 洋敏 タミ 黙光 三島 大柏 緑良 多織

リンゴ飴買いに祭りにへ行ってくる
おみくじが吉の祭りでスリに合い
お祭りが好きでお嫁にまだ行かぬ
お祭りが好きで太鼓で目が覚める
お祭りが好きに歳時記あすけとく
お祭りで釣ったヒヨコがよく育ち
花祭り花咲じいも呼んである
祭りしか神を拝んだことがない
市政いま祭り行事に明けける
午後の四時やはり祭へ行く準備
味気ない風景ビルの子供獅子
手紙一通祭りだ帰れと言ってくる
祭灯に小島の秋が深くなる
祭りにには駅員がくる無人駅
緑日へつないだ父の手が温い

正子
柳五郎
三倉
素身郎
たつみ
倫子
はるお
白溪子
弘朗
四郎
桔梢
章久
公一
明水
純子

ヒヨットコとオカメが恋をした祭り
前夜祭どこか合わない三拍子
ひよつとこの面を祭りで一つ買う
夏祭り帰らなかつた子が一人
一年に一度祭りの笛を吹く

雀踊子
旭恒
新造
正坊
螢

子の握る手が強くなる祭笛
ちかし

裸祭り男が男とり戻し
佳雲

法被の子胸に眠っているまつり
太郎

荒神の祭り太鼓をうつおんな

写真

時末一灯選

母の日の母の写真に詫びること
金賞はやっぱり違うカメラアイ
あれからの苦勞を遺影と話したい
ひとに見せぬセピアの写真お針箱
アルバムに青春がない戦中派
写っている中の一人が好きらしい
宮参り写真ざらいい今日別
原爆の写真素通りしてならぬ
あの写真が絆となった夫婦びな
プロマイド集め青春だった日々
フルムーン夫婦で写す宿浴衣
「ハイポーズ」鹿は無断で絵に入り
一枝の写真が夜を眠らせぬ
旅写真札の電話に花が咲き
特選の報道写真事故ばかり
父に似た孫の写真は何枚も
有名税と思つて耐えている激写
知らぬまに撮られる写真は生きている
子が親に親が子に似ていい写真
飲んでる写真ばかりで退職し
青写真ネがいっぱいに夢を詰め
色褪せた写真に残る戦友数え

晏
正坊
雀踊子
よし津
寿美
さと美
典子
玉恵
輝子
かなめ
恭江
元江
良江
やすお
螢
公一
亭
美代子
可住
たつみ
幸夫

タイムスリップしたい写真が語りかけ
どの写真見てもなつかし亡夫が居る
捨ててには忍びぬ写真もてあまし
写真で見る限りは可もなく不可もなく
親子二代ももう諦めた青写真
写真だけ見て嫁入った戦時妻
手直しが続く我が家の青写真
酸欠の部屋で描いてる青写真
紅顔の七つボタンのまま遺影
カメラ手に花を求めて呆け知らず
思つことあつてピンボケ捨てられず
陰膳の写真愚痴言う事ばかり
影薄い写真の人が逝つたとか
アルバムのお厚さ過去が重すぎる
またご縁あればと写真返される

喜久夫
雄々
木魚
四郎
ただし

今ほ亡き妻の写真の片えくぼ
古傷の疼く写真へ訣れ歌
胸上げの写真二浪の顔でない
青春の謎アルバムの剥いだ跡
飛石の様な足跡写真帳

喜久夫
雄々
木魚
四郎
ただし

そう言え写真もないね倦怠期
記念写真いつもの顔が前に出る
胃カメラは白
青空へ深呼吸
瓢箪から駒スナツプが縁結び

克子
忠三
寿美子

正敏
綾珠
どんたく
素身郎
多織
サワ子
明水
白峰
優
喜与志
テル
京子
太郎
千秀
清芳

柳界展望

集録一敏・武庫坊

が受賞

★緑第三回誌上ハイライト

作品募集

課題 「波」「雑詠」

各題5句計10句提出

用紙はB5判に連記

選者 森中恵美子、関水華

田中好啓、福光一郎、渡辺

和尾

参加料一口(10句) 千円

何口でも応募可合点一口毎

出句締切8月31日(消印迄)

発表・緑12月号

出句先 70-21愛知県知多郡

東浦町森岡字下今池5の69

Tel 0562・83・6822

川柳 みどり会

▽新刊△

時実新子著

新子の川柳行路

「花の結び目」

文庫判二六〇頁・四百円

発行所 朝日新聞社

▽同人・誌友消息△

★東野大八氏(美濃加茂市

相談役)は、柳宴六月号に

「汚れた雪(二・二六事件

の真相」と題し執筆。

★「ますかつ」と誌六月号

句碑を見学した。

の「川柳女心と男心」(2)欄に。

土居 耕花

鈍感な妻でよかったなと思

う

柳原 静香

もう六十まだ六十と紅をひ

く

高杉 鬼遊

老兵として反戦の旗を振り

本 田 恵二朗

瀬戸大橋妻と一緒に渡ろう

ぜ

★高杉鬼遊氏(八尾市・常

任理事)は、五月三十一日

奈良文化会館で開催中の

「第七回鬼展」見学。所望さ

れて次の川柳をプレゼント。

田を売った分家をにらむ鬼

瓦 鬼 遊

★塩満敏氏(羽曳野市・常

任理事)は、五月五日岡山

県久米南町・川柳公園で開

かれた句碑除幕式に(はび

きの市民川柳会で五人六基

建立) 吉川寿美、高田美代

子、楠昭子、大槻一屯の各

氏と出席。路郎・生々庵の

句碑を見学した。

第6回 夜市川柳大会

とき 昭和63年7月31日(日) 10時開場

ところ 堺総合福祉会館4階大広間

兼題 「風船」 鳥取 新家 完司選

「笛」 堺 海堀 酔月選

「房」 堺 中島 夢成選

「帆」 羽曳野 吉川 寿美選

「仏」 和歌山 神平 狂虎選

「噴水」 堺 河内 天笑選

「舞台」 和歌山 後藤 正子選

席題 三題(選者 西口いわる・八木千代

河瀬芳子)

各題2句・締切正午・欠席投句拝辞

会費 四千元(昼食・懇親宴・作品集共)

◇同じ会場で午後3時半より参加者全員で

懇親宴を開きます。多数のご出席を心よ

りお待ち申し上げます。

なお準備の都合上、7月20日までに左記

へ参加のご連絡をお願い致します。

〒593 堺市堀上緑町2-9-2

電話 0722(78)4706

河内 天笑

主催 堺 川 柳 会

主 催 堺 川 柳 会

主 催 堺 川 柳 会

主 催 堺 川 柳 会

★波多野五葉庵氏（青森県
参事）は、川柳宮城野社の
第四回誌上川柳大会の選者
を担当。

★奥山美智子氏（尼崎市・
同人）は、ふあうすと誌五
月号に「郁榮先生を悼む」
と題し執筆。

★山本規不風氏（京都市・
本社理事）は、東洋易学京
都支部総会で支部長に四期
連統（一期三年）再選。

「東洋易学学会報」に「家
相」と題して執筆など、易
学士山本殷煌氏は、東洋易
学会の重鎮として活躍中。
「川柳京かゞみ」に連載の
「家相論」も好評。
★開腹手術後、経過良好の
宮口笛生氏（奈良市・常任

理事）は、六月一日の常任
理事会に三カ月ぶりに出席。
「2キロ太りました。色も
ちよっと白くなりました」
と元氣そのもの。

★NHK学園川柳講座の昭
和62年度川柳作品コンクー
ル（入門コース）で、堀端三
男氏（和歌山市・同人）の次
の句が特選四位に選ばれた。
善人という催眠に弱くなる

▽お便り△
■本田恵二朗氏（倉敷市）
五月九日、邑久長島橋の開
通式挙行。七草川柳会の柳
友達の喜びの笑顔が見える
ようです。地続きとなった
ので岡山での句会には大挙
来襲、句を競い合えること
でしょう。嬉しく迎えます。

新同人紹介

永田

俊子

紫香・芳仙推薦

悲願達成 笑顔の渦が
巻き上り

■上田翠光氏（奈良県）

句碑の前のスランも句碑
の足許全面を覆っておりま
す。一九九〇年が建立40周
年です。近頃は又、無農薬
野菜に頭を突込んでいます。
■森川技智氏（広島市・誌
友）

路郎忠へ酒かビールか
ウイスキー

路郎先生と霞乃先生の句会
に私たち兄妹（森川まさお、
栗谷春子、結城君子）が同
席させていただきました。ご指導
をうけました。また中島生
々庵先生が鰻谷で中島医院
をしておられた時、私の父
が当時医療器械の商売をし
ており、お得意先だったこ
とを記憶しております。

▽おことわり△

★本誌4月号39P上段の
「相槌を打って共犯者にさ
れる」と、6月号6P下段
の「ほんとうに本当ですか
お月様」の二句を抹消しま
す。

第3回川柳塔勉強会

大井川SL鉄道と寸又峡温泉

今年の勉強会を左記の通り催します。SL
鉄道に乗って茶畑と峡谷そして温泉を楽しみ
ませんか。ご家族連れも歓迎。奮ってご参加を。
とき 8月21日（日）・22日（月） 1泊2日

行程

・8月21日（日）新大阪8時24分発（新幹線）
浜松（東海道線）金谷（SL列車）千
頭（三三森林鉄道）奥泉（バス）寸又
峡温泉着14時30分頃
寸又峡では溪谷美の夢ノ掛橋その他を散策
入湯後勉強会と懇親宴を開く

（泊）寸又峡温泉

・8月22日（月）朝、寸又峡出発（バス）奥泉
（三三森林鉄道）井川（バス）新静岡
静岡では登呂遺跡、日本平、三保松原等を
観光の上、静岡より（新幹線）で20時帰阪

兼題 「茶」「鉄道」「当日雑感」各3句

費用 約4万円（交通、ホテル、懇親宴、
昼食代共）

申込・7月末日迄（定員40名でメ切り）
申込先 下関尼崎市武庫町一四七一五
黒川 紫香

TEL 06-4332-5505

主催 川柳塔社

中国 洛陽・西安 吟行の旅

今回は、長安の栄華を誇った西安、随・唐など9王朝の都だった洛陽を訪れます。秦の始皇帝陵、華清池、龍門石窟等、見所は尽きません。

9月18日(日)―9月23日(金) 6日間

お1人(全食付・添乗員同行) 237,000円

(申込金 10,000円)

※他に海外渡費用・中国入国査証代、傷害保険費用が必要です。

■定員 25名(先着順)

■申込締切 7月31日

	月・日・曜	発着地・スケジュール	食事・宿泊地		
①	9月18日(日)	午前：大阪発（上海経由） 午後：北京空港着 フリータイム 夜 列車		機	夕
			列	車	泊
②	9月19日(月)	午前：洛陽着 午後：洛陽市内観光 （龍門石窟、白馬寺など）	朝	昼	夕
			洛	陽	泊
③	9月20日(火)	洛陽 ++++++ 西安 列車の旅をお楽しみ下さい。	朝	昼	夕
			西	安	泊
④	9月21日(水)	終日：西安市内観光 （兵馬俑坑・華清池など）	朝	昼	夕
			西	安	泊
⑤	9月22日(木)	午前：陝西省博物館（碑林） 午後：西安発 上海着	朝	昼	夕
			上	海	泊
⑥	9月23日(金)	午前：フリータイム 午後：上海発 夕刻：大阪着	朝	昼	

※機…機内食

〈申込先〉 ●川柳塔社…大阪市阿倍野区三好町2-10-16

ウエムラ第2ビル202号室

TEL (06)629-6914

〈取扱旅行社〉 東急観光

主催 川柳塔社

本社 六月句会

六月七日(火) 午後六時

メンズファッションセンター

本社句会の出席者も、月により若干の増減はあるものの、大体八十名前後と固定してきたようだ。人数は同じでも、顔ぶれという点では、正確に調べたわけではないけれど、一年前と比べたなら、かなり変わっているのがあるまいか。新しい人がふえるのは喜ばしい。願わくば三日坊主に終らぬよう、続けていたきたいと思う。

橘高薫風氏のおはなしは、関西と関東の句の仕立て方の違いについて。

題詠の場合、題の文字を忠実に入れるのが関西の昔からの傾向だが、関東では、文字を入れずに題の雰囲気を出す作句の方法が非常に多い、と具体的な例をひいて説明、東西柳界の交流が活発になりつつある今日、お互いの長所を積極的に採り入れる精神が必要ではないか、と結ばれた。

今月の初出席は、児玉歌子(尼崎)・鷺見章(八尾)・もちづき遊美(摂津)・鈴木柳

太郎(大阪)の皆さん。

今月の月間賞は小出智子さんが獲得。

(S)

(進行・天笑)

(受付・いわゑ・みつ子)

(記録・射月芳・月子)

出席者―笛生・小路・水客・恭昌・すすむ

武庫坊・年代・重人・歌子・杜的・白溪子・

寿美子・眉水・芳子・太茂津・章・佳秋・千

代三・千秀・みね・靖子・鬼遊・勝美・しげ

お・薫風・みつお・いわゑ・遊美・凡九郎・

柳宏子・頂留子・柳影・千寿子・正坊・英王

子・作二郎・勝晴・紫香・美智子・憲太郎・

金太・章久・規不風・悦郎・洋敏・文秋・外

吉・あいき・岳人・敏・柳太郎・英子・泰子

美緒・三男・白峰・満津子・典子・冬葉・吸

江・昭子・美代子・度・楓葉・東雲・庸佑・

天笑・月子・史好・元紀・はつ絵・射月芳・

柳伸・藤子・雀踊子・吐来・萬的・重成・栗

智子・寿子・美房・寿美

席題「くじ」

西口いわゑ 選

貧乏くじ引いたとラーメン食べている 水客
おみくじを二人で引いた深い仲 洋敏
宝くじ当り運命狂いだし 文秋
貧乏くじを母は笑顔でひいている 英子
貧乏くじお互いさまで添っている 千秀
わが半生あみだくじにも似て可笑し 正坊

くじ運にも男運にも縁がない
ちっぽけな幸せ当りくじと思う
良いくじを引いたと思うフルムーン
くじ運の強い男に寄りかかる
さくらめーる何時しかくじの日を忘れ
くじ運は強いが尻に敷かれてる
夫婦してひいたらおみくじ吉と凶
くじ運に弱くコツコツ貯めている
曲り角ばかりこの世のあみだくじ
くじ運の悪い男の綱渡り
年金が夢買っている宝くじ
おみくじに慰められる落ち目の日
くじ引にしたらとやる気なくしてる
つり銭で買って当った宝くじ
水中花くじで当って愛芽生え
くじ迷う自動ドアに決められる
くじ運が強い男が事故に遭い
おみくじを枝に結んでケ・セラ・セラ
当たら誰にも言わぬジャンボくじ
縄のれんくじに外れた首揃う
しょうもない午後を楽しむあみだくじ
くじ運は悪いがつながない夫婦
くじを引く思いで今日の心電図
当りませぬようにと折るくじもある
結婚してからくじに弱くなり
くじ運が悪いが妻は当りくじ
人生の落ち目に出会う当りくじ
くじ運の強い男で美人妻
大吉を引き当て少し怖くなる

寿美 恭昌 鬼遊 歌子 杜的 美智子 泰子 寿子 正坊 射月芳 水客 吸江 太茂津 敏 寿美子 千代三 英子 典子 萬的 小路 満津子 美代子 昭子 みね 眉水 美智子

くじ運に弱いが女によつてもてる
煮て食おうと焼いて食おうと当りくじ
外れくじ引いて世話役まかせられ
人間つておもしろまんなくくじ思つ
くじ運も強い弱いがあることも
外れくじとしての扱い受けている
性こりもなく宝くじ買う女

席題「蜂」

岩内外吉選

すずめ蜂がいるからカブト虫とれず
蜂蜜を上手に使う嫁である
多情仏心蜂の唸りを真似ている
蜂の子をこっそり守る鬼瓦
蜂だつてマンションくらい持つてい
そばを打つ窓から蜂が出て行つた
一匹の蜂が二人を近づける
好かん奴の車へ蜂を二三匹
造花だと働き蜂は知つてい
蜂の巣は空っぽ未練などはない
蜜蜂の目に人間はするすぎる
蜂の巣を残して村は早寝する
本当は独りで居たい女王蜂
友達がひとりもない女王蜂
女王蜂あなた自由な空がない
均等法などと言わない女王蜂
糖尿が貫禄という女王蜂
働き蜂の最後を君はみましたか
気まぐれの蜂を待つてる姫リング
みつ蜂にうまい話を盗まれる

武庫坊 勝 晴 洋 敏 凡九郎 紫 香 水 客 いわゑ
笛 生 眉 水 しげお 敏 作二郎 みつ子 天 笑 雀踊子 年 代 正 坊 作二郎 芳 子 射月芳 太茂津 鬼 遊 度 芳 子 敏 月 子

ペレストロイカに働き蜂はなじめない
養蜂の花の美しさに触れず
父も子も働き蜂として生れ
刺して逃げる愚かな蜂を責められぬ
ゴール前蜂一匹に邪魔される
やがて女も働き蜂になりたまう
蜂の針揺れているのはイヤリング
花博の噂を蜂が聞いてくる
恋の梓外で働き蜂瘦せる
働き蜂にビールぐらいは冷えている
ひと刺しを狙う蜂にも覚悟の日
雄蜂よすこし自分を取り戻せ
花遍路蜂もやさしい旅をする
蜂にさされて以来男性アレルギー
毒草の花にも通う蜂がいる
蜂が刺したぐらいの過去にこだわつて
蜂の来るまでは枯れてはならぬ花
その朝にみつ蜂の針抜く男

兼題「モデル」

藤田泰子選

元 紀 柳太郎 射月芳 寿 子 柳宏子 美智子 章 洋 敏 小路 智 子 美代子 太茂津 作二郎 藤 子 千 秀 智 子 楓 楽 外 吉 千 秀 歌 子 智 子 太茂津 凡九郎 金 太 典 子 杜 的 靖 子

サザエさんのモデルだったら地でゆける
モデルでは真似の出来ない母の笑み
モデルよりお腹一杯食べている
亭主関白のモデルと思う自嘲する
アンタをモデルそうだなと言ふときり
短足のモデルは私でもできる
父さんがモデルで僕も悲家
孝行のモデルのように金次郎
一豊の妻がモデルのような母

近畿文字放送作品募集

題「夢」

橋高薫風選

3句

締切

7月15日

ハガキに明記の上、左記へご投下下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

勝 晴 小路 眉 水 柳宏子 はつ絵 月 子 緑 良 英壬子 外 吉 しげお 鬼 遊 小 路 典 子 鬼 遊 あいき 荒 介

わたしの服は私をモデルにして選ぶ
嫁はんのモデルチェンジはききますか
モデルルームロンの暗い部屋はない

あの日から針路が狂う父の船
淀駅の帰り半分ほど狂う
飲みめ酒飲んで一べん狂たろか

正坊
外吉

兼題「相談」

河井庸佑選

長生きをしてみせたと愛煙家
長生きのモデル禁煙など言わぬ
少し太めのモデルに着せてから売れる

あの人から針路が狂う父の船
淀駅の帰り半分ほど狂う
飲みめ酒飲んで一べん狂たろか

正坊
外吉

相談に帰れば故郷の空が澄み
身の上相談もする村の医者
子が育ち相談のれぬ親の位置

重人
白峰

六月のモデル硝子の靴を履く
モデルもう戻れぬ橋を渡りきる
モデルハウス出て白昼夢から醒める

月の青い夜から狐憑狂い
よくはすむボールで時計よく進む
人形を抱いて狂女の守り唄

史好
重人

親馬鹿になって相談きいてやる
あじさいの雨に相談しています
相談に気安く乗って火傷する

重人
雀踊子

帽子屋のモデルが白い夏にする
入賞の作美しき尉と姥
一政のバラ人生はゆたかなり

狂い咲き人は勝手なことを言う
笹舟を流して狂うのは女
狂ってもこの世でおわるこの世のこと

鬼遊
作一郎

噴水を背にして相談ごとになり
一筋縄でいかぬ相談かけられる
会長の椅子と相談してる髭

智子
みね

良妻のモデルに造反したき夜
モデルチェンジしよう取り残されそうだ
政治家をモデルに動物園を描く

水俣の猫が狂うてはつとかれ
狂わずにいるのが一人イカサマ師
狂うふりすれば相手がよく分る

藤子
みね

相談に乗ります甘い甘い声
相談という建て前の泣き落とし
相談とくく目て来た肩叩き

紫香
みね

自画像のモデルは猫と決めている
兼題「狂う」
江口

道化師の妻が狂えば美しい
狂い咲く花にも狂うわけがあり
羅針盤時々狂う夫婦船

鬼遊
作一郎

相談をきくがまぐちは固くしめ
あじさいも身の上相談聞いている
相談を持かけてみる温い膝

典子
歌子

養護学校狂っているとは思ってす
鬼の目に娑婆で狂うたのがばれる
狂い咲きするのに紅をさす鏡

六月の時計は狂うことばかり
生真面目な父の時計で狂えない
ピストルの音でゴッホの絵は狂う

吐来
清芳

相談に乗ります甘い甘い声
相談という建て前の泣き落とし
相談とくく目て来た肩叩き

恭昌
佳秋

平凡な男で狂う事もなく
程々に狂わす時計表が持つ
何か狂ってますが都会に住み馴れる

五月の時計は狂うことばかり
生真面目な父の時計で狂えない
ピストルの音でゴッホの絵は狂う

吐来
清芳

相談に乗ります甘い甘い声
相談という建て前の泣き落とし
相談とくく目て来た肩叩き

千秀
正坊

二、三分狂う時計で性にあい
狂うほど愛しているとまた騙し
五百羅漢狂ってみたい日もあろう

六月の時計は狂うことばかり
生真面目な父の時計で狂えない
ピストルの音でゴッホの絵は狂う

吐来
清芳

相談に乗ります甘い甘い声
相談という建て前の泣き落とし
相談とくく目て来た肩叩き

千秀
正坊

狂うほど人を愛して星になる
満津子
度選

六月の時計は狂うことばかり
生真面目な父の時計で狂えない
ピストルの音でゴッホの絵は狂う

吐来
清芳

相談に乗ります甘い甘い声
相談という建て前の泣き落とし
相談とくく目て来た肩叩き

千秀
正坊

歌子
すすむ

六月の時計は狂うことばかり
生真面目な父の時計で狂えない
ピストルの音でゴッホの絵は狂う

吐来
清芳

相談に乗ります甘い甘い声
相談という建て前の泣き落とし
相談とくく目て来た肩叩き

千秀
正坊

歌子
すすむ

六月の時計は狂うことばかり
生真面目な父の時計で狂えない
ピストルの音でゴッホの絵は狂う

吐来
清芳

相談に乗ります甘い甘い声
相談という建て前の泣き落とし
相談とくく目て来た肩叩き

千秀
正坊

歌子
すすむ

六月の時計は狂うことばかり
生真面目な父の時計で狂えない
ピストルの音でゴッホの絵は狂う

吐来
清芳

相談に乗ります甘い甘い声
相談という建て前の泣き落とし
相談とくく目て来た肩叩き

千秀
正坊

歌子
すすむ

六月の時計は狂うことばかり
生真面目な父の時計で狂えない
ピストルの音でゴッホの絵は狂う

吐来
清芳

相談に乗ります甘い甘い声
相談という建て前の泣き落とし
相談とくく目て来た肩叩き

千秀
正坊

相談がだんだん愚痴になってくる
相談にくる頃と待つてる老夫婦
相談も惚れたはれたで悩んでる
相談をされる顔には金が要る
こんな事まで相談してるの恋かしら
相談が酒で始まる村興し
残高と相談旅行止めにする
返事してほしいと思うお地蔵様
相談はするけど意見聞く気無い
相談をして欲しかったと絡む蔓
路地裏の相談温い顔ばかり
相談をしてたら波に乗り遅れ
長男として相談に乗ってやる
鈴付けに行く相談は揉めに揉め

兼題「魂」

高杉鬼遊選

楓 楽 柳 影 東 雲 武 庫 坊 萬 的 月 子 柳 宏 子 英 子 靖 子 千 寿 子 泰 子 笛 生 庸 佑

妻の留守魂少し休ませる
魂を置いて戻ったトルコ風呂
教科書に大和魂ちらつかせ
魂を売って二度目の職につく
捨て石のどれも魂はいってる
魂をまた番台に置いてくる
あだし野の風魂のすすり泣き
地図にない杜に魂連れて往く
魂が重なっている母子家庭
大和魂の化石が軍歌がなりたて
地上げ屋になって魂磨き上げ
魂を売るタタ酒に酔い痴れる
大和魂この世を空しく見ています
魂を盗まれてから渴き出す
きのこ雲大和魂の骨を抜く
踏切りでほら魂が呼んでいる
僕にだけ魂がないレントゲン
魂があるなら化けて出てほしい
大和撫子の魂時々顔を出す
軍艦マーチバチンコ魂かき立てる
魂を時どき旅に出してやる
たましいよ石棺に雨降り続く
ネオンの灯鬼も吐息をひとつ吐く
魂を喰べて綺麗な女郎花
たましいの色が同じで逢っている
魂が智恵子と遊ぶ九十九里
魂はハンドバッグに入れてある
魂を残して棺に蓋をする

月 子 耕 花 敏 元 紀 天 笑 智 子 靖 子 荒 介 冬 葉 武 庫 坊 白 溪 子 柳 宏 子 遊 美 年 代 白 峰 史 好 千 代 三 柳 宏 子 千 寿 子 萬 的 い わ ゑ 作 二 郎 吸 江 規 不 風 千 代 歌 子 智 子 鬼 遊

(清記・楓楽)

都大路川柳社

創立10周年記念川柳大会

とき 昭和63年10月6日(日)10時開場
ところ ホテル本能寺会館F5大ホール
京都市中京区御池通河原西入ル南側

講演 途 中 中村 光行氏
宿題 結 ぶ 天根 夢草選
橘高 薫風選
小松原爽介選
保木 寿選
森中恵美子選
山本 礒選

特別課題 祈り
色 各題2句 締切11時 会費千円
白 峰 史 好 千 代 三 柳 宏 子 千 寿 子 萬 的 い わ ゑ 作 二 郎 吸 江 規 不 風 千 代 歌 子 智 子 鬼 遊

事前投句 都 奥山晴生 共選
本田英子

事前投句は出席者葉書に2句連記

投句締切 10月5日(欠席投句拝辞)

送り先 〒616京都市右京区太秦垣内町9
井上 信子宛

電話〇七五―八六一―二二五

懇親宴 ホテル本能寺大宴会場
会費 四千円

事前投句と一緒に申し込んで下さい。

主催 都大路川柳社



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・玉置重人

川柳ねやがわ

高田 博泉報

病窓はキャンパス雲の絵とあそぶ
喜怒哀楽辞令の知ったことてなし
真っ直ぐに歩いて車に怒鳴られる
助手席にミニスカートの風を乗せ
紅一点いて行儀よい飲み仲間
肩書がついて辞令を重くうけ
仲間には冷たい妻であるらしい
大陸へ二度目の靴は紳士靴
仲間割れカラクリ人形踊れない
肩パットなんぼ入れても十二貫
仲間にも隠しマイクは伏せておく
肩ふれ合つてれんげも仲間意識もつ
無縁仏のつぶやきを聴く寺の路
飲み仲間マダムの操守り抜く
仲間うち小さな声でかばい合い
辞令には別居せいとは書いてない
酒の気が抜けて仏の貌になる
辞令見て嬉しさおさえ笑を吞む
運転の上手な妻がいて平和
出世頭仲間はずれの時期もあり

良三 敬美 勝水 創進 一進 まさお 頓坊 曲手 杜的 増造 雅文 英華 正晴 時弘 すすむ 勇太

転勤の辞令に春が動き出す
ささ濁る黄砂に泳ぐ鯉のぼり
嫁さんが上手に運転する家計
気楽な事を言つて苦しい胸の内
死を賭して仲間をふやす平和主義
エリート道の道へ仲間がひとり落ち
突然の辞令へ昨日の顔がない
お仲間と言われたくない時もある
花吹雪あびて少女は詩つくる
真先に祖先様へ告ぐ辞令
言訳のうしろで糸を引く仲間
注目の人が登場した辞令
五日目にいやいや飲んだ風邪薬
たった一人の仲間と思う影法師
ヤジロー！今日はどちらの肩をもつ
人去つて花の静かな息づかい
上司から気楽に來いとは何かある
途中下車知らない風とたわむれる
いい知れぬ寂しさ編棒が止つてる
運転はどうあれ免許もつている
仲間からボツンと離れているメガネ
親のすねかじつて気楽な夢話
天罰を受けると思ふほど気楽
仲間からはずれたようにいる仲間
三猿になつて仲間溶けに居る仲間
電話から酒が匂うてくる仲間
運転を貴方にまかせているわたし
三十の春というのに気楽な娘
この辞令見るまで生きてはしなかった
帰郷する妻へひと言早よ帰れ

川柳後案

井上柳五郎報

さかえ 一鬼 なつめ 権太 波留吉 菜月 藍子 とし 佐和子 あやめ おさむ かすみ シマ子 晴風 光子 一途 美智子 房子 博泉 頂留子 冬葉 庸佑 吉之助 鬼遊 亜鈍 小路 柳宏子 紫香

一枚のテレホンカードの熱い恋
テレホンカードだけが知つてるよい話
テレホンカード買ったマニアは使用せず
捨てられたテレホンカードにある美学
只酒じゃ徹底的に飲んでやる
クレオパトラの鼻は徹底して褒める
徹底的飲みと力んだ奴が抜け
徹底的に上司有の三大会
徹底的叩いても砕けぬ鯛の骨
橋が出来海の勇者が陸で活き
騒音が橋の袂で泣いている
大橋へ岡山弁がよく響く
アフガンに火種残して手を握り
悠たの見かけにせわし水面下
風紋を悠々歩いて確かめり
悠々とその日暮らしに詩があり
悠々と自信を持った仕事ぶり
悠々とラストシーンを持つ人生
悠々と雑草の詩を聞いている
悠々と過疎地で今日も鋏を振る

倉吉川柳会

渡辺

善句報

文平 吟平 義親 拓治 秋風 柳五郎 佐加恵 美智子 金吾 桃風 鯨虎狼 方巳 方志 照路 青銅 中健 博友 健一 玉水 善句報 よしえ 寿満湖 小生 とみ子 さつき 康志 碧水 ひろ子 幸苑 秋人

誕生仏にならって高く空を指す
失敗を許すソロバン持つている
ソロバンが合わない土地が少しある
折角のチャンス作って上げたのに
このチャンス人もやっぱり狙ってる
よく切れるナイフが置いてある机
家出した訳が机の上にある
抽斗の夢がはみ出す子の机
声かけるチャンスいひ花咲いている
机の上では理想の家を建てている
志はまだ高くあり鯉のぼり
先生も女秋には嫁にゆく
バラ一輪机に置いて帰ります
ライバルの机の花がよく匂う
先生も子供を塾へ入れている
机から灰皿離れようとせぬ
川柳東大阪

森下 愛論報

柳風 洋螢 千秋 観洋 かつみ ゆり子 やみお とみお 完司 秋女 御前 由多香 独歩 苦句 しんじ 滋啓 美子 度 慶三 湖風 喜風 孤舟 庸佑 白屯 晋吾 頂留子 恭太 信治

半分のその半分も言えぬ恋
損得で産んだつもりか早生まれ
職人の口は重いが手の早さ
半分は嫁にもきいてもらいたい
久世川柳クラブ 二宗 吟平報
気まぐれな旅を誘った春の風
欠点を補い合うて家平和
人相が悪いが牛にならまれる
倒産も知らず鶏よく食べる
まだ赤い未練椿の花の首
筆跡の乱れへ心みすかされ
あの人の子ならと気立保証され
手さぐりの今日柳話から芽をつかむ
男心女心均等法に聞いてみる
サングラスかければ大に吠えつかれ
老眼鏡外せば父の柔和な目
眼帯が取れて日差しへサングラス
居直つてみても掟にささげられ
ひど過ぎる掟に泣きます籠の鳥
広い海掟が漁場狭くする
門限の掟へ裏木戸開けてやり
平凡な顔で非凡な仕事する
平凡な暮しと見えて苦勞性
平凡に暮れて夫婦の夜を汲む
平凡に見えて忍苦の花開き
平凡な身にも佗びたい核家族
土を掘る伴侶となつても足らず
平凡に生きた足跡悔いはない
平凡な家から漏れる笑い声
平凡に見えて急所はよくつかみ
平凡に今日も感謝の老夫婦

章久 雅士 柳宏子 雀踊子 山人 静香 吟平 旭泉 半仙 保恒 つた子 美恵子 甫正 光水 種子 邦人 志重 英子 秀香 やす代 明子 つゆ草 さわゑ 勝子 楽山 虞人 伊久栄 千代女 禅心 ふさえ

平凡という幸せを子に貰い
柳川化粧槽 植村客遊子報
やんわりと丸め込まれた美辞麗句
母さんに内緒と孫へおこづかい
四季の色まぜてぜいたく呼びに来る
茶の作法いらぬ薬街のお茶をのむ
隣より大いぬ宝石指してます
かくれんぼ今は出来ない女に逢い
何食わね顔で女の刻み足
酒一合そう簡単にやめられぬ
木の芽あえが好きチビチビと猪口で吞み
ふる里が此処にもあったレンゲ草
童顔の夫の寝息が頼もしい
音痴でも音痴の味の小唄会
還暦を子に贈られた祝いの旅
戻り税我が家もチョッピリ笑みこぼれ
愚痴を聞く愚痴言う炬燵へ足を入れ
喜寿過ぎて神より仏よく参る
ひかえ目に耐えて生き抜く術覚え
正直な鏡に勝てぬ薄化粧
恋女夢で抱かれて今日を生き
いずも川柳会 吉岡きみえ報

江山 岳詩 秋月 越山 葉香 白李 大鷹 礎石 悲月 紅月 サワ子 輝月 遊峰 遊光 みつこ とし 永楽 瑞穂 客遊子 重昭 巡歩 勝水 多賀子 芳枝 昭二 青湖 桜水

お師匠に惚れたおかげの老いの趣味
師の教えはばたく難を温める
偉大さをみせぬ恩師にある偉さ
生かされて師の恩親の春は萌え
ふるさとの訛恩師の佗住居
師の言葉燃えつきてなお生かされる
ダイヤルを廻せば師の声もどきそ
天と地のはさまに恩師ふわり逝く
黄緑の絵の具が春の彩で炎え
アフリカの緑を救う街角(まち)に立つ
春あらし緑翁そつとつれてゆく
眼帯がとれてやさしい緑風
ふるさと論緑の山へこたまする
新緑の候で始まる無心状
緑化運動父の背中がまた曲る
過疎バスのトンネル緑また緑
うすく濃く春のちぎり絵緑増す
年金の聞いてやれない子の願い
人類の願い廃核平和のみ
願い事多い女に見栄があり
千羽鶴願ひむなし師の逝去
親馬鹿の願ひをよそに子の育ち
お百度を踏んで神様困らせる
平和の塔願ひは同じ千羽鶴
一浪も願ひがなくて宿さがし
願ひがかなって神様に気がつかぬ
祖国の栄え願って散った桜花
巢立つ子に親の願ひが重すぎる
浅はかな願ひ届かぬ春の雲
神よりもコネに願ひした入試
月の暈十指に余る願ひごと

元之助 為一郎 ちかし 晴月 良子 満江 芳子 水煙 風子 美磯 勝平 房子 勝子 春雄 佐美 寿吉 和子 孝太郎 翠星 勝味 久代 愚童 律子 一葉 喜栄子 早苗 紋次郎 久栄 芙佐子 幸一 きみえ

子の願ひ聞けば勝気な嫁が来る
主義主張友一人去り二人去り
蹴られても小石は主義を放棄せぬ
主義曲げぬ明治の父は強かった
青年の主張若さを羨まれ
母さんが涙で通した平和と主義
主義主張変えぬ明治の口達者
主義主張酒に酔ったら曲がり出す
先代の主義を見事に覆し
入れられぬ主義をあくまでつらぬく気
恙なく暮らし小言は言わぬ主義
主義曲げぬ堅さに裏で敵つくる
広場から主義がねり出すメーデー歌
主義主張でつかく持つて嫁が来る
主義持たぬ老母一票を狙われる
軟かい対話の中に主義通す
ワンマンのご都合主義を持て余す
三幸川柳教室 桜井 千秀報

夢酔 芳郎 秀子 久道 弁治郎 清吉 きよし 裕 芳風 軒太楼 草丘 まこと 正朗 文子 知恵子 代仕男 千秀報 まさお 千枝子 朱夏 由梨 靖子 辰治 三千子 啓 鉄治 千秀 さよみ カツミ 守

潮干狩貝にも生命ふと思つ
潮干狩子は子のような貝を取り
さかさまの船を見送る潮干狩
潮干狩股間で拝む紀三井寺
潮引いてはかない貝の私語を聞く
母がいて海広かった潮干狩
飽食の時代雑草美味となり
雑草のねばりを見せた寡婦の意地
雑草のまま農を愛した太い指
咲き誇る花へ拍手をずる雑草
雑草で生きて夢は持っている
草むしり丸い母の背陽が温い
花も実もつけて草にもあるドラマ
雑草の痛みは知らぬ胡蝶蘭
中北幸 敬子 育子 澄子 智水庵 当代 重次 金一 俊広 一郎

佳句地10選 (前月号から)

永倉 僕川 選

農村に一番欲しいものは嫁
喜寿米寿おまけのように生きている
病名を自分で決めて病んでいる
今聞いた内緒がじつとしていない
後もどりできぬ男の道がある
陣取りのように花見の真産を敷き
蓋をせぬ隣の欠伸移される
下向きで咲くから藤は美しい
本当の友は言葉を飾らない
巢立つ子に過保護の鎖解いてやる
独歩 本蔭棒 孤舟 仙岳 紫香 三笑子 花子 文子 久美子 諷云児

蝶々が来ると信じて待つ雑草

ハイキング家までついて来た雑草

雑草になりきれぬもの天に吐く

だんだんと小皺が増えて髪が減る

この皺は子育て済ました功労草

皺寄せがみんな私にやってくる

職を退きズボンの皺が気にならず

引力のせいと老化の皺責めず

人脈の裾は深い皺になる

ダイエット要らぬ所へ皺ができ

川柳高知

試着室三面鏡に見た誤算

満開の桜野立ての席もよい

父哀れ餌を運んで世を終り

口先ですまぬ孫との指を切り

口先も上手になった棒グラフ

筋書の通りになった多数決

この様な筈でなかった多数決

多数決満足そんな議長席

多数決という暴力に泣かされる

結局はお金強い多数決

芳三

正二

隆行

幸子

高子

美夫

邦郎

孝子

春枝

恒子

一求

嘉代

千鳥

徳和

竹萌

幸泉

朱坊

菊野

節子

和興

淳枝

飯の世にしては見事な桜花

京言葉おかみきれいな受け答え

平凡な主婦で我が家は御安泰

受持が変わり息子の目が光り

平凡な時間大事に積み重ね

コンピュータではじけ出せない胸の内

自惚れを真一つにた背負い投げ

狎犬の私語が聞こえる神の道

夢芝居シナリオ胸に秘める老い

三日間喋り通して旅終る

老妻がだまって美容院から帰り

小説に飽きも飽かれもせぬ男女

面従腹背憎い男と住むヒロ

鶴飼いに似て主婦の座のまた愉し

国境を越えて友情のチョモランマ

告白をすれば心が空になる

三欲を離れて旨い渋いお茶

唯ゆれて妥協はしないイヤリング

静岡市川柳塔同好会

永倉

僕川報

希久志

富志子

春栄

ダン吉

佳生

寿美

一弥

狸村

ひで

さよ子

武助

白光子

浪速子

射月芳

こう

初太郎

甘平

操子

僕川報

志げ

割り切ってみてもやっぱり老いの負け

もの言えは涙がくもる通夜の席

腰元へ目を走らせるフラダンス

あの人がどう口説いたか美人妻

沈黙の押し強さに感心し

おなじみの顔が浮いてる宿の風呂

無精卵卵らずに雛を育ててる

笑うけどちっとも福が来ってくれぬ

口説かれてみたい気もする花の宴

感心と八起の決意買ってやり

万歳をさせて脱がせる孫肌着

丹波川柳協会

脇田

米朝報

さかゑ

可住

照子

修司

静子

幸夫

文平

千代

つね

きん

きぬ

みつ

まつ

三津子

静代

久子

房江

僕川

米朝報

さかゑ

可住

照子

修司

静子

幸夫

文平

白猫児

隆男

写経千遍まだまだ黄泉の灯は見えぬ
壁土の中で生き抜く竹の意地(前月分)
むつごろうを守ることから村おこし
中年の女目と目が妬みあい
芹蔭路筋と春を食へ
道産子が乗替えなしの瀬戸の旅
同じ刻同じ顔ふれ坂の道
飲みすぎて酒と相撲をとりました
最高の教育受けてテロに死す
さよならを背中に聞いて恋終る
更衣したら日傘も欲しくなる
盆栽の限界までを剪つて捨て
六法が出るのと会話が歩き詰る
市役所の連休明けの人の混み

打吹川柳会

江原とみお報

百万両 三枝子 三枝子 順子 冬子 喜久夫 治幸 常善 ちよ 茂坊 万亀子 紀一 義美 杜的 宗光 紫映 たつみ 雄々 巡歩 紫泉 早苗 典子 白峰 雀踊子 梅朗 寿美子 柳風 善政 八太朗

時刻む音ばかりなり一人居る
ぬるま湯に勘忍袋が浮いている
千円が遂に小銭の仲間入り
すぐする流行女追いまわし
じいちゃん笑って腹を立てている
裏腹の言葉はたまに信じよう
中年期翔んで銀河へ色を染め
恍惚と焚火の絶えし花の雨
大望があつて黄昏ては居れん
弔いの列を勘定しています
西宮北口川柳会 松本 一郎報

温子 節子 倫子 佳女 佳子 仙岳 日出子 弘朗 とみお 一郎報 武庫坊 光代 青珠 園歩 眉水 よし津 芳子 英子 河子 諷云児 白溪子 保蔵 柳影 正坊 てる 恵美子 よ志子 みち子 いわゑ

裏話海の向うへしけ続く
お仏飯たやさぬ母が翔んでいる
かばん持ちの靴に詰まる髭はなし
母の日は姑を誘つてデパートに
裏話仏もまよつていてのお通夜
満足の五体伸ばして陽を浴びる
鯉のほり孫へ期待をかけてみる
かばんより風呂敷包み似合う母
事あれば夫を立てて無事な日々
お祝いを取戻す娘が控えている
バーゲンの母の靴に辞書とペン
酔っぱらいの父を見ている酒ざらい
スリッパの音さえ信頼できる医者
髭の守衛に少し淋しい裏話
父さんと作った果箱かけに行く
うちの家内が聞き耳たてる裏話
スリッパの一足隠すドアノック
本宅と同じ靴が置いてある
粒よりのなかで小粒があえている
靴一つさげてふらりと行つたきり
裏面史の女非業の死でかざる
旧姓で呼ぶ先生と町で会い
スリッパも拗ねてる片方裏返り
スリッパをさつと藤吉郎のよう
裏話の続きが通り雨に逢う
足枷がゆるみ翔びたくなる帽子
あとけない声でいじめの話する
勤め了え夕餉の膳に灯つく
膳の緒で聞いた話に嘘はない
花文字が窮屈そうに咲いている
そして今おんなが降りる寺の坂

柳右子 柳伸 年代 江美 べ女 美智子 しげお きよ子 笑女 紀雄 宣子 一の郎 杜的 萬的 静一 正一 三笑子 房子 香子 春子 天樹 水声 東角 伊郎 作人 定人 みつ子 六郎太 善太郎 荒介

池の鯉出てこい芽ぶく猫柳
美しく嘘の眼らみ恐くなる
工事騒音手拭一本で詫びにくる
さりげなく值札のゼロをかぞえ直す
どうしましよあんなに人怒らせて
晩酌も許されて来た医者通い
スリッパの音は母さんのお帰りが
紐を切るマジシャンの手が見破れず
足とせの悪さスリッパ拗ねている
先生にケンカ知られた綴方
子だくさん玄関にスリッパ乱れがち
はんでんに母のぬくもり春冷えに
スリッパの左右決めてる天邪鬼
真相の裏をいつかは売りつける
若者が来ると縁がこたまする

わかあゆ川柳会
松本はるみ報

片付けの下手な女の花時計
ふくれ面そぶりが少し効きすぎた
蛇だって恋のそぶりはするだらう
難問を鼻唄まじりで片付ける
ロッキード何年たつても片付かぬ
昔むかし片付けました青春譜
スーパで鰯撰つてる白い指
くりこしはゼロにしておく決算期
白牡丹童貞童女の笑顔する
片づいた娘の部屋の壁写真
落花するそぶりも見せぬ紅椿
戯れにそんなそぶりを見せるなよ
顔色を読みうらはらな日がつづき

富柳会
池
森子報
莊次

文夫 市雄 千秀 俊子 みね 一進 森生 模沓 米朝 御前 千世子 紫春 枯梢 芳仙 紫香 惠美子 ヒデ子 鈴江 聖子 世似 かつ子 智重子 三和 天痴人 清泉 民子 白汀 はるみ 莊次

口下手で口説く言葉は別に持ち
玄関で兄弟喧嘩してる靴
空白の日記さんげの昨日今日
美しい計画悪女にしてしまひ
登山靴が最後でしまひ込み
月給日女房が暗示かける靴
口下手で好意無にした悔いがある
空白の歴史掘り出すへらと刷毛
周到な計画だったか蟻の穴
子育てで終り空白読書など
口下手なくせに天女の胸射抜く
年の暮れ空の財布が騒がせず
口下手は時に相手に誤解され
人生に空白もあり深呼吸
木守柿過疎の父から日が暮れる
雑事の一角に空白の時を置く

むらくも川柳会
藤井
明朗報

邪魔な石拾えば歴史語りかけ
連休のお出かけ家族の靴が鳴る
邪魔者になれない余生の道を選ぶ
鯉のぼり跳ねるに電線じやまをする
賑やかな芝生の子らもさわやかに
暇らしく見える留守番いそがしい
さわやかな縁が今日も誘い出す
邪魔な枝おとして花が生かされる
おひまですかと暇な女が来る
アメリカの牛肉オレンジ邪魔になり
車間距離保って本音崩さぬ
チラシから気ままな旅の夢を見る
独り居の気ままな昼になる出前
連休が死出の旅路の車事故

岳人 文次 曲ん手 維久子 喜代 静枝 田中勇 伊庭勇 トシエ 富久一 市雄 花子 昭水 美房 森子 鶏生 みどり 一葉 竹乃 武衛 ヤス子 はる代 福子 文子 林蔵 義良 保子 ふさえ 寿

時刻表片手に気ままなひとり旅
新築になってとまどつづはめの巢
三連休日本中の預金減り
子育てもすんで気ままな核家族
五月晴れ蝶もさわやかに舞い踊る
閑々に老婆が作る袋物
忙中閑新茶のおくりまたたしのし
暇つふし雨が止むまで縄のれん
ものもらい一つ脛に出ておじやま
茶畑の歌さわやかに風に乗る

川柳はまでら
井上
喜辭報

頂いて有難迷惑する時も
当りくじ頂いた夢目が覚める
頂きたいと親が惚れ込む器量よし
故郷の頂きものを待つ季節
頂いた拍手に歌詞をど忘れし
売店の新米はじめはウロが来る
売店の名花は今日も厚化粧
公園も雨で売店客がない
泣きじやくる子も売店で笑顔見せ
売店に揃った揃たよ美婆連が
売店の美人は虫が付きやすい

にた川柳会
西村
早苗報

冬のチリ掃き出し春の風を入れ
指定席隣の咳が気にかかる
愛らしい口元からの減らす口
椅子一つあがり単身赴任する
息切れるのつてもひと貯金帳
学校へ予報信じて送り出す
サバンナの野生せはめる人で無し
土手のつくしに冬がさよならして行った

節江 昭子 八重子 さくら 吉野 久仁 秀子 正朗 芳朗 明朗 凡弟 一規 康規 悦子 千流 佳凡 佳子 真知子 夏歩子 凡兵 喜醉 夢醉 由郎 裕 哲三 花子 雪代 宗光 女

青春にしない恋を今してる

ロッカーに別の世界を持つ私服

試食してバスもほろ酔うワイン村

残り火を煽つていった憎い人

桜前線冷たい雨に足踏みし

合格の知らせうれしい電話口

春寒し山の灯船の灯が消える

飼いだ咬まれてからの健忘性

長生きは考えものだボケてくる

反抗期今日も二階にとじこもり

筆舐めて癖のぬけない字を崩す

挑む山あつて人生面白い

三月の家計簿嵩む交際費

近すぎた職場も困る私生活

方言もすっかり出せぬほど出世

悲しみを知ってる女の忘れ傘

かに寿司を車窓に花の旅が好き

川柳塔唐津支部

久保

シグナルが狂つて私を変えてゆく

チューリップ右へならえと肩を寄せ

亡母偲ぶ三途の河原石を積む

牛肉の自由化緑ない歳となり

日本の花に党派の別はない

あれこれのカードでズシリ皮財布

田畑を貰った党へ票入れず

山頭火の後姿や花遍路

新妻の色に染まってゆく新夫

京都塔の会

松川

四捨五入こじれたままのうしろ髪

泣きごとを詳しく聞いてる暇がない

薫風に水子地蔵へ迷い蝶

節子

景子

多賀子

紫泉

金市

千草

鉄花人

寿美子

雪子

登美也

紫吻

弘朗

舞吉

愚童

雄々

雀踊子

早苗

正敏報

旭恒

タミ

朴竜

幸夫

虹汀

四郎

高明

久仁於

正敏

杜的報

求芽

諷云見

紅陽

踏台が欲しいと思う子の育ち

独り発つ友哀れむか名残り雪

トロ箱の魚が跳ねてる秤り台

ロボットの殻をかぶつて左遷地へ

強がりを口に左遷の父が発つ

一先ずは飯台へ広げた市場菟

葉桜の駅を起点にして発とう

発つ君をやらすの雨は神の意図

ラーメンのことなら詳しく知っている

一番が発つても夜がまだ明けず

発車ベル顎紐も一度締めなおす

特別機家族の祈りのせて発つ

春ですねひとり歩きをする噂

人並の夢あきらめぬ影法師

伝言板の台詞もどつと春になる

春風に真意わからぬ京ことば

きのうより少し薄着になるもくれん

今晩は草津だよと老母誘う

吉日の筈の旅立ち不慮の事故

詳細は別表による但し書

落城の詳しい話を知る蚯蚓

団地族になりきれぬ父のすべり台

灯台の明りも朝を待っている

台帳に叱られてる年度末

川柳わかやま

西山

幸報

信秋

太茂津

照子

稚代

柳太

芳子

京童

白漢子

はつ絵

花子

美智子

圭坊

正坊

紫香

杜的

英子

達子

ただし

幸

武庫坊

年代

美穂

巨詩

三求

麗水

和友

水客

栄

幸報

信秋

太茂津

照子

稚代

紫香

柳太

神様の皮肉かお天気チグハグに

遍路みちどなたも他人と思われず

気がつけば他人ばかりの手術台

たつぷりと皮肉を聞いた借用書

幻想で彩る画布を捨て切れず

泣きぬれた視野に緑があたたかい

一時間でも他人になりたい時がある

他人並みわしは六男こぼれ種

採決を採れば味方が逃けている

お祭りを買つてもらった風車

風車幼き頃の秋祭

緑の視野を空の燕も無職かな

正論を吐けば裏から皮肉られ

皮肉言うたびに自分が細り出す

病室を彩る若いナースの声

答案の×も皮肉ではめておく

公園の緑で病んだ目をいやす

逢つて訣れるだけの小さな他人の絵

皮肉つたつもりがさりとて無視される

釣り人の他人の竿が気にかかり

好調へ野次も皮肉もついてくる

皮肉かも知れぬ過去の褒め言葉

親切も他人のぎりぎりまでにする

ささやかな抵抗皮肉の独り言

心から緑が消えてゆく不安

傷ついた心を土足で踏む他人

彩りが過ぎて初心を見失う

さむい首洗う緑がまぶし過ぎ

鶯が鷹生んだ皮肉をうれしがり

灯を消せば笑う他人の顔がある

みんな皮肉に聞こえてしまふさむい耳

柳宏子

萬保

鉄治

高夫

美智子

恭子

忠

政一

美枝子

静代

石子

忠雄

桂香

紀美女

守

輝子

狂虎

信子

好笑

克子

武雄

紀久子

結実

三男

英子

正博

寿子

登志代

緑良

幸

川柳大阪

山下みつる報

重人

ふみ

太陽と一緒に運動したい大

年人

賞罰はなし平凡で慈なし
菜の花が咲くと亡母の墓想う

敏

八重子

大皿をべろりママさんベレーよく食べる

泰

点滴もゲートボールを応援す
夜桜の冷えを包んでくれる人

三十四

千春

領土返還叫びは北に届かない
逃げ易いように運動しています

枯梢

瀬戸の海笑顔と涙交錯す
雨もよし花見小路を濡れて行く

本蔭棒

瑞枝

シナリオになかった雨がじまをする

比沙湖

老いのしわ深い味わい有りそうて
師を囲み思い出つての走馬燈

亮太

荒介

雨の日は雨の絵になる京の街

夕花

お色気をすこし残す朧月
火の車くぐり成長する財布

正之

花子

声かけるチャンスがくれたにわか雨

柳伸

女房を孫にとられて独り酒
仏間から母の匂いがまだ消えず

喜久志

朗子

都合よく泊れる雨が降る不倫

頂留子

胸もとに女らしさを誇る春
精力削飲んで女に笑われる

喜酔

時子

駅通り過ぎてから降りる用浮かぶ

綾珠

漬物石の重さを知っている女
願かけたしるしに頂く守り札

希久志

富美子

還暦を過ぎると古稀の来る早さ

三男

花園は今日もお色気健康美
花園にギャルのおしゃべり悪いの場

洛酔

正子

食べ過ぎて薬をのんでいる平和

勝美

定年で過す花園老い二人
みくびつた女に痴漢悲鳴あげ

凡九郎

より子

旅人は情けもおかず通り過ぎ

シマ子

転勤辞令押し頂くも宮仕え
運命という程でない出合い

虎酔吟

玲子

長すぎた話にメモが腰を折り

妻しんじ

黄砂降る城に桜の薄化粧
いたずらな風が運命変えにくる

凡風

夕子

今日の明日も実年の地図美しく

直二

満ち足りた女菩薩の顔になる
川柳塔きやらばく

笑然坊

てい子

じやが芋が意地を見せえる箱の中

あすなろ

政治日枝子報
恵子

覚然坊

千代

同窓の湯治に持ち寄る過去のきず

正子

喜三千雄
鉄心

喜三千雄

田鶴

切れそうな絆つないで子が伸びる

寿恵子

みくびつた女に痴漢悲鳴あげ
ここの一番女の強さ見せる母

喜三千雄

晋吾

大役を見事果たした大いびき

睦子

鉄心
天平

鉄心

章

荷車を押すと曳くとの夫婦坂

こふゆ

酔舟
一歩

酔舟

重人

連休へ来た孫たちが振り回す

敏子

比呂志
金太

比呂志

東雲

山菜の珍味を知らぬ子の育ち

正己

金太
みつる

金太

悦郎

千代紙の雛も並べて女の子

巴子

恵子
朝代

恵子

悦郎

木の芽立ち試す母の弱気に責められる

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

雨上り山がむくむく動き出す

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

メルヘンの世界へ孫を連れてゆく

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

雨上り山がむくむく動き出す

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

雨上り山がむくむく動き出す

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

悦郎

大輪へ咲かせる母の菊根分け

悦子

恵子
朝代

恵子

— 101 —

退院も間近に私物が皆揃う
相談は貴方一人とおだてられ
一年生ゆつくり母の春休み
子供より母が張り切る一年生
通り抜け浪花の誇りいつまでも
渾身の力絞って母になる
春うらら鶯を啼く九官鳥
春風に愚痴も言わぬ鯉のぼり
雑念を捨てて花見の客となる
親の夢しらずに背負うランドセル
春疾風合格絵馬を遊ぶ
柳友の短冊を読む八重桜
富士山に登る夢見ている米寿
短冊の句が足とめて通りぬけ
O日会明治は遠く五人だけ
短冊を探して間に通り抜け
生きていて良かった夢の渡り初め
ボンクラな男に有った土性骨
二つ三つままに成らないのも人生
うやむやで母はみんなの顔を立て
米びつの米に明日へ余裕持つ
身代りの殴られ役というバイト
植村が主役を譲るソリの犬
エキストラ私も今日は姫の供
約交の女にあつさり白い旗

健三
たけし
隅谷義一
昇

尼崎おはま川柳会

春城武庫坊報

カラフルにボートも二人風五月
旅ころさそう五月の風が呼ぶ
早や五月うれしいヒマゴの誕生日
目的があつて五月に旅に出る
呼び込み屋社長大將ばかりなり

紫香
すみ
保蔵
義嗣
敏之

私呼ぶ鈴が鳴ってる母の部屋
呼んでない貧乏神が座り込む
さんつけて呼んで嫁との距離思ふ
計算が得意でなぜか嫌われる
計算の裏に舞台が出来ていつ
計算に入れてなかった避妊薬
そこだけの話へ豆が煮えてくる
計算はびつたり合うが銭足りぬ
愛の巢をちよつと覗いた雀の子
病む友の足に代つて桜撮る
チューリップ唄のとおりに咲いている
傘立てに傘あふれさせ通夜の客
待ちぼうけの顔ながめてる水すまし
尼崎いくしな川柳会 春城 年代報

淡墨へ流石人柄のせた筆
美しい笑顔と出合う花の寺
古い民話を訪ね訪ねるエトランゼ
鯛やきが一つ不足でもめている
故郷の土は跳で歩かれて
コンベコウの鯉が支柱にからみつき
コンピュター知恵袋には歯がたたぬ
夜叉になる顔をつづくるコンパクト
サテ自分すこしもわかつてないやナ
模造年らセザンヌの絵に変えて春
年金を入れた財布は妻が持ち
先生と呼ばれる人が多過ぎる
先生の恋のうわさは風に乗り

美智子
静夢
保蔵
久美子
文夫
美代子
天樹
凡九郎
萬的
伊三郎
園歩
年代

ちぐはぐなバントマイムと昏れてゆく
ちぐはぐな儘に女の彩を織る
ちぐはぐに回つて楽し夫婦独楽
ちぐはぐな思いを一つに熟通い
愛と憎ちぐはぐに來る恋しぐれ
ちぐはぐのままで開いた自動ドア
そのうちにお前も分るまだ若い
口だけはまだまだ若いベレー帽
青年の矢はまっすぐ天を射る
鯉のぼり線路工夫は若い父
打たれても流石はエースに面
博多帯流石お茶屋の女将さん
道楽の粋を羽織の裏に見る
血を継いだ子供さすがに芸が受け
流石夫婦目と目で話通じてる
出すときは出して長者の顔をする
人気だけ流石親父の七光り

はつ絵
英子
杜的
ときお
正一
春子
一郎
風云児
正坊
作二郎
紫香
芳子
武庫坊
白漢子
みち子
定人
佳秋

山荘の見晴しもやが邪魔をする
話とだえてはつばつ句でもひねろうか
万緑へうき世の義理をしようて出る
笑い声隣の部屋にまけられぬ
春立ちて額田の君の里を訪う
樹々緑桜は何処へ行ったやら
頬に風みどり眺めてねむくなり
駅舎には一人無人でない額田
五月の陽しみをそばかすをよろこばす
山つとじ残り火もはやして山の裾
かたわらの車横目に五月坂
万緑に心を洗う山高し
若葉風おんな緑に染め上げる
蝶が舞う雄蝶雌蝶はわからない
ひらおかの梅林を見ず昼の酒
高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報

兼治郎
春子
宏子
美津枝
すすむ
恭昌
萬里
さと美
楓
照子
綾子
光子
みつ子
登志実
鬼遊
泰弘

傘貸して後ろ姿も好きなりと

金貸してから姿を見せぬ友になり

宅急便から転げでる親ごころ

紙屑が転げ机に詩がある

片眼のタルマでときどき転びます

転んでも只では起きぬ手相持つ

転んでもただで起きぬ運を持ち

起きるのが早い転んだハイヒール

土地ころがし転がす金が内に無い

定年後赤い靴下履いている

靴下をあてがい扶持の色オンチ

靴下を脱げば白砂の浜が待つ

パンストのたるみが老いを見逃さず

網タイツ馴染めないのは齢かしら

あんよする靴下そつと編んでいる

靴下を脱いで敵から放たれる

絹の靴下春の廊下はよく冷える

靴下にぐちを聞かせて毛玉取る

靴下を白足袋に替え家業継ぐ

使い捨てカイロへパンスト借りてくる

あの男河童に似てて憎めない

世の中をうまく渡って行く河童

アフリカの河童に水を送りたい

すいすいと泳ぐ河童のいきなこと

友達がはしくて河童嘘をつく

良い乳房だして河童の絵が売れる

立志伝溺れたこともある河童

水面に出るなと河童子に諭す

河童にも故郷があり供養する

河童の花嫁水かげろうの夢を見る

お花見の誘いに風も弾み出す

しげお
春風
風云児
如洲
杜的
紫女
真香
眉笑
多賀子
一郎
圭坊
幸枝
栄子
房子
萬子
越子
百合子
求芽
豊子
美智子
彰一
輝夫
スミ子
冬葉
正坊
白溪子
京童
作二郎
英子

春萌えておたまじやくしの自己主張

目まぐるし見舞に患者死をさと

来て嬉し帰って嬉し孫のこと

わかつた振りしてロダン展見て廻り

ワープロにいろんな漢字教えられ

花の季へ嘘はもたない花の種

正夢も永い一生だからある

輝いているのは小学一年生

合格の庭に桜も咲いて散り

木の芽とき持病一つを持てあます

外科内科眼科もふえた診察券

釣り書へバストサイズも入れましょ

ボケ防止だろうか妻の英会話

神棚の辞令を神もおがまされ

南大阪柳会

中川

同じ事いつか想うていた夫婦

雑踏へとけこむ顔のない夫婦

饅頭が一つ夫婦に嘘がない

いい妻がいて人生が短かすぎ

まぎれもない夫婦茶碗が二つある

すんなりと暮す夫婦の退屈で

波風を立てぬ夫婦で出る欠伸

夫婦箸買い直してフルムーン

無造作に死んだ金魚を捨てて行く

無造作の中に個性がちゃんとある

無造作のようで仕事の手にリズム

無造作に挿しても命失わず

無造作な筆の運びがちゃんと画に

無造作に出来れば悔いのない詩集

無造作に束ねた髪にある色気

夕暮のポストに愛の詩をいれる

静江
花代子
光代
武茂
暢子
紅陽
あきら
陽露子
恵美子
よ志子
佐代子
とある
鬼遊
滋雀報
頂留子
白兎
滋雀
公一
慶三
曲ん手
トミ子
新造
作二郎
冬葉
文秋
勝美
善信
晴風
ハル子
藤子

後悔が少し残っている日暮れ

夕暮れて仁王がホツともらす息

やるだけはやった夕陽が美しい

来ぬ人待つ夕暮れの月見草

夕暮れのネオンに鴨が騒ぎすぎ

夕暮れに何か淋しい窓を開け

春彼岸日暮れのゆとり置いてゆき

夕暮れは明日の希望をつれて来る

同類のような顔してもぐり込む

人類の敵は科学者かも知れぬ

どれもみな似た風態が屯るする

同類と甘く見すぎた落し穴

類似した鳥だが違つたと笑われた

ゆつくりと椅子が廻つたお伺い

コヒーを入れて顔色伺おう

縄のれん誰に伺うこともない

御都合を伺う顔で顔を読み

した手から伺いますがと言ってくる

御伺いします便りのなつかしさ

お伺いたてて責任転嫁する

駒つなぎ川柳会

里

捨て台詞きいてしまった壁の耳

罪一つ許して貰うケイ買つ

あの世へ土産に罪を持ってゆく

壁に背をもちたれる盃黄昏か

悪人が眠り善人眠症

ハーマニカを吹きなくなった青リソ

役人にとても良く効く鼻ぐすり

たれ流しようやく判る深い罪

罪意識なくした世代恐くなり

花が散る浅いえにしの女想う

智子
柳度
章久
憲太郎
寿美
三恵子
庸佑
雀踊子
柳宏子
千梢
綾珠
重人
久子
信治
しんじ
凡九郎
寛然坊
楓楽
祥恵
喜代治
雅風
悟郎
十歩
壮之助
東雲
勝美
国公

壁白くぬって冷たい人にされ
 カレンダー吊って隠した壁の傷
 一億が踊る笛なら吹きたいな
 経験も薬だ一度させてやろ
 生きて往く事が罪ではないように
 良い縁朝の茶柱ボケッてへ
 口惜しさを壁にぶつけている涙
 嫁姑やぶれぬ壁の一つあり
 角笛へ少女ハイジが馳ける丘
 新世帯母が持たせる置き薬
 罪でつせ間接税でとるつもり
 出来ごころミニスカートの短かすぎ
 一期一会俺には過ぎた女と遇う
 見えぬ壁にまたはばまれて人生路
 剥げ落ちた土蔵の壁が過去語る
 二代目にとつても厚い父の壁
 因習の壁にあかるい嫁がくる
 善人を集める青い笛を吹く
 いい友と酌めば薬になるお酒
 古釘のような女と暮らす縁
 兵馬俑のひとり鳴らない笛をもつ
 薬漬け無風地帯の中にいる
 それだけで罪をつくっている美人
 寺詣り罪意識した訳でなし
 五寸釘うたれるほどの罪な恋
 絵馬褪せてだんだん縁が遠くなる
 針金を切った音して縁を絶つ
 ガラス張りのヒルに神農さんの虎
 スランプの壁は厚くてのしかかる
 毒喰わば皿まで罪なおとこはん
 実篤が壁にびったりした新居

頂留子 庸佑 史好 文秋 凡九郎 柳右子 恒明 比沙胡 章久 憲太郎 新造 眉水 甘平 冬葉 浩一郎 恭太 雀踊子 作二郎 曲ん手 射月芳 柳宏子 鬼遊 重人 翠公 律子 千代三 柳伸 小路

川柳泉尾(三月) 吉川
 ヒュルルブランコ落葉風の友
 宴会に酒に釘さす聴診器
 ごみ箱がいっぱい確かに生きている
 政治家のセンス疑うこと多し
 春休み宿題なくてホイのホイ
 掃除機を蔵つてからの茶がうまい
 お水取り大仏様も大きく
 初恋よ甘い香りの沈丁花
 母さんの供でおこほれ期待する
 老婆がチョコ買つて来たバレンタイン
 気疲れの真向うにある思いやり
 気疲れで十人十色の意見聞く
 気疲れに触れず背中を抱いてやる
 すぐ斜に構える相手に気疲れれる
 小疲れを昼の雑踏へ捨てに行き
 小さな嘘いい通しての腰の疲れ
 得意です電車の中の一ねむり
 お得意のどじょうすくい腰の線
 得意先一つなくしたしゃべりすぎ
 得意なもの一生持たず終るかも
 漬物が得意で味のある女房
 冬の神時には寒さゆるめます
 飽食でゆるむと坂が転げそう
 ゆるんでるボタンの位置で夫婦仲
 根回しで得意な首相にだまされる
 森のごと深いみどりか恋しくて
 得々と鼻が喋っておりますネ
 川柳泉尾(四月) 吉川
 花の万博へ道がのび地下がのび
 大逆転あるから人間やめられぬ

寿美報 靖子 敦子 伴子 光子 三世 シメ子 美南子 途子 あやの 白水 和子 シマ子 弘子 三千代 中田道子 美代子 悦子 葉子 淑子 美津子 トミ子 義一 はつ子 美子 敏 良子 寿美 弘子 シメ子 寿美報

百薬の長と今宵も酒にくれ
 こころ読むああ漱石の誠実さ
 プライドなど捨ててしまおう重いから
 四月馬鹿今日一日のドラマだよ
 ジェラシーを少し浮べた春の海
 孫の手の温もりかみして春の畦
 度忘れの知らぬ顔してとばけてる
 落椿女の情念消えずあり
 冬ごもり抜け財布がよく聞く
 お人好しワンクッションに使われる
 夕飯のメニュー魚屋きめてくれ
 言い訳のメニューはいつも出前です
 メニュー付きで猫を預けて旅に出る
 人の道万人万葉メニューあり
 泣かれてはママの手を伸ばす
 代理業女の城へ手を伸ばす
 影武者の最期へ花の雨が降る
 知らん顔しても尻尾掴んでる
 出世尊掴み損ねて縄のれん
 十五歳わが手で掴んだ高校生
 幸せを掴んでほしいモミジの手
 逃げないで彼に掴まる鬼ごっこ
 幸運を掴み損ねた冬案山子
 堺川柳会
 角出して長柄の箒に用がある
 飛び出した鼠へあわて撲つほうき
 掃除機に追いつくおとされた庭箒
 母印でもよろしおますとのせられる
 棒切れで遊んだ昔なつかしい
 捨てられたつかい棒の独り言
 子に渡すバトンだんだん重くなる

シマ子 三千代 途子 敦子 美子 三世 良子 道子 きよ子 白水 淑子 和子 伴子 はつ子 悦子 トミ子 美代子 靖子 義一 美南子 昭子 寿美 河内 月子報 妻子女 初枝 道女 てるよ はつ絵 みつ子

口紅を拇印のようにつけられる
ねずみ取りにかかった連のない拇印
棒のようになつてワルツを踊つてゐる
真直ぐに打った棒には悔いはない
花吹雪しばらく用のない簪
命まで取つた拇印の無表情
軽くみてつた拇印でほぞをかむ
花びらとしばらく遊ぶ庭簾
坊ちゃんに逆らう不利は知つてゐる
国民に内緒の拇印押しに行く
誓約書なんべん拇印もろたやら
日本人あつさり押しに來た拇印
うっかりと片棒かつぐ羽目になり
国籍の拇印と主義が纏れさせ
しつかりと私を主張する拇印
初顔のした失敗をかばてやり
拇印から拇印へ渡る落し物
初顔が古參を越えた口をきき
棒立ちでお手上げ犬が鳴き止まず
遺言書無知な拇印が徒となり
お互いにつつか棒の役をする
朝早い会長籌持ち歩き
味方から見ても坊ちゃん駄目な人
老人会籌手に手に朝茶仕
貸し借りの出来ない拇印俺のもの
こいさんの拇印きれいな渦を巻き
坊ちゃんて育つた家を売りに出す
坊ちゃんの顔でどこにも隙がない
はんぼんと言われはすんできたチツプ
反骨の父はチャンス棒に振り
拇印でもよいと宅配置いて行き

いわゑ たつお 金三郎 純枝 素灯 甘平 信博 頂留子 庸佑 美房 泰子 武助 凡子 柳太 克子 真柳 千万子 半銭 小雪山 かりん 東雲 笑痴 均 真平 薰風 豐子 天笑 月子 紀美女 芳水

坊ちゃんが目をつけてゐる美人秘書 正坊
川柳たけはら 森井 薔居報 幼典之
ミニ四かつてわくわくたのしみだ
ランドセルがおもたいね一ねんせい
がつこはたのしなかつたぞうれし
おじいさんすもつたすてれいまえ
せんりゅうをはじめて五年目がんばるぞ
三年生やさしいおねえさんになる
四年生自転車もつすく楽しみだ
まつの木にばつかりうかぶお月さま
優勝をしてみせるぞと思ひました
母の日に貯金おろしてプレゼント
新学期勉強勉強がんばるぞ
それそれそれたんばの花咲き出した
六年生自覚を持つてがんばるぞ
海外へ修学旅行はしたくない
大学が二人家計簿ケチになる
ビールもつ父さん若くない
架橋なる忘れてならぬ人柱
家継がぬ次男へ先に嫁が来る
どうしてもと言えは弱のがついて行く
限りある命と知りつう向う見
黄砂降る四十年前踏んだ土
目覚めねば相手は今日も走つてゐる
勉強家らしく辞典をそばに置く
古タンス亡母の顔して捨てられぬ
展示会まだまだ苦勞抜けられぬ
やつと春第二の人生悔いはない
おしやべりを止め春雷を聞いている
八十をゲートボールで充電す
潮満ちてくる日もあろう曲り角

静佳 八重美 君枝 千枝 麻代 雪子 喜美子 トシ江 浪子 喜久恵 清水 蘭幸 薔居 小由博 小六由 小五由 小五晴 小五晶 小五視 小四孝 小四裕次郎 小三史 小三昌 小一たかひさ 小一歩 小一歩 美之 幼典之

奨励金で植えたみかんを伐れという
非課税の梓中流のはるかなり
一番に引いてしまつた厭なくじ
公民祭おわぬぬ人に励まされ
生命線が妻より長いので困る
春眠へ目覚しの音あげておく
さくら咲く孫も大きな輪の中に
過激派よ母の心を忘れたか
春祭りエアロビクスにたじろぎぬ
趣味講座受けたくも脳動かない
春景色バックミラーに果てしなく
春雨に似合う蛇の目が見つからぬ
旅すればここにも年寄りだけの村
亡母のこと子のこと若木みつめおり
コップ酒父の悲哀がわかりかけ
うそ一つ秘めてバックが重くなる
かぞえ唄夫婦のリズムよく狂う
早口の医者の注意を聞き洩らし
春の雨十人十色の音で聞き
こんな幸福だつてあるんですね桜草
少し自惚れがあるのか墨の彩
やることをなして男の顔光る
苦しみを突破し強くなるわたし
歳月よそつと見ていた裏ボタン
口げんかの相手が欲しい独り部屋
髪切つて乗る船長に見る決意
聴障川柳 稲田 豊作報
争へば子供は妻の旗を振る
母だけは味方なんです母だけは
千切れ雲むしように味方ほしくなり
味方には直系傍系義理とあり

清水 栄恵 光子 静風 静枝 房子 淑子 静火 ヤスエ 千恵 貞己 政己 不朽 白狐 こうじ 節夫 一路 比呂子 笑子 太虚 笹舟 令子 シゲヨ 新造 豊作 柳香 和江 文古

甘えても拗ねても味方になる杖よ
難聴は悲し味方でささ笑い

自他 一体と分れば絵で我が味方

味方だと言つて演技のうまい人

疑えば味方も敵に見えてくる

事務所に味方はかりでない選挙

敵味方浮世の風は辛いもの

昔から利害を抜いた味方なし

年寄りは味方ばかりと暮らしたい

応援の味方万歳夢見てる

川柳藤井寺

赤木

喧嘩にはちよつと不向きな京言葉

陽炎の石川堤春を摘む

建前と虚飾中身の無い靴

五十まだ責任持てぬ顔のまま

怪しげなマツチと戻る旅カバン

ちよつとした言葉のはずみで国がゆれ

抱くこともなくなり愛しさ増してくる

彷徨つていとも気づかない迷路

妻病んで市場通いに一寸でれ

みんな好きそのうちひとりだけになり

まあまあの人を美人にする喪服

しがらみの力を信じている孤独

解けそうで解けないクイズ寝つかれず

母さんの援護射撃で成った恋

さよならの握手また会う誓いです

口下手は酒が入ると力み出し

団地にも初節句あり鯉のぼり

俺はもう死んだはずだよ四月馬鹿

国策え政治貧しき長寿国

言い訳を聞いてもらえぬ力こぶ

三香

行江

鉄火

たみ

真女

進一

一眺

みつる

健太郎

八恵子

和子報

志洋

ときお

つやこ

きよし

治子

スミ

吸江

美代子

作秀

昭子

本蔭棒

与呂志

伴子

婦美枝

政代

祐二

繁男

風来坊

みのる

末一

視力衰えみんな美人に見えてきた

語らいのゆきつくところ海明り

ああ春愁二人は月に濡れている

ばらの花いつも笑顔で窓の外

共稼ぎ力かしてる市場籠

窓口に夫婦他人の顔になり

株やれば図太い根性湧いてくる

料亭の取崩を知る黒靴

腕角力息子に負けている笑顔

ありがとう何と響いている言葉

ボーナスは父の力のありつたけ

ままごとは土筆菜の花皆並べ

新学期背中の鞆鈴がなり

見て来たと言葉弾ませ子はしゃべり

新入生背中に嬉しいランドセル

用意した言葉が出ない日の弔辞

土壇場で思い出させる母の顔

何処からか妙な日本語流行ってる

センバツの皆勝てそうな顔で来る

踵返した日から心に疼くもの

八尾公民館川柳教室 高杉

鯉のぼりゆつくりおろす雨模様

蘭の花今日か明日かと未だ咲かぬ

ゆつくりと咲いて下さいチューリップ

ごゆつくりと妻が箸を立てている

お好み焼屋ゆつくり食べたい昼ごはん

鈍行がゆつくり特急待つてやる

バスがうやうやゆつくりできた膳

鈍行の旅を愛する時刻表

ゆつくりの逢瀬をせかす鳩時計

ゆつくりと自分ひとりの万歩計

和美

雅美

彩

初枝

敦子

喜道

ふゆ

つお

三郎

美房

正枝

秀伸

好太郎

よう女

幾

松亭

美佐

清心

秋園

和子

鬼遊報

登喜

好子

泰成

孝子

幸一

友一

はる

公子

気が急にゆつくりゆつくり喋られる

ゆつくりと開けて遅刻の顔が来る

ゆつくりと過せる日々のがたし

ゆつくりと生きたいけれどせわしない

生き急ぎせずにゆつくり絵を描こう

若葉マークゆつくり出たり入ったり

ゆつくりとしてはおれない花が散る

一気飲みより手酌の酒うまし

ゆつくりと渡る瀬戸内過去となり

連休で子のおすプラン親ものり

日曜日なのに早よから目がさめる

ゆつくりと切抜記事を読み返し

ゆつくりとゆけばいいのに又ころび

蟻さんよたまにはゆつくり歩いたら

ゆつくりと足を伸ばした里帰り

ゆつくりと母になる日へ身寄せ

ゆつくりと上った株が急下落

ゆつくりと三連休は通り過ぎ

サークル檸檬

新緑の十三日の金曜日

ふるりの緑がやさし傷心に

五月晴心も干して出直そう

雲海に軍艦のごと山ありて

おおかたは思わぬ方に流れ雲

メーデーとつじ父の忌五月晴れ

境内の緑にそまる宮詣

菜の花のみどりと松の葉の緑

9月の本社旬会は会場の都合により

9月5日(月)です。

龍襄

トシエ

市子

初子

百子

道子

春子

幸枝

恵江

君江

力

その

弘直

シマ子

知佐子

章

信一

ふみ子

片岡智恵子報

今日子

登美子

三四子

雅子

智恵子

美緒

泰子

薫風

7 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	1 日(金) 午後1時半より 有力・受ける・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
堺川柳会	3 日(日) 午後1時より 店・未婚・味噌・妙薬	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川 柳 塔 まつえ	9 日(土) 午後1時半より 窓・善人・夏	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 わかやま	10 日(日) 午後1時より 人気・広い・仏	和歌山県民文化会館 4F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
西宮北口	11 日(月) 午後1時より 逃げる・平均・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4枚
八尾市民 川 柳 会	12 日(火) 夕6時より 自分・スリル・干す・ねたむ	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎 (1周年句会)
川 柳 ねやがわ	17 日(日) 正午より 他人・銀行・汗・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
もくせい 川 柳 会	18 日(月) 午後1時より 鼻・手紙・細い・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19 日(火) 夕6時より 王座・言葉・底・研ぐ	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
富 柳 会	21 日(木) 午後1時より 相談・粗大・早婚	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
高槻川柳 サークル 卯 の 花	21 日(木) 午後1時より 位置・貝・うどん・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚) 各題2句
南海電鉄 川 柳 部	21 日(木) 夕6時より 橋・砂・夜店	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) (川柳部) 不動産管理部管理課 廣井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1枚
川 柳 東 大 阪	23 日(土) 夕6時より 青い・メモ・困る・昔	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
駒つなぎ 川 柳 会	25 日(月) 夕6時より 酸素・洗い・保護・変調	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
堺川柳会 (第6回「夜市 川柳大会」)	31 日(日) 午前10時より 風船・笛・房・帆・仏 噴水・舞台	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑 会費 4,000円 詳細は87頁参照

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

●募 集●

九月号発表表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選	水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選	愛染帖 (3句) 橘 高 薫風 選	茴香の花 (3句・女性) 八木千代 選	課題吟 (5句) 「力」 渡辺 菩句 選	「記憶」 曾我部 裕 選	「隙」 仲 どんたく 選
------------------	-------------------	-------------------	---------------------	----------------------	--------------	--------------

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りません。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十月号発表表 (8月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選	水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選	愛染帖 (3句) 橘 高 薫風 選	茴香の花 (3句・女性) 八木千代 選	課題吟 (5句) 「勤」 井上 柳五郎 選	「計算」 松 高 秀峰 選	「遠い」 斉 藤 島 選
------------------	-------------------	-------------------	---------------------	-----------------------	---------------	--------------

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友を限らず。

7月の常任理事会は1日(金)

定価 五百円 (送料50円)
 半年分 三千二百円 (送料共)
 一年分 六千三百円 (送料共)
 昭和六十六年六月二十五日印刷
 昭和六十六年七月一日発行
 編集兼 発行人 西 尾 巖
 印刷所 藤 原 童 心 社
 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室
 〒545 発行所 川柳塔社
 電話 (三六) 六一六九一四番
 振替口座 大阪 8133368番

路郎忌 本社7月句会

日時	七月七日(木) 午後六時
会場	メンスファッションセンター3階 東区内本町一―一 電06・941・1918 地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角
兼題	「もつれ」 小 出 智子 選 「瞬間」 玉 置 重人 選 「頑固」 磯 野 いさむ 選 「貫く」 西 尾 栞 選
席題	二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費	五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
 各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
 投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

8月の兼題 「取引」 「都会」
 「波」 「競う」

8月の本社句会は8日(月)

『夜市川柳』募集

第7年度 「銭」 谷垣 史好 選
 第1回 3句・締切 6月末日
 第2回 「答」 土橋 螢 選
 締切 7月末日
 投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九―二
 河内 天笑 方
 堺 川 柳 会

編集後記

☆週刊サンケイ6月8日号はファイナル特大号として発行された。創刊号は昭和27年2月14日号定価20円であった。この雑誌には忘れられぬ思い出がある。

☆当時、私は肺結核の自宅療養を続けていた。俳句や短歌は疲れるとすぐ本を伏せられるから療養者には格好の読物で、文庫本で多くの作品に親しみ、自分よりの句や歌を作っていた。

☆週刊サンケイにも短歌欄があり、選者は吉野秀雄氏、氏も結核療養の経験があったので、何か親近感めいたものを抱き投稿を始める。☆没が続くものの、わが歌が活字になるのを夢見て、発行日には本屋へ駆けつける。しまいは、街の本屋の開くのを待てずに大阪駅の売店へ買いに行く。

☆その頃の週刊サンケイの文芸欄は黄色い紙を使用した頁にあったので、その黄色のところをバツと開くのだが、また載ってない。

☆冬はまだ暗くて寒いうちから出掛けるほどなのに、今度もない。未だにこのように純な熱い期待を持続させたためしは、他になかったように思う。

☆選者の吉野秀雄氏の厳しさを立派だと感じたのは後のことだが、おかしなもので、後年、家政婦派出所から来た臨時のお手伝いさんが、吉野秀雄氏の身近に仕えた方だった。とてもやさしい人だったと述懐されていたが、私には最後まで破れなかった一枚岩の堅固な砦だった。

☆川柳を知り、麻生路郎先生とその作品を知ってから私は、多くの人の指導と引き立てによる活動の顛末を俳句や短歌と川柳の違いを私自身の血が冷静に聞き分けられている。川柳はその断差を生かして生きるべきだ

☆週刊サンケイは「まわり大型誌『スパノ』になり、若作りの装いで現れた。川柳はいうまでもなく、俳句と短歌欄も二度と目に触れ

ることはないだろう。

☆言い訳めくが愛染帖の没が百名を越えた。(薫)

▼現在発行されているテレホンカードを、実際に使用消化するのは何百年かかるか、ご存知の方がおられるすか。郵便記念切手も同じです。それほど無駄なこと

に金を使っているのが豊かさの実態なのです。しかし、それは物や金についての豊かさであって、こころの豊かさは、すこし違うようである。

▼自分が嫌いだから言うのではないが、宝くじなども純な人心を惑わす罪な行為である。また、農林省が監督する国営競馬や地方公共団体主催する公営競馬は「ウマの品種改良・増殖を目的とする」大義名分は成り立つが、やっつてなことはテラ銭稼ぎに外ならない。

▼遊びが悪いと言うのでない。金と暇を使うだけが遊びでない。もつと遊びの本質を知るべきである。最近、よく見聞する働きすぎが原因の過労死も、今こそ

真剣に取り組むべき社会問題の一つである。これも政府や企業に任せられるものでなく、個々それぞれが考

えて解決しなければならぬ性質のものである。▼遊びを罪悪視した時代は過ぎた。最近のカルチャー

ばやりがその現れである。しかし女性が主流で男性の少ないのはどうしたことか。戦前、戦後を通じて働くことを金科玉条の美德として守ってきた、かたくなさが習性となり、女性ほど器用に転換できないのかも知れない。

(き)

☆文芸を嗜むものなら誰しも好きな言葉、嫌いな言葉があるのではないだろうか。先年亡くなった岩田美代さんに句集の編集を頼まれ、句稿を全部お預りして読ませていただいた折、

「彩」という言葉を使った句が際立って多かったのを憶えている。恐らく美代さんは、「彩」が好きだったのであろう。

しかし嫌いな言葉はわりと多い。その一つに「生きざま」がある。「死にざま」

は昔からあるが、「生きざま」が頻繁に使われ始めたのは比較的新しいのではないだろうか。個の川柳」ということが強く主張されたのと時期を同じくして

いるように思われる。☆もう一つは「根性」。花登氏の根性ドラマがテレビの高視聴率を独占した時代があった。説教じみた、あのような芝居がなぜ大受けに受けるのか、不思議でな

らなかつたものだ。そのせいかどうか、花登氏と再婚した星由里子までが「好かん奴」になってしまった。☆好悪の感情というのは、えてして理屈抜き、

「好きやから好き、嫌いやから嫌い」というのが多い。だが私の場合、苦勞らしい苦勞もせず今日まで生きてきたことが無意識のうちに、こうした言葉に拒否反応を起こさせるのではない。そんなふうと考えている。

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマンと
フオーマルと。

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **大ニエスケ**

〒540 大阪市東区南新町 1-13
☎ 06(941) 8 0 1 5

5つの個性・5つの色味!!

アイスクャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
京北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう西商店
京阪モータービル

サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店

なんば新川店
虹のまち店
ドーチ力店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店



大 阪 ・ なん ば



TEL 641-0551